ようこそ心配事が多い教室へ

御米粒

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

極度の心配性なオリ主がヒロインとイチャイチャしながら実力至上主義の教室を生き抜いていくお話。

ヒロインは松下と軽井沢です。

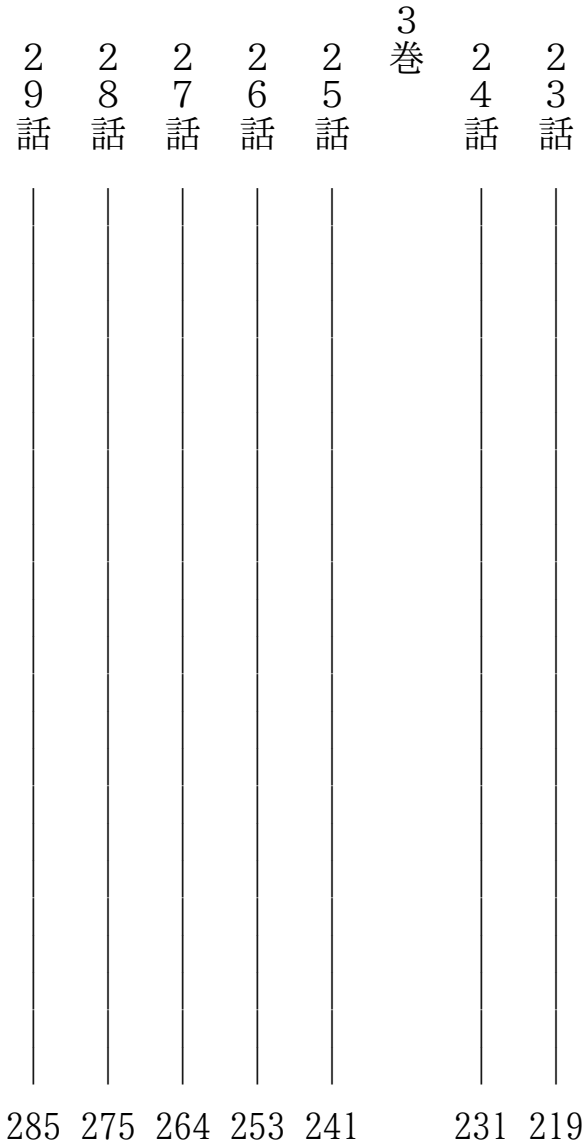
目次

2巻

22話 209
21話 199
20話 188
19話 178
18話 169
17話 158
16話 149
15話 140

1巻

14話 127
13話 117
12話 106
11話 96
10話 86
9話 76
8話 67
7話 56
6話 48
5話 37
4話 26
3話 17
2話 11
1話 1


3巻
29話 285
28話 275
27話 264
26話 253
25話 241
24話 231
23話 219

1巻
1話

桜の花びらが舞う四月某日。
俺は高校生になった。
俺が入学する高度育成高等学校は一切学費がかからない国が経営する学校だ。さらに希望する就職、進学先にほぼ１００％応えるのが謳い文句で、全国から優秀な生徒を募っている。
そんな立派な学校の教室で一人ポツンと着席している生徒がいた。
俺だった。
「さすがに早かったか」
時刻は午前6時５０分。学校からは8時３０分まで来るように通知があったので、１時間半以上も早く登校してしまった。
だがこれでいい。
電車やバスが遅延したり運転見合わせになることを考慮して、早めに前泊したホテルをチェックアウトしたのだ。
国立の学校だから校則が厳しくて、入学初日から遅刻したら停学になるかもしれない。
昨晩。一粒落とされた不安が、心の中で滲んで広がり、それ一色になってしまった。
その不安が解消された俺は眠気に襲われ意識を手放してしまった。
多数の監視カメラが設置されていたので警戒をしていたのに。
俺は三大欲求に負けてしまった。

♦♦♦

起きたら教室は多くの生徒で賑わっていた。
やばい！　完全に出遅れた！
出会いの場では第一印象が大事だと母親に教わったのにやらかしてしまった。

もしかしたら居眠りキャラだと思われたかもしれない。
「あ、起きたんだ」
「……ふぇ？」
声がした方に顔を向けると、そこには美少女がいた。
「私は松下千秋。よろしくね」
「あ、立花恭平（たちばなきょうへい）です。よろしく」
いきなり美少女に挨拶されてドキマギしてしまった。
「うん、よろしくね。立花君は昨日あまり寝れなかったの？」
「いや、早起きして眠たくなって……」
「そうなんだ。ずっと寝てたから気になってさ」
「あー、ごめん」
「ううん。それより立花くんはどこから来たの？」
「俺の出身は――――」
俺と松下が他愛もない話で盛り上がっていると、５分ほどして担任が教室に入ってきた。
「新入生諸君。私はＤクラスを担当することになった茶柱佐枝だ。普段は日本史を教えている」
凄い美人の先生だ。
松下もそうだけど東京は美女が多いのだろうか。
「この学校には学年ごとのクラス替えは存在しない。卒業までの３年間、私が担任としてお前たち全員と学ぶことになると思う」
茶柱先生は続けて資料と端末を配布して、重要事項を次々に説明していく。
Ｓシステムだの１０万ポイント支給だの怪しげな単語や言葉ばかりだ。
俺は一言一句聞き逃さないよう耳を傾けた。
「質問があるものはいないか？」
説明を終えた茶柱先生が問う。
すぐに質問をしようと思っていたが、急に尿意に襲われたので個別に質問することにした。
「質問はないようだな」

よかった。これでたくさん質問されたら危うく漏らすところだった。

入学式まで自由に過ごしていいということなので、俺は茶柱先生より早く教室を出た。

すっきりして教室に戻ると、クラスメイトたちが自己紹介をしていた。

そろりそろりと、松下の隣に並ぶ。

「立花くん、大丈夫？」

「ああ。松下は自己紹介終えたのか？」

「うん。立花くんもした方がいいよ」

「そうだな」

よし。自己紹介で居眠りキャラを払しょくしてやる。

「それじゃ、最後に――そこの君、お願いできるかな？」

仕切ってるイケメンくんに振られたので一歩前に出る俺。

「わかった。立花恭平です。岩手から来ました。中学ではキックボクシングを習ってました」

ちなみに格闘技は好きじゃない。

キックボクシングを習ったのは自分で自分を守れるよう強くなるためだ。

そうすれば万が一いじめにあった際も対処できる。

「趣味は映画鑑賞です。よろしく」

言い終えると、みんな笑顔で拍手をしてくれた。

自己紹介大成功だな。三日前から練習した甲斐があった。

♦♦♦

入学式を終えて教室に戻った俺たちは一通り敷地内の説明を受けて解散になった。

さっそく茶柱先生に質問しようとしたところ、松下からカラオケに誘われた。

早めに疑問と不安を解消させたかったので断ろうとしたが、彼女に

嫌われる方が怖かったので誘いに乗ることにした。
面子は俺、松下、平田、軽井沢、佐藤、篠原の６人。
平田は自己紹介を仕切っていたイケメンくん。軽井沢と佐藤はギャルの美少女。篠原は普通の女子。
カラオケはそれなりに盛り上がった。
事前に最近のヒット曲を調べておいたので、俺の選曲は女子ウケがよかったと思う。
気になったのは軽井沢のボディタッチが多かったくらいだ。
やっぱりギャルは距離感が近いのかもしれない。
知らんけど。
カラオケを終えた俺たちは軽くウィンドウショッピングをしてファミレスで夕食をとることにした。
「今日は楽しかったね！」
佐藤がジュースを片手にはしゃいでる。
「ね！　明日もこの面子で遊ばない？」
「それいいかも！」
軽井沢の提案に篠原が同調する。
「毎月１０万ポイントも貰えるんだから遊び放題だよね！」
それはどうだろうか。
「立花くん、難しい顔してどうしたの？」
松下が顔を覗き込む。
ドキドキするからやめてほしい。
「いや、本当に毎月１０万ポイント支給されるのかなって」
「……え？　なんで？」
真正面に座る軽井沢も顔を近づけてきた。
ギャルはあまり好きじゃなかったけど、軽井沢みたいな美少女ならありかもしれない。
――いや、今は自分が疑問に思っていることを伝えなければ。
「だって茶柱先生は毎月１０万ポイント支給するとは言ってなかっただろ？」
「あっ」

俺の言葉に松下が反応する。
俺は続けて疑問に思っていることを告げた。
敷地内に多数監視カメラが設置されていること。
立ち寄ったコンビニに無料の商品が置いてあったこと。
先輩らしき人たちはポイントの節約について会話していたこと。
以上の点を踏まえて……
「もしかしたらポイントって変動して支給されるんじゃないかって疑問に思ったんだけど」
俺の説明にみんな聞き入ってくれた。
「確かにその可能性は十分考えられるね」
平田が頷きながら言う。
「とりあえず俺は次のポイント支給日までは無駄遣いしないようにする」
「来月の支給日でポイントが変動するかどうかわかるからね。僕も節約するよ」
「立花くんと平田くんがそう言うなら、あたしも節約しようかな」
「軽井沢、節約できるのか？」
「できるし！　あたしをなんだと思ってるの!?」
ギャルだから洋服や化粧品で浪費しそう。
「松下さん、佐藤さん、篠原さんはどうする？」
頬を膨らませた軽井沢が３人に問う。
「私も節約するよ。ていうか１０万も消費したら金銭感覚狂いそうだし」
松下の言う通りだ。社会人になって一人暮らしを始めたら自由に使用できるお金なんて限られる。
「みんなが節約するなら私もするかな」
「佐藤さんと同じく」
あとは茶柱先生に質問をして、疑問を解消するだけだ。
「あ、ほかの人たちにも伝えたほうがいいのかな？」
軽井沢が気が利くことを言ってくれた。
「それは少し待ってくれ。明日茶柱先生に確認するから」

「うん、わかった」
「それじゃ話も終えたことだし帰るか」
「いや、まだ料理きてないじゃん」
「……っ!?」

♦♦♦

翌朝。俺と松下は職員室に来ていた。
目的は茶柱先生に質問をするためだ。
「立花と松下か。朝からどうした？」
谷間を見せつけながら俺たちを見上げる茶柱先生。
「先生に質問があるんですが」
「言ってみろ」
「支給されるポイントって変動しますか？」
刹那。茶柱先生の両目が見開いた。
それと職員室の空気が変わった気がする。
「……悪いがその質問に答えることは出来ない」
質問をはぐらかすつもりだな。
逃がさないぞ！
俺の不安を解消させるためにな！
「支給されるポイントって変動しますか？」
「その質問には答えられない」
「支給されるポイントって変動しますか？」
「だから……」
「支給されるポイントって変動しますか？」
「……」
「支給されるポイントって変動しますか？」
「……しつこいぞ立花」
「支給されるポイントって変動しますか？」
しつこく質問をしてたら松下に頭を叩かれた。
「いてっ!?」

「立花くん、壊れたの!?」
「いや、答えてくれるまで粘ろうかと……」
「粘っても答えてくれないって」
「……なんで?」
「ていうか答えられない時点で、答えが出たようなものでしょ?」
「そうなのか?」
「……立花くんって頭切れるのに、お馬鹿なの?」
「俺は馬鹿じゃない」
「それより時間がないんだから他の質問をしないと」
「は、はい……」
お淑やかに見えて暴力的な松下に怯えながら、俺は次の質問を口にする。
「次に敷地内に設置されている監視カメラって生徒たちの授業態度や普段の行動を監視して評価するためですか?」
「それも答えれない」
「クラス替えがないのってポイントに関係あります?」
「それも答えられない」
「コンビニに無料の商品が置いてあるのはポイントがない生徒への救済措置ですか?」
「それも答えられない」
「定期テストで赤点を取ったり、授業態度が悪いと退学になったりしますか?」
「それも答えられない」
「敷地内に交番があるのは治安が悪いからですか?」
「それも答えられない」
「ちょくちょくヤンキーっぽい生徒を見かけるんですけど、問題児も受け入れてるんですか?」
「それも答えられない」
「可愛い子が多いのは容姿も試験の対象だったからですか?」
「それも答えられない」
「先生は独身ですか?」

「……独身だ」
やっと答えてくれたよ……。
ていうか茶柱先生って独身なんだ。
「ありがとうございます。質問は以上です」
「そうか……」
多めに質問を受けたからか、茶柱先生は疲労困憊のようだ。
「また疑問が涌いたら質問してもいいですか？」
「構わない。答えられるかはわからないがな」
不敵な笑みを浮かべる茶柱先生。
「朝早く失礼しました」
丁寧にお辞儀をして俺たちは職員室を後にした。
男の先生と話している眼鏡男子に睨まれたような気がしたが、何かやらかしてしまっただろうか。
次に見かけたら確認してみよう。
「立花くん、質問しすぎじゃない？」
隣りを歩く松下は呆れた様子だ。
「いや、確認しないと不安だし」
「そうだけど……。でもこれでポイントは変動する可能性は高くなったね」
「茶柱先生が肯定も否定もしなかったってことは……やっぱりそうなのか？」
「だと思うよ。もしまだ気になるなら適当に先輩を捕まえて聞いてみる？」
「そうだな」
「わかった。私も付き合うよ」
「いいのか？」
「うん。私がいないと立花くん、先輩を質問攻めにしそうだし」
「うっ……」
そういえば小中学校でも担任に質問攻めをして怒らせたことがあったっけ。
「とりあえず教室に着いたら平田くんたちに報告しないとね」

「だな」
教室に戻った俺たちはすぐに平田たちに結果を伝えた。
ポイントの変動について、確定ではないが、ほかのクラスメイトにも情報を共有することにした。
男子には平田、女子には軽井沢から説明してくれるらしい。
半数以上の生徒は信じてくれたけど、一部の生徒は平田たちの説明を聞き流していた。
「ちょっといいかしら」
「ん？」
昼休み。弁当を食べようとしたところ、黒髪ロングの美少女が話しかけてきた。
「……なんだ？」
「ポイントが変動する考えを思いついたのはあなたかしら？」
「考えというより、疑問が湧いただけなんだけど」
「……そう」
名前は知らないけどこの子も美少女だ。
松下と同じく上品な感じで、松下よりクールに見える。
美少女はそのまま自席に戻っていった。
「堀北さんとなに話してたの？」
お手洗いから戻ってきた松下が隣に座った。
「いや、ポイントの変動について聞かれて」
「ふーん。あの人もちゃんと話聞いてたんだ」
「軽井沢の説明のことか？」
「うん。なんか聞き流してる風に見えたから」
「まあクールそうだよな」
「そうだね。……立花くんはああいう子が好み？」
「いやぁ、冷たい感じがするからちょっと苦手かも」
「……そっか」
容姿ならドストライクだけど。
俺は長髪でスリムな子が好きなのだ。
このクラスなら松下、堀北、佐藤、軽井沢あたりか。

「それよりさっそくお弁当にしたんだ？」
「ああ。まずは食費から節約しようと思って」
「私は結局コンビニのパンにしちゃった」
松下は苦笑いを浮かべ、鞄から焼きそばパンを取り出した。
「松下は料理しないのか？」
「多少はするけど、昨日は入学初日だったから疲れちゃって」
「そうだよな」
俺はスーパーで無料の商品をたくさん買ってしまったので、賞味期限内に消費しないといけない。
「明後日くらいから私も弁当作ろうかな」
「いいんじゃないか」
「うん。ならおかず交換でもしようよ」
「いいなそれ」
近い未来に期待を膨らませ俺は松下との時間を楽しんだ。
松下との会話に夢中になりすぎたのだろう。
俺は気づけなかった。
軽井沢が俺を値踏みしていることに。

2話

放課後。何人か先輩を捕まえてポイントの変動について質問をしたが誰も答えてくれなかった。

松下の上目遣いで落ちそうな先輩もいたが、結局収穫はなかった。

「みんな頑なに答えてくれなかったな」

「かん口令が敷かれているのかもしれないね」

「かん口令？」

「うん。後輩に伝えたら罰則があるのかも」

「なるほど」

俺を頭が切れると評価してくれた彼女だが、明らかに松下の方が頭が切れる。

「来月に答えが出るのを待つしかないね」

「そうだな」

早く答えが知りたいけど我慢するしかない。

「まだ16時だけど、どこか寄ってく？」

「なら図書室に寄っていいか？」

「いいけど……本好きなの？」

「そこまでは。ただ読書ならお金かけないで暇つぶしできるから」

「確かに。私も何冊か借りようかな」

「松下は読書するのか？」

「人気作くらいだけどね」

高度育成高校の図書室はスケールが大きかった。

広さはもちろんだが、ラインナップも充実している。

司書に聞いたところ、新刊は発売日当日に入荷され、若者に人気のライトノベルも揃えているらしい。

そんな立派な施設だが生徒はまばらだった。恐らく部活動説明会の影響もあったのだろう。

俺と松下は何冊か本を借りて図書室を後にした。

途中ですれ違った銀髪の美少女に見惚れていたら松下に足を踏まれてしまった。

♦♦♦

入学してから一週間が過ぎた。
特に大きな問題もなく俺は平和な学校生活を送っていた。
朝は茶柱先生に質問をして、日中は真面目に授業を受け、昼休みは松下と一緒に弁当を食べ、放課後は松下や軽井沢とウィンドウショッピングをしたり、スーパーに寄ったりしている。
見た目がギャルの軽井沢だが、意外なことに料理が得意らしい。
ちなみに平田はサッカー部に入部したので放課後は遊べなくなってしまった。
平田しか男子の友達がいないのに……。
「しかし池くんたちにはまいったもんだね」
放課後。俺と松下は教室で時間を潰していた。
「俺と平田が言っても無視されちゃうしな」
なぜか俺と平田は池たちに嫌われている。直接話したことはないけど、気づかないうちに不快な思いをさせてしまったんだろうか。
「仕方ないよ。池くんはイケメンが嫌いみたいだし」
「……俺イケメンなの？」
「顔は整ってる方だと思うよ」
「……」
生まれて初めて女子にイケメンと言われた。
「あとは女子とばかり絡んでるから妬まれてるのかもね」
イケメンか。
なんていい響きなんだろう。
「立花くん、聞いてる？」
「ああ。俺はイケメンでＢＴ○並の人気があるってことだろ？」
「なにを言ってるの？」
俺はイケメンだから身だしなみもこれから気をつけないとな。
帰りに松下にワックスや化粧水を選んでもらおう。
「立花くん、ちゃんと聞いて」

「あ、はい」
「池くんたちなんだけど、櫛田さんから注意してもらおうと思うんだけど」
「櫛田？」
「うん。立花くんも連絡先交換したでしょ？」
「そういえば」
櫛田桔梗。自己紹介でクラスメイト全員と友達となりたいと言ったらしい。
有言実行タイプのようで、ほぼ全員と連絡先を交換したようだ。
誰にでも優しく、可愛らしい容姿も相まって、男子からの人気も絶大だ。
ただ俺はそんな櫛田が苦手だ。
理由は簡単。
中学時代に櫛田に似た女子がいたのだが中身が腹黒だったのだ。
天使と言われていた彼女は毎日クラスメイトの愚痴を吐いていた。
なぜそれを俺が知ってるかって？
それは俺が幼馴染で、俺の部屋で愚痴を吐いてたからだよ。
そんな彼女は名門女子高に進学したが、今も新しいターゲットに愚痴を吐いてることだろう。
「櫛田さんから言ってもらえば池くんたちも真面目に授業を受けると思うんだよね」
「確かに」
池と山下だっけ？　櫛田がいないところで彼女の話でよく盛り上がっている。
「ポイントの変動が個人単位ならいいんだけど、クラス単位なら無視できない問題だからね」
「クラス単位ならけっこうポイント減ってそうだな……」
池と山下は授業中にゲームをしたりあれこれとよく喋っている。
赤髪のバスケ部のやつは遅刻したり、授業中に居眠りをしている。
つまりクラスのガンである。
「せめてポイントの増減がわかればな」

ほぼ毎日茶柱先生に質問をしている俺だが、途中からポイント変動があることを前提として質問するようになった。

今朝。だめもとでエクセルで作成したポイント増減リストを茶柱先生に渡したがそのまま突き返されてしまった。

「これで来月のポイントが大幅に減ってたら、池くんたち居場所なくなっちゃうね」

心配をする言葉とは裏腹に、冷酷な笑みを浮かべる松下。

「ただでさえ女子から嫌われているのにどうするんだろうね」

「やっぱ嫌われてるんだ？」

「当たり前じゃん。噂だと女子たちの巨乳ランキング作ってるみたいだし。マジキモイ」

「お、おう……」

「立花くんは参加したりしてないよね？」

「してません」

松下が怖い……。

しかし池たちの言動は男子の俺でも引くな。

特に池は早く彼女を作りたいと言っているが、本当に作る気があるのだろうか。

もし本気でそう思っているなら、彼のサイコパスの部類に入るだろう。

このまま一切関わらない方がいいかもしれない。

♦♦♦

その日の夜。夕食を済ませ日課の瞑想をしていたところ軽井沢から連絡があった。

何やら重要な話をしたいようで、今から俺の部屋に来るらしい。

なんでこんな時間に異性の部屋に来るんだ？

俺はあらゆる可能性を考え、３０分ほど待つよう軽井沢にお願いをした。

急いで部屋を掃除し、シャワーを浴び、寝間着から私服に着替えた。

３０分後。本当に軽井沢が部屋にやって来た。
「お邪魔しまーす」
「お、おう」
軽井沢はピンクのパーカーにショートパンツと、これでもかと生足をさらけだす格好だった。
ありがとうございます。
「急にごめんね？」
「いや、大丈夫だ」
客用の座布団がないのに気づいたのか、自然とベッドに座る軽井沢。
「なにか飲むか？」
「ううん、大丈夫」
「そっか」
「うん」
どこに座るか迷ったが、隣に座る勇気がなかったので、結局座布団に腰を下ろすことにした。
「それで話って？」
「うん。あのさ……立花くんって松下さんと付き合ってたりする？」
「……へ？」
俺と松下が？
確かに気が合うし、一緒にいても疲れないし、心配性な俺を気遣ってくれる。
あれ？　松下って最高の女じゃないか？
「いや、付き合ってないぞ」
まだ出会ってから一週間だ。
このまま関係が深まれば彼氏彼女の関係になれるかもしれない。
なにせ松下は俺のことをイケメンだと思ってるからな。
ふふん。
「……そっか。付き合ってないんだ」
「それがどうかしたのか？」
なんで軽井沢は俺と松下の関係を気にしているんだ？

俺に気があるのか？
それとも俺に松下が取られると思って嫉妬しているのか？
「えっとね……」
俺が問うと、軽井沢の両目が泳ぎだした。それに連動するように両手をこすり合わせる。
生足に心を奪われていた俺でも気づくほど軽井沢の様子がおかしい。
「あ、あの……」
「ん？」
薄着だから風邪でも引いてしまったのだろうか。
顔も赤いような気がする。
風邪薬を取り出そうと腰をあげようとした瞬間だった。
「あたしの彼氏になってくれない？」
立花恭平。１５歳。
生まれて初めて女子に告白をされた。

3話

生まれて初めて女子に告白をされた。
相手の名前は軽井沢恵。
同じクラスのギャル系美少女だ。
小柄だがスタイルはいいほうで、やや強気な性格をしている。
そんな彼女に俺は告白をされた。
松下にイケメンと評価されて少しは自信がついた矢先の出来事である。
まだ出会って一週間しか経ってないのに惚れられるなんて。
……いや、待て。
俺と軽井沢は出会ってまだ一週間だぞ。
俺は出会って一週間で惚れられるような美男子だったか？
違う。
だって恋人いない歴＝年齢じゃないか。
それに軽井沢はボディタッチが多いが、無理して男慣れしている演技をしているように思える。
だって間接キスで顔を真っ赤にするくらいだ。
俺も真っ赤になっていたようだが……。
とにかく、そんな軽井沢が一週間で俺に惚れるはずがない。
なら彼女が俺に告白をした理由は一つ。
「軽井沢」
「な、なに……？」
「誰に負けた罰ゲームだ？」
「え」
恐らく普段俺に弄られている佐藤あたりとゲームでもして負けたのだろう。
敗者になった軽井沢は罰ゲームで男子に告白をすることになった。
そして平田より悪戯しやすい俺を標的にしたんだ。
危なかった。
告白を真面目に受けて恥をかくところだったぜ……。

「いや、罰ゲームじゃないんだけど」
「……佐藤に弱みでも握られたのか？」
「なんでそこで佐藤さんが出てくるのよっ!?」
違うのか。
なら軽井沢は本当に俺のことが好きなのか？
「まぁ、正確には彼氏のフリをしてほしいっていうか……」
彼氏のフリだと？
となると軽井沢は男よけが欲しいのか。
確かに軽井沢のルックスなら言い寄る男子も多そうだ。
友人との恋愛関係のトラブルを事前に防ぎたい思いもあるかもしれない。
とりあえず事実確認をしておくか。
「軽井沢はもう男子に言い寄られてるのか？」
「……なんでそんなこと聞くわけ？」
「いや、俺を男よけにしたいんだろ？」
「男よけ？」
「ああ。軽井沢は可愛いだろ」
「ふぁっ!?」
「だから男子たちに言い寄られないように男よけが欲しい」
「か、可愛いって……」
軽井沢の様子がおかしい。
誤って間接キスをしたときのように顔が真っ赤だし、息も荒い。
もしかして容姿を褒められることに慣れていないのか？
いや、軽井沢のルックスなら言われ慣れてると思うのだが。
「きゅ、急になに言ってんのよっ！」
「なんで怒ってるんだよ？」
「立花くんがいきなり可愛いって言うからでしょ！」
容姿を褒めたら怒られたぞ。
やっぱり女子は難しいな。何を考えてるのかわからない。
「とりあえずあたしの話を聞いてよ」
「わ、わかった」

軽井沢はそう言うと深呼吸をして、俺の真正面に座り直した。
そして俺の瞳をまっすぐに見つめ、口を開いた。
「あたしさ、中学校でずっと虐められてたんだよね……」
「……軽井沢が？」
「うん」
衝撃の過去を打ち明けられ、俺は小さな衝撃を受けた。
軽井沢ほどの美少女でも虐められてしまうのか。
いや、もしかしたらルックスが原因だったのかもしれない。
「それは軽井沢のルックスに対する嫉妬が原因か？」
「そういうの言われ慣れてないんだからやめてよっ！」
「……ごめんなさい」
「本当やめてよね……」
シリアスな空気をぶち壊してしまった。
やばい。
このままじゃＫＹだと思われるかもしれない。
しばらくは質問するのを止めよう。
「原因はいろいろあるんだけど、一番はリーダー格の女子と性格が合わなかったことかな」
中学時代を思い出したのか、憂いを帯びた顔をする軽井沢。
「最初は同じグループだったんだけど、その子と喧嘩してからグループからハブられるようになって、最終的にいじめに発展した感じ」
「最初は友達だったんだな」
「うん。だから余計にあたしのことを憎むようになったのかなぁ」
「そいつに卒業までずっと虐められたってことか？」
しまった。また質問をしてしまった。
でも今回の質問はセーフのようだ。
軽井沢はすぐに答えてくれた。
「そうよ。何をされたか教えてあげる。上履きに画鋲、机の引き出しに動物の死骸。トイレに入れば汚水をかけられたり飲まされたりした。制服には淫乱だの売女だの書かれる」
バイタ？

どういう意味だろう。
質問したいけど、ここで質問したらまた怒られそうだから我慢だ。
「髪を引っ張られたり、殴る蹴るは当たり前、考えられるいじめは全部受けてきた」
「……そうか」
「ちなみに今言ったことは、ほんの一握り。笑ってしまうくらい優しいものよ」
となるとリンチだったり、性的な被害を受けたのだろう。
よく自殺しなかったな。
俺の学校もいじめはあったが、軽井沢が言うほど酷いものじゃなかった。
もちろんいじめに軽いも重いもないのだが……。
「驚いた？」
「そりゃまぁ」
仲良くしていた女子に凄惨な過去があったなんて。
これで驚かなかったら人間じゃないだろう。
「だからあたしはこの閉鎖的な学校に来たの」
「高校でやり直すためか？」
「そう。高校では中学時代のような失敗は絶対にしたくない」
「この学校に軽井沢の過去を知ってる人間はいないのか？」
「うん。あたしの中学からこの学校に進学したのはあたし一人だから」
「そうか」
つまり軽井沢の過去を知ってる人間は俺一人ってわけだ。
「立花くんにはあたしの彼氏になって……あたしを守ってほしいの」
「守るって軽井沢がいじめられないようにって意味か？」
「そう」
「軽井沢を守るのはいいけど、なんで俺と付き合うフリをしたいんだ？」
「立花くんって自分の立場理解してる？」
「え？」

「してないんだ」
呆れたように溜息をつく軽井沢。
なんで俺呆れられてるの？
そもそも俺の立場ってなんだよ。
質問しすぎて担任にうざがられ、同性の友人は平田一人で、可愛い女子と仲がいいくらいの立場だぞ。
「立花くんってけっこう人気あるのよ？」
「俺が？」
「そうよ。クラスはもちろん、ほかのクラスの女子からもそれなりに人気あるみたいよ」
「……なんで？」
「まず一番の理由は平田くんと仲が良いから。二人で行動することも多いでしょ？」
「そりゃ男子の友達は平田しかないから」
「そろそろ平田くん以外にも同性の友達作った方がいいと思うけど」
「……言われなくてもわかってる」
そんなの俺が一番わかってる。
「話戻すけど、平田くんってかっこいいし優しいじゃない？」
「そうだな」
「しかもサッカー部だから運動神経もいいだろうし」
「間違いない」
「そんなハイスペックな平田くんに瞬く間に他クラスの女子にもファンが出来たみたいでね」
「マジかよ」
「マジ。櫛田さんが言ってた」
「櫛田か……」
「それで、そんな人気者の平田くん一緒にいれば、注目されるでしょ」
「……なるほど」
「それに立花くんもそれなりにイケメンだし」
松下に続いて軽井沢にもイケメンって言われた！
ますます自信がついてしまうじゃないか。

「……なにニヤけてんの？」
「な、なんでもない。続けてくれ」
「第二の理由だけど、立花くんって入学初日からあたしたちとも仲良くなったでしょ？」
「そうだな」
「やっぱり入学初日から女子と仲良くしてると注目されるみたいよ」
「そうなのか？」
「うん」
「……それで理解してくれた？」
「理解はしたけど。……なら俺より平田の方がいいんじゃないか？」
「確かにルックスや人気を考えれば平田くん一択なんだけど」
「酷い」
確かに事実だけれど、本人に言う必要ないだろうが。
軽井沢は傷心の俺を気にすることなく、説明を続けた。
「立花くんのほうが平田くんより頭が切れるから」
「松下も俺を頭が切れると評価してくれたけど、俺は極度の心配性なだけだぞ？」
俺が不安や疑問に思ったことを口にして、松下が解決策を導き出す。
つまり一番の切れ者は松下なのだ。
「でもこの学校はその心配性な性格が活きるとあたしは思ってるんだよね」
確かにそうかもしれない。
これからの学校生活を考えると、何に対しても疑問を持った方が安全だ。
いつ落とし穴があるかわからない。
極度の心配性が原因で生き辛いと感じていたが、初めて俺の性格が活きるかもしれない。
「最終的に平田くんじゃなくて立花くんがクラスのリーダーになるとあたしは思ってる」
評価してくれるのは有り難いけど、リーダーになるのは嫌だ。

そもそもリーダーって何だろう。
この学校は学級委員がないから、精神的な立場みたいなもんか。
「だからあたしは立花くんの彼女になって、自分の地位を上げたいの」
「クラスカーストってやつか？」
「そうね。立花くんの彼女になればトップカーストは安泰でしょ？」
「結果的にいじめのターゲットにされる可能性が低くなる」
「正解」
軽井沢にとってこれが最善の策だと思ってるのだろう。
俺の彼女になれば軽井沢自身も注目され、カースト上位になることは理解した。
だがカースト上位になれば、新たな悩みも出来るんじゃないか。
それに嫉妬からいじめに変わる可能性も考えられる。
なんか自分が人気者前提で考えてるから恥ずかしいけど。
「ようは軽井沢はいじめとは無縁な平和な学校生活を送れればいいんだよな？」
「うん。虐められなければなんでもいい」
「なら付き合うフリをするのはやめた方がよくないか？」
「なんでよ？」
「もしかしたらお互い本当に好きな人が出来るかもしれないだろ？」
軽井沢には悪いけど俺は松下のことが気になっている。
もちろん今回の話を聞いて、軽井沢を守りたいという気持ちも芽生えた。
もし俺と軽井沢が恋人を演じれば、松下と付き合える可能性もなくなるだろう。
まだ好きかわからないけど、その未来が閉ざされるのは嫌だった。
「それはない」
「え……？」
「あたしは好きな人なんていらない。甘酸っぱい青春なんて期待してない」
軽井沢はそこまで覚悟を持ってこの学校に入学したのか。
だが考えが甘いぞ軽井沢。

「軽井沢」
「なによ」
「お前が甘酸っぱい青春を期待してなくても、男子たちはわからないぞ」
「……男子たち？」
「いいか？　お前は美少女なんだ」
「……っ」
「ギャルが苦手な俺でも可愛いと思えるほどの美少女だ」
「ちょっ、やめ……」
「ギャル好きの男子ならたまらないだろうな」
そういえばアニオタのクラスメイトが「最近はオタクに優しいギャルが人気でござる」とか言ってた。
アニメは詳しくないけど、二次元でもギャルは人気のようだ。
「これから軽井沢を求める男子が出てくるかもしれない。いや、間違いなく出てくるだろう」
「あ、あたしを求めるっ!?」
見る見る顔が茹でタコ状態になるギャル。
こんな反応するから普段から俺に弄られるんだぞ。
「今は恋愛に興味なくても、強く言い寄られたらわからないだろ？」
「そ、それは……そうかもしれないけど……」
「だから俺と恋人のフリをして、一つの可能性を潰すのは悪手だと思う」
「で、でも……」
わかるぞ。
不安なんだろう。
不安で不安で仕方ないんだろう。
「大丈夫だ。恋人のフリをしなくても軽井沢が平和に学校生活を送れるように俺が守るから」
軽井沢は中学時代のいじめで心が折れたに違いない。
その折れた心を何とかくっつけて、この高度育成高校に来たのだ。
「本当に……守ってくれるの？」

潤んだ瞳で俺を見上げる軽井沢。
守るに決まってる。
もし軽井沢が高校でもいじめにあって、再び心が折れてしまったら？
二度とくっつかないほど心がバラバラに砕け散ってしまったら？
彼女は自分の命を投げ出すんじゃないか？
高度育成高校は卒業まで外部と接触が禁止である。
つまり家族とも連絡が取れないのだ。
凄惨な中学時代でも、家族がいる家だけは安らげる場所だったはずだ。
だが高校では寮で一人暮らし。
もしかしたらいじめっ子が軽井沢の部屋を占領するかもしれない。
そうなると軽井沢が安らげる場所はなくなってしまい、中学時代より心が壊れてしまうだろう。
結果、最悪な結末を迎えてしまう可能性がある。
そうならないためにも、軽井沢をいじめの被害者にするわけにはいかない。
「ああ。必ず守るぞ」
こうして俺は大きな心配事を抱えることになった。
軽井沢恵。
彼女が平和に学校生活を送るための戦いが始まった。
それより先ほどパーカーが捲れてちらっと彼女の脇腹が見えた。
一瞬だったのではっきり見えたわけじゃないが。
切り傷があったような……。
まさか自傷癖はないよね？
必死に涙を拭う彼女を見つめながら、俺の不安は大きくなっていった。

4話

軽井沢が泣き止むまで何分経っただろうか。
俺は彼女の頭を撫でたり、抱きしめたりもせず、ただ上着に隠された手首を凝視していた。
「ごめん……。急に泣いちゃって……」
瞳を赤くした軽井沢が申し訳なさそうに言う。
「気にするな」
それより軽井沢の手首が気になる。
もし手首にリストカットの傷跡があれば、脇腹の傷跡も自分でつけた可能性が高くなる。
逆に手首に傷跡がなければ、事故か何かで負ってしまったのだと納得できる。
……いや、待て。
軽井沢は俺に告白したいじめの内容はほんの一握りで優しいものだと言っていた。
俺には十分酷い内容だったが、あれより悲惨な被害だと傷跡が残るくらいの暴力や性的暴行が考えられる。
まさか中学の同級生に刃物で傷つけられたのか？
最近の中学生ってそこまでエグイことをするのだろうか。
わからない。
岩手の田舎で育った俺にはわからない。
急に都内在住の学生が怖くなってきた。
現在、俺も都内在住の学生だけど。
とりあえず軽井沢に自傷癖がないか確認をしなければいけない。
確認しないと彼女の手首が気になって気になって仕方ない。
しかしどうやって確認する？
本人に直接確認するのはアウトだ。
そんなデリカシーがないことは聞けない。
どうにかしてパーカーを脱がせよう。
衣替えまで待つ選択肢もあるが、まだ4月の上旬だ。先が長すぎ

る。
　それに不安は放っておくとどんどん大きくなる。
　ただでさえこの学校は心配事が多そうだから、軽井沢の手首のは今のうちに確認しておきたい。
　ならばやることは一つだ。
「しかし4月だっていうのに今日は暑いな」
　まずは暑さをアピールしてパーカーを脱がせる作戦だ。
「特に暑くないけど」
　くそ失敗した！
　暖房をつけておけばよかった！
　だがまだパーカーを脱がせる方法はある。
「悪い悪い。暑いと寒いを言い間違えてしまった」
「う、うん……」
「今日は寒いな」
「確かに涼しいかもね」
「そんな薄手のパーカーじゃ寒いだろ。俺の上着を貸してやろうか？」
「いや、これで十分だけど。それに薄手じゃないし」
「……そうか」
　またもや失敗！
　軽井沢が寒がりだったらうまくいったのに！
「さっきからどうしたの？」
　懐疑的な目を向ける軽井沢。
　仕方ない。
　ここはいったん撤退だな。
「何でもない。とりあえずこれからの話をするか」
「これからの話？」
「軽井沢を守るって言っただろ。その話だよ」
「あ、うん」
　軽井沢は頬を紅潮させ頷く。
「まだ入学して一週間しか経ってないけど、女子もある程度グループ

は出来ただろ？」
「そうね」
「軽井沢がわかる範囲でいいから教えてくれないか？」
「わかった。あたし、松下さん、佐藤さん、篠原さんのグループはわかるでしょ？」
「もちろん」
「あとは櫛田さんが中心としたグループ。櫛田さん以外は大人しい子が多いと思う」
　櫛田は王、井の頭と一緒にいることが多い。
　確かに見た目は大人しそうな子たちだ。
「次に小野寺さんのグループ。運動部に所属してる子が多いかな」
「運動部か」
　軽井沢は続けて女子のグループを説明してくれた。
「最後にどこのグループにも入ってないのが堀北さん、佐倉さん、長谷部さんね」
「教えてくれてありがとう。ちなみにグループ間同士でトラブルはあったりしないよな？」
「ないない。さすがに一週間で衝突したりしないって」
「だよな。ちなみに相性悪そうな人はいるか？」
「今のところ堀北さんくらいかな」
「逆に堀北と相性いい人いるのか？」
「いないかもね」
　苦笑を浮かべる軽井沢。
　ちなみに俺は堀北とはポイントの質問をされてから絡んだことはない。
　たまに隣の席の男子と話すようだが、親しい生徒はいない。
　コミュ力おばけの櫛田でも仲良くなれないようだから、俺や軽井沢が堀北と親交を深めることはないだろう。
「現状は友人関係で問題はなさそうだな」
「うん」
「恐らくこのままいけば女子のスクールカーストのトップは軽井沢か

櫛田になると思う」
　容姿やコミュ力を考えれば松下がトップでもおかしくないが、彼女は一歩引いて見守るタイプだ。
　軽井沢のグループでも佐藤や篠原の手綱をうまく握っている。
「いじめられっ子のあたしがスクールカーストトップって笑っちゃうわよね」
「過去を無視すれば軽井沢の容姿や性格なら当然だと思うけど」
「……だからほめ過ぎだってば」
　軽井沢が何か呟いたようだが、俺は考え事をしながら話してるので聞き取れなかった。
「とりあえずこのままでいいんじゃないか？」
「本当に？」
「ああ。俺や松下たちと仲良くしつつ、他のグループの生徒たちともたまに遊んだりすれば大丈夫だろう」
　他グループとの繋がりは櫛田が取り持ってくれるだろう。
「あとは……絶対いじめはするなよ？」
「わかってるわよ」
「気弱な子たちに高圧的な態度もＮＧだからな」
「……うん」
「軽井沢なら必要以上に強く振る舞わなくても問題ない」
「そ、そうかな……？」
「ああ。ちょっと強気なくらいの方が可愛らしく見えるってもんだ」
「ふぁっ!?」
　スクールカーストトップだからといって高圧的な態度を取り続けると痛い目を見る可能性は高くなる。
　些細なことがきっかけで立場を失った女子を見たことがある。
　軽井沢にはスクールカーストトップを維持しつつ、櫛田の次くらいに頼りにされる存在を目指してもらおう。
　そうすれば彼女がいじめの被害にあう可能性はぐんと低くなる。
「軽井沢」
「ひゃっ!?」

俺は両手で彼女の華奢な左手を握った。
「明日から頑張ろうな！」
「は、はひっ……」
彼女の左手を握りしめたまま、ぶんぶんと上下に揺らす。
ちなみに軽井沢の手を揺らしているのは、しっとり吸い付いてくるような彼女の手の感触を味わうためではない。
パーカーの袖をずらし、手首を確認するためだ。
軽井沢は右利きなので、リストカットをするなら左手首にするはずだ。
「あわわ……」
急に手を揺らされて軽井沢が戸惑っているが我慢してもらう。
何度も上下に揺らしているとだぼだぼだったせいか勢いよく袖が捲れ上がった。
「なにかあったら絶対守るからな！」
軽井沢の左手首には――――傷跡はなかった。
むしろ透き通るような白さに心が奪われそうになった。
危うくその白さを守るために、日焼け禁止令を発令させるところだった。
「ちょっ、離してよっ……！」
「あ、悪い」
目的は達成した。
これで安心して寝られる。
「いきなりなにすんのよ！」
「悪い。つい興奮してしまった」
「こ、興奮って……」
軽井沢が身構えながら俺から距離を取る。
「そっちの興奮じゃないぞ？」
結局、軽井沢はポニーテールを勢いよく揺らしながら部屋を後にした。
どうやら手を握る行為は彼女にとって許容範囲外だったらしい。
帰り際に「そういうのは付き合ってからにしてよね」と怒鳴られて

しまった。
まったく純情乙女すぎて困るぜ。

♦♦♦

「茶柱先生、おはようございます！」
「今日も来たのか……」
翌朝。日課のごとく俺は茶柱先生に質問するために職員室に来ていた。ちなみに松下は寝坊したとのことで今日は俺一人だ。
俺の質問タイムは職員室内で当たり前の光景になっているようで、くすくす笑っている先生がちらほらいらっしゃる。
「今日の質問はなんだ？」
「はい。今日の体育は水泳なんですけど、四月なのに水泳の授業をするのは何か理由があるんですか？」
「それには答えられない」
「つまり何か意味はあるってことですね。ありがとうございます」
茶柱先生が答えられない場合は肯定と捉えている。
「はぁ。ほかに質問は？」
「今日は一つだけです。教室に戻ります」
「ああ。遅刻しないようにな」
「はい。それでは失礼します」
丁寧にお辞儀をしてから踵を返す。
「きゃっ」
タイミング悪く俺の背後を通ろうとした女子生徒とぶつかりそうになってしまった。
「あ、すみません」
「いえいえ。私の方こそすみませんでした」
お団子ヘアの女子生徒は後ろに仰け反っただけだった。
「確か立花くんですよね。毎朝茶柱先生に質問しに来るという」
「はい。立花恭平と申します」
先輩のようなので敬語で名乗る。

「私は橘茜です。漢字は違いますけど同じたちばなですね」
「はは、そうですね。それより俺のこと知ってるんですね」
「生徒会でも立花くんは有名ですので」
「橘先輩は生徒会の方なんですか？」
「はい。一応書記を務めてます」
「そうなんですね」
生徒会か。
よし。明日は生徒会について質問をしよう。
「立花」
「「はい」」
同じ苗字なので二人同時に返事をしてしまった。
「一年の立花だ」
「俺ですか？」
「前もって言っておくが、生徒会に所属したらポイントを貰えるのか、という質問も答えられないからな？」
「うっ」
質問を予測されてしまった。
茶柱先生は全力で俺の質問を阻止するつもりのようだ。
「……わかりました。それじゃ教室に戻ります。橘先輩、失礼します」
「は、はい。また話しましょうね」
「ぜひ」
改めて茶柱先生と橘先輩に挨拶をして職員室を後にする。
「生徒会でも有名って、やっぱり質問してばかりだから目立つんだろうなぁ」
そうぼやきながら教室を目指す俺。
あれだけ毎日質問をすれば悪目立ちするのはわかっている。
だが悪目立ちして居心地悪くするより、疑問や不安をそのままにしておく方が嫌なのだ。
疑問と不安が解消するなら、居心地の悪さなんて甘んじて受け入れる。

♦♦♦

教室に戻るといつも以上に騒がしかった。
「おはよう」
隣人の松下が胸元で小さく手を振りながら挨拶をしてきた。
「おはよう。今朝は騒がしいな」
「プールの授業があるからね」
「……ああ、前に言ってた巨乳ランキングか」
「そう」
げんなりした顔の松下。
もちろん松下以外にも何人もの女子がげんなりしたり、呆れ顔をしたり、騒ぎの中心の池と山下を睨んでいる。
「しょうがない。俺が注意してくる」
平田は朝練があるのか教室にいなかった。
「放っておけば」
「でもポイント下がったら困るし」
「そっか」
この教室にも監視カメラは多数設置されている。
池たちの下ネタ発言でポイントが減らされたら馬鹿らしい。
「おーい」
黒板の前で騒いでいる池たちに声をかける。
「……なんだよ」
「リア充はこっちくんな」
俺に声をかけられ不機嫌な様子の池と山下。ほかに須藤、アニオタ、堀北の隣人もいる。
初めて間近に堀北の隣人を見たが、なかなかどうして。
かなりのイケメンじゃねえか！
顔の作りなら平田と同格。
なんでこんなイケメンに今まで気づかなかったんだ。
根暗そうで影がある感じがいまいち目立たない理由かもしれないな。

「なにしに来たんだよ？」
池の問いに本来の目的を思い出す。
「あー、女子たちがそういうの気持ち悪いからやめろってさ」
「……へ？」
事実を告げられフリーズする池たち。
まさか自分たちの行動が不快を与えていることに気づかなかったのか？
こいつら頭おかしいんじゃないか？
「う、嘘ついてんじゃねーよ！」
山下が反論してきた。
なんでみんなの視線に気づかないんだ。
「いや、女子たちの顔を見ればわかるだろ」
そう言われた池たちは恐る恐る俺の背後に視線を向けた。
そこには先ほどと同じように池たちを軽蔑した眼差しが揃っていた。
「うぐっ」
ようやく自分たちの過ちに気づいたようで池たちの顔が一瞬で青ざめた。
仕事を終えた俺はすたすたと自席に戻る。
松下からは「お疲れ」と労われた。
「これで立花くんの株も上がったね」
「いや、これくらいで上がらないだろ。事実を言っただけだし」
今日ではっきりしたことがある。
うちのクラスは優秀ではない生徒が複数いる。
須藤は素行に問題があるようだがバスケの実力は確からしい。なので彼はバスケの実力を買われて入学できたのだと納得できる。
アニオタはＰＣスキルが高いようで、プログラミングはもちろん、自作でＰＣも作れるようだ。
だが池と山下はどうだ？
櫛田に注意されてからは真面目に授業を受けているようだが、内容がわかっていないのかよく唸っている。

つまり学業の成績はよろしくない。体育の授業を見る限り運動神経もよくなかった。
あいつらなんでこの学校に入れたんだ？
可能性があるとすればコネ入学だろうか。
じゃなければ国立の学校にあんな馬鹿が入学できるわけがない。
恐らく他クラスのヤンキーたちもコネ入学だろう。
もしかしたら格好はヤンキーだけど、高校デビューしただけかもしれん。
そういえば最近ヤンキー漫画が流行ってると幼馴染が言っていた。
だとしたら漫画に影響されたんだろう。
かわいいものじゃないか。
「立花くん」
ほのぼのしてると肩をツンツンと触られた。
顔を向けるとそこには軽井沢が立っていた。
「おはよう」
「お、おはよう」
なぜ挨拶するだけで顔を赤くする？
まだ昨晩のアレを引きずってるのか。
「松下さんもおはよう」
「うん、おはよう」
松下も軽井沢の異変に気づいたようできょとんとしていた。
「あ、あのさ」
「どうした？」
「あたしもお弁当作ってきたから、お昼一緒にしていい？」
可愛らしくもじもじして軽井沢が問う。
朝から庇護欲を掻き立てるのはやめてくれ。
「俺はいいけど」
「私もいいよ」
「ほ、ほんと？　それじゃまたあとでね！」
軽井沢は満面の笑みを浮かべて自席に戻っていった。
「軽井沢さん、どうしたんだろうね？」

「俺たちと一緒にお弁当食べれるのが嬉しいんじゃないか」
昨晩の件は俺と軽井沢二人だけの秘密だ。
いずれ松下の協力が必要になるかもしれないが、まだ打ち明けるべきじゃない。
恐らく松下ならすぐに協力してくれると思うが、俺以外の生徒に過去を打ち明けるのは軽井沢にとって酷だろう。
「あっ」
「どうしたの？」
「いや、なんでもない」
今日水泳の授業があったんだから、昨日無理して軽井沢の手首を確認する必要はなかった。
余計なことをしてしまったと、軽く後悔する俺だった。

5話

「凄い広さだな。プールなんて５０メートルはあるんじゃないか？」
昼休みが終わり5時限目。
高度育成高校が誇る室内プールに俺は驚愕していた。
「さすが高度育成高校だね」
隣りに経つ平田も感動しているようだ。
更衣室で平田の裸は何度も見ているがやはりいい身体をしている。
女子に持てそうな細マッチョって感じだ。
「やっぱり男子は早いね」
俺たちから遅れること5分。
スクール水着姿の松下が声をかけてきた。
「まぁな。ていうか松下はちゃんと授業受けるんだな」
「ポイント減らしたくないからね。何人かは見学みたいだけど」
ギャラリーを見上げると軽井沢、長谷部が離れて座っているのが見える。
「あの二人って仲悪いのか？」
「悪くはないよ。あまり絡まないだけで」
「そうか」
軽井沢は脇腹の傷を気にして見学なんだろうな。
長谷部は男子のいやらしい視線に嫌悪感を抱いて見学ってところか。
「それより男子たち静かだね」
「立花くんが注意してくれたおかげだね」
平田が俺の功績を称えた。
「じろじろは見てるけどな」
そればかりは仕方ないだろう。
なにせうちのクラスは美少女が多い。
「しかしなんで四月に水泳の授業なんだろうね？」
「茶柱先生曰く何か意味はあるみたいだけどな」
松下の問いに答える。

もしかしたら夏に水泳大会があるのかもしれない。
「平田、ちょっと来てくれー」
「わかった。それじゃまた後で」
「ああ」
「いってらっしゃい」
男子に呼ばれ平田は駆け足で向かう。
プールサイドは危ないから滑らないように気をつけろよ。
「立花くん」
「なんだ？」
「私の水着姿どう？」
挑発めいた笑みを浮かべる松下。
「いいと思います」
「ありがとう」
「でも松下は黒いビキニの方が似合いそうだ」
「……見たいの？」
「見せてくれるなら」
「考えておくね」
「お願いします」
俺って松下相手だとこんなことも言えるんだな。
中学の時は女子と話そうとすると、いつも幼馴染がいて、ここまで砕けた会話は出来なかったな。
「格闘技してただけあって、けっこういい身体してるね」
そう言いながら、松下が俺の胸板をつんつんしてきた。
くすぐったいからやめてほしい。
「筋トレとかしてるの？」
「腹筋と背筋くらいかな」
「偉いね」
「松下も一緒にやるか？」
「やらない。運動はあまり好きじゃないし」
「運動神経いいのに？」
「得意と好きはイコールとは限らないよ」

「そうだな」
俺もキックボクシングが得意だが、別に好きでジムに通っていたわけじゃない。
あくまで自分を守るためだ。
今の時代、いつ自分がいじめの標的にされるかわからない。
うちのクラスを見る限りそこまで心配しなくてよさそうだが油断は禁物だ。
軽井沢を守るために、俺もそれなりの地位を築かなければならない。
いじめられっ子など論外だ。
やがて人間とゴリラのハーフのような教師が来て授業が始まった。
まず先生は見学者が少ないことに感心をしていた。
どうやら他のクラスは見学者が多かったらしい。
先生が夏休みまでにかなづちの生徒も必ず泳げるようにさせると豪語していたので、夏休みになにかイベントがあるのか質問したが答えてくれなかった。
茶柱先生と違って狼狽えていたのも面白かった。
授業の内容は簡単なものだった。
まず全員５０Ｍを泳ぎ、その後男女に別れて自由形の競争が行われた。
優勝者には５０００ポイントが支給されるボーナスがあり、男女とも真剣に泳ぐ生徒が多かった。
男子の優勝者は高円寺、女子の優勝は水泳部の小野寺だった。
ちなみに俺は高円寺に大差をつけられての２位だった。
「惜しかったね」
息を切らしながらプールサイドに上がると松下に労われた。
「いや惨敗だろ」
「相手が悪かっただけだよ」
「ああいうのが化物って言うんだろうな」
「見た目が？」
「身体能力がだよ」

確かに個性的な見た目だが化物と言うのは失礼だろう。
とりあえず松下がナルシストでマッチョな男はタイプではないことはわかった。

♦♦♦

その日の晩。またしても軽井沢が部屋にやって来た。
「今日はどうしたんだ？」
今日は俺がベッドに座り、軽井沢は座布団に腰を下ろしている。
「別に何もないけど」
「ないのかよ」
「用事がないと来ちゃいけないわけ？」
「そういうわけじゃないけど」
俺の部屋は軽井沢が楽しめるようなものは何もない。
節約の為、小説は図書館で借りて、漫画は漫画喫茶で読んでいる。
ゲーム機もないので、娯楽とよべるものは何もないのだ。
「あのさ、また水泳の授業があったら出たほうがいいかな？」
「そりゃポイントのことを考えたら出たほうがいいだろ」
「だよね……」
よほど肌を晒したくないのだろう。
「もしポイントがクラス単位だったら、授業を欠席したあたしが責められる可能性もあるのよね……」
もしかして俺の心配性が軽井沢に伝染してる？
いや、これくらいなら普通の人間も心配するか。
「今月は池、山下、須藤がやらかしたから大丈夫だと思うけど」
「山下ってだれ？」
「池と須藤とよく一緒にいるやつだよ」
「山内じゃない？」
「そうなの？」
「うん」
名前間違えて覚えてしまっていたのか。

失礼なことをしてしまったが、山内から俺は嫌われてるので気にしないことにした。
「そんなんだから男子の友達がいないのよ」
「平田がいるだろ」
「平田くんだけじゃん」
「うぐっ」
「あたしを守るためにも、友達増やしなさいよね」
「なんて偉そうないじめられっ子だ」
「うるさい！」
軽井沢は怒鳴りながら俺の右肩を殴りだした。
こいつ本当に虐められてたのかよ。
俺にはいじめっ子にしか見えないぞ。
「それと松下さんとイチャイチャしすぎ！」
「してないだろ」
「してた。付き合ってないのに距離近すぎるのよ」
「そうなのか」
仲が良いとは思っていたが、俺と松下の距離は近すぎるのか。
何だか嬉しいな。
幼馴染以外でこんな親しいと評価された女子は初めてだ。
「なにニヤついてんの？　キモイんだけど」
「おいキモイは傷つくからやめろ」
「あ、ごめん……」
言いすぎだと自覚したのか、素直に謝る軽井沢。
急にしおらしくされると調子が狂う。
「別にいいよ。話を戻すけどこれからも水泳の授業は休むつもりか？」
「出たいとは思うんだけどさ……」
「出られない理由があるんだな」
「……うん」
「まぁ無理には聞かない。今後も授業があるようなら補習で補えるか聞いてみるか」

「一緒に聞いてくれるの？」
「もちろん」
「……ありがと」
「どういたしまして。補習があれば俺も付き合うぞ」
「なんで？」
「軽井沢の水着姿見てみたいし」
「……っ」
「軽井沢は赤いビキニが似合いそうだな」
「あ、あかっ……ビキニぃっ……」
軽井沢の顔がみるみるうちに耳まで真っ赤に染まっていく。
この子純情すぎるだろう。
見た目と中身のギャップがありすぎる。

♦♦♦

一週間後。午前の授業を終えた俺は松下、軽井沢と昼食を取っていた。
「今日の小テスト最後の3問だけ難しくなかった？」
松下が言う小テストは3時限目の社会の授業で行われたものだ。
問題の構成は1科目4問、全２０問で、各5点配当の１００点満点のテストだった。
「難しかった。ていうか解けなかった」
「私も解けなかったよ」
テスト問題のほとんどは中学の復習レベルだったが、最後の3問だけけた違いの難しさだったのだ。
「ラスト3問以外は全部解けたから８０点は取れてると思うけどな」
「私もそれくらいかな。軽井沢さんは？」
「あ、あたしは、４０点くらいかな……」
あの内容で４０点なのか。
もしかして。
いや、もしかしなくても……

「軽井沢ってお馬鹿さん？」
「馬鹿じゃないし！　勉強が嫌いなだけだから！」
「馬鹿なんじゃん」
「立花くん、違うよ。軽井沢さんは、私はやればできる子だって言ってるんだよ」
付き合いが長くなってきたからか、松下も軽井沢を弄るようになった。
「そこまで言ってないけど」
「そんなんで中間テスト大丈夫か？」
「やばいかも……」
いじめにあうこともなく平和に学校生活を送れている軽井沢だが、このままでは成績不振で退学してしまうかもしれない。
「予習や復習はしてないのか？」
「するわけないじゃん」
「軽井沢はよくこの学校に入れたな」
「喧嘩売ってんの？」
「素直にそう思っただけだ」
「なおさら質が悪いわよ！」
やはりこの学校で問題児の集まりなんじゃないか。
特にうちのクラスは生徒のバランスが悪すぎる。
茶柱先生に聞いても教えてくれないし、いつになったらクラス構成の狙いがわかるんだろうか。
「とりあえず復習はしておいた方がいいぞ」
「わかったわよ。すればいいんでしょすれば」
素直に言うことを聞く軽井沢。
しかしこの発言が原因で俺のプライベートな時間を奪われることになるとは思いもしなかった。

♦♦♦

5月1日。今日は入学してから2回目のポイント支給日だ。

俺は起きてすぐに振り込まれたポイントを確認した。
７６０００ポイント。
ポイント変動説は正しかった。
真面目に授業を受けていた俺でこれだけ下がってるのだから、恐らくポイントはクラス単位で変動されるのだろう。
確認のために平田、松下、軽井沢、佐藤、篠原にラインを送ったが、誰からも返信が来なかった。
「まだ早かったか」
時計を見ると5時になったばかりだった。
ちなみに毎日早起きしているわけではない。支給されるポイントが気になって仕方なく目が覚めてしまったのだ。
一時間ほどして平田から返信が届いた。
平田も同じく７６０００ポイントが振り込まれたようだ。
続けて松下、篠原、佐藤、軽井沢の順で返信がきた。
やはり支給されたポイントは全員同じだった。
「おはよう」
エレベーターを降りるとエントランスに松下の姿があった。
「おはよう。俺を待ってたのか？」
「うん。ポイントの話をしたいんじゃないかと思ってね」
「よくお分かりで」
二人並んで学校に向かう。
「やっぱりクラス単位だったね」
「だからクラス替えがないんだな」
「だね。詳細は朝のホームルームで茶柱先生が説明してくれるでしょ」
「そうだといいんだけど」
「やっと質問に答えてくれるんじゃない？」
入学してから一ヶ月。
俺は茶柱先生に質問をしまくった。
ほぼ１０割が未回答だったが、茶柱先生の反応で答えが分かるようになった。

「二人ともおはよう」
軽井沢が小走りで追いかけてきた。
「おはよう」
「おっす」
運動が苦手な軽井沢はすでに息を切らしていた。
「はぁはぁ。二人とも早くない？」
「茶柱先生に早く質問したくて」
「そう考えてると思ってエントランスで待ってたの」
「……やっぱり仲良すぎ」
軽井沢が何か呟いたが、声が小さすぎて聞き取れなかった。
「ていうか早朝にライン送らないでくれない？」
「悪い」
「おかげで目覚めちゃったじゃない」
「そうなのか。その割に返信遅くなかったか？」
「お、女の子にはいろいろあるのよ！」
いろいろって朝シャンとメイクくらいだろう。
「そうか」
「軽井沢さんも5時過ぎに送られてきたんだ？」
「うん。松下さんは起きなかったの？」
「寝るときはマナーモードにしてるから」
「そうなんだ。眠りに集中したいタイプ？」
「そう。軽井沢さんもマナーモードにしてから寝たほうがいいよ。誰かさんが早朝や夜中に連絡してくるかもしれないから」
ジト目で俺を見る松下。
だって気になったんだから仕方ないじゃないか！
美少女二人を引き連れて職員室に行ったが茶柱先生は捕まらなかった。
何やら準備で忙しいらしい。
仕方ないのですぐに教室に向かおうとしたが、軽井沢の提案で軽くお喋りをしてから向かうことにした。
教室に着くと、みんなポイントの話をしているようだった。

自席に着くまでに多くのクラスメイトに声をかけられ、感謝されたり褒められたりした。
「どうやらあなたの考えはあっていたようね」
自席に着くと堀北が久しぶりに声をかけてきた。
「思ったよりポイントが減ってたな」
「そうね。これ以上迷惑はかけてほしくないわね」
そう言いながら池たちを一瞥する堀北。
「ちなみにポイントの増減について茶柱先生から何か聞いているかしら？」
「聞いたけど教えてくれなかった。もしかしたらホームルームで教えてくれるかもしれない」
「……そう」
「ポイント以外にもたくさん質問したけど、ほとんど答えてくれなかった」
「ちなみにどんな質問をしたの？」
「たくさんあるから何から言えばいいやら」
「なら放課後空けておきなさい」
「え」
「それじゃよろしく」
俺の回答も聞かずに堀北はそのまま自席に戻ってしまった。
「これは強制なのか」
堀北みたいな性格の女子は苦手なので断りたいところだが、断ったら怖そうなので我慢することにした。
数分ほどして茶柱先生が入ってきた。
手にポスターの筒を持っており、なんとも言えない表情をしている。
いつもはすました顔をしているのに。
「これより朝のホームルームを始める。質問は……後ほど受け付ける」
なぜ俺の顔を見た。
さすがに質問だけでホームルームの時間を潰すつもりはないぞ。

「あー……その、なんだ……おめでとう」
急にお祝いの言葉を述べる茶柱先生。
「今日からお前たちはＢクラスだ」

6話

一体何がどうなっているんだ。
私がDクラスの担任になるのは3回目だがこんなことは初めてだ。
Dクラスがいきなりに昇級するなんて。
高度育成高校は優秀な生徒からAクラスに割り当てされる。
つまりDクラスの生徒たちは必然的に不良品と評されている。
そんな不良品たちがC、Bクラスをごぼう抜きしたのである。
私だけでなく教師陣は困惑した。
腐れ縁の星乃宮は白目を剥いていた。坂上先生は円形脱毛症になっていた。真嶋は目が点になっていた。
上の連中は私たち以上に困惑していることだろう。
「さてそろそろ職員室に戻るか」
私はとある生徒の突撃を免れるため資料の準備を口実に職員室から退避していた。
その生徒こそDクラスをBクラスに導いた立役者と言ってもいいだろう。
立花恭平。
岩手の公立中学校から進学し勉学、スポーツともに優れている生徒だ。
中学時代のトラブルがなければ間違いなくAクラスに配属されていただろう。
そんな立花の特徴は極度の心配性なことだ。
彼は入学2日目から私に数多くの質問をしてきた。
内容は様々で些細なことから、Sシステムの核心に迫るような質問までしてくる。
途中まではハッキングでもして情報を把握したうえで質問をしているのかと思ったが違った。
あいつは不安と疑問を解消したいだけだったのだ。
学校側からの指示で5月最初のホームルームまではSシステムなどに関わる質問には答えられないことになっている。

なので立花の質問には9割以上は答えられなかったのだが、私が未回答の場合は肯定とみなされるようになった。
立花の疑問がクラス全体に広がり、例年なら高校生活に慣れたタイミングで緩むはずの空気が引き締まった。
ほとんどの生徒が遅刻や早退もなく真面目に授業を受けている。
その結果クラスポイント７６０という非常に優秀な結果をおさめることになった。
さて、生徒たちにどうやって説明すればいいのだろう。
例年ならクラスポイントを大量に吐き出したことを叱咤し、自分たちが他のクラスより実力が劣っていることを指摘したうえでSシステムなどの説明をしていた。
だが今回は違う。
いきなりBクラスに昇格してしまった。
生徒たちは池、山内、須藤の三人を除いて、授業初日から真面目に授業を受けている。
その池と山内も入学して一週間が過ぎた頃には他の生徒と同様に真面目に授業を受けるようになった。
強く叱咤出来るのはたまに授業中に居眠りをしたり、小テストで赤点だった須藤くらいだ。
さてどうやって話を切り出そうか。
こんなことは初めてなので、どう話を切り出すか迷っている。
ホームルームまで１０分。
トイレに寄ってぎりぎりまで考えるとしよう。

♦♦♦

「今日からお前たちはBクラスだ」
浮かない顔をしている茶柱先生がクラス名が変わったことを告げた。
ポイントの変動について説明されると思っていた俺たちに困惑が生まれる。

「そんな顔をするな。すぐに説明する。Ｄクラスがｂクラスになった理由をな」
茶柱先生は手にしていた筒から大きな白い紙を取り出した。
磁石を取り出してその紙を黒板に張り付け始める。
「手伝いましょうか？」
「大丈夫だ」
さすが平田。気遣いが出来る男だぜ。
「これは……各クラスの成績、ということか？」
眼鏡がトレードマークの幸村が呟く。
ちなみに幸村は自己採点で小テストが９５点だった我がクラスの学力エース候補だ。
「幸村の言う通りだ。これは各クラスのクラスポイントの数字だ」
幸村の呟きは届いていたようで、茶柱先生はそのままクラスポイントの説明を始めた。
やはり俺たちの予想通りポイントはクラス単位で変動されており、そのクラスポイントによってクラスの昇級・降級がされるとのことだ。
今回は入学して一週間で須藤以外の生徒が真面目に授業を受け、なおかつ遅刻や早退もなかったため、７６０クラスポイントの数字が残せたらしい。
ちなみにポイント増減の詳細は非公開なので、俺たちは今後も遅刻や早退をしないよう気をつけなければならない。
クラスポイントなどの説明を終えた茶柱先生は続けて俺たちがＤクラスに割り当てられた理由を明かしだした。
「この学校では、優秀な生徒たちの順にクラス分けされるようになっている。最も優秀な生徒はＡクラスへ。駄目な生徒はＤクラスへ、と。大手の集団塾に通っていた生徒ならこのような制度も知っているだろう」
なんてことでしょう。
俺は高度育成高校に劣等生の烙印を押されていたようだ。
学力も運動能力もそれなりに高いと自負していたが残念だ。

だがおかしい。
トイレで違うクラスの生徒が小テストで半分も解答がわからなかったとクラスメイトらしき生徒に打ち明けていたのを聞いたことがある。
５０点以下なら俺や幸村より点数は下のはずだ。
つまり学力だけでなく運動能力も評価の対象になっているんじゃないだろうか？
いや待て。
運動能力も評価の対象なら俺がＤクラスなのはおかしい。
平田や松下も学力・運動能力ともに優秀だ。
なんで俺や松下たちの評価がＤクラスだったんだ？
次々と疑問が湧き上がる。
これは堀北との約束前に茶柱先生を捕まえて質問をしなければ！
俺は疑問に思ったことをノートに書きだした。
これを後ほど整理して質問リストを作成するのだ。
前は疑問に思ったことを次々と質問していたが、松下からアドバイスを受けて質問リストを作成するようになった。
作成した質問リストはエクセルで保存しており、他の生徒たちにいつでも共有できるようになっている。
質問の内容を聞いてきた堀北にも放課後に見せる予定だ。
「続いて先週実施された小テストの結果を発表する」
やはりクラスのトップは幸村で９５点。続いて堀北と高円寺が９０点。俺は予想通り８５点で、松下も８５点だった。ちなみに軽井沢は４５点と散々な成績だった。
他の生徒は６０点前後が多く、須藤が２５点で最低点数だった。
思ったよりうちのクラスは勉強が苦手な生徒が多いようだ。
「もしこの小テストが本番だったら3人の生徒が退学になっていた」
よく見ると菊池の３０点の上に赤いラインが引かれている。
つまり菊池を含め、それ以下の生徒は赤点ということだ。
それとなぜか茶柱先生の顔が生き生きとしているように見える。
教室に入った当初は浮かない顔をしていたのに。

「ま、マジかよおおおおおおお!?」
赤点対象の菊池、山内が絶叫する。直後に舌打ちの音が聞こえたが恐らく須藤だろう。
「平田の予想通りじゃねえかぁぁぁぁぁ!!」
「これが小テストでよかったぁ……」
「ちっ」
俺は茶柱先生に定期テストで赤点を取った場合、退学処分になるか質問をしたことがある。
茶柱先生から答えは返ってこなかったが、ここは国立の学校だ。さらに学費や寮費など一切費用がかからない。
そんな恩恵をデメリットなしで受けられるだろうか？
入学前から疑問に思っていたが、ようやく答えがわかった。
やはり答えは否だ。
入学して二週間ほど経った頃。俺は平田に疑問や不安に思っていることを教えてほしいと言われたので、素直にすべて打ち明けた。
国立の学校なので定期テストで赤点を取ったら退学などの厳しい処分があるかもしれない。
退学と言うワードに平田は敏感な反応を示した。
クラスメイトを失うことを危惧したのだろう。平田は単独で行動に出た。
サッカー部の先輩に用がある体で上級生のクラスを偵察にしに行ったのだ。
そこで机の数を数えたようだ。
その上級生のクラスには机が３５台しかなかったらしい。
つまり５人も退学したことになる。
こんな好待遇な学校を自主退学する生徒はいないだろう。
もちろん家庭の事情や、人間関係の問題で学校を去る可能性もある。
だが一クラスで５人も退学するだろうか？
あまりに多すぎる。
なので俺たちは定期テストでの赤点を取った場合、退学になる可能

性が高いと推測した。
　平田はすぐにクラスメイトに情報を共有し、定期テストで赤点を取らないよう懇願した。
「やはり赤点を取ると退学になることも考慮していたか」
　不敵な笑みを浮かべる茶柱先生。
　山内たちが静かになったところで、茶柱先生はさらに爆弾をぶち込んだ。
「我が高度育成高校は希望する就職、進学先にほぼ１００％応える。このクラスにもそれに惹かれて入学した生徒は数多くいるだろう」
　その話の切り出しで、またしても俺の不安は的中したことがわかった。
「だがその恩恵を受けられるのはＡクラスのみだ。Ｂクラスに昇級したのは素晴らしいが、このままではその恩恵は受けられないことになる」
　よく考えれば当然かもしれない。
　学校側も企業や大学に優秀な生徒しか送り出したくないだろう。
「そんな話聞いてません！　俺を騙したんですか!?」
　珍しく幸村が声を上げている。
　よほど入りたい企業か大学があるのだろう。
「騙してはいない。Ａクラスで卒業すればいい話だ」
「くっ……！」
「さて、説明は以上だ。これでお前たちが自分がどんな過酷な環境に身を置いたか理解してくれただろう。３週間後には中間テストがある。退学にならないよう頑張れ。お前らが赤点を取らずに乗り切る方法はあると確信している」
　未回答がスタンダードの茶柱先生が珍しくアドバイスしてくれている。
　情報解禁になったからかもしれないが、断言しているのは珍しい。
　浮かない顔もしていたし、私生活でなにかあったのだろうか。
　やばい。
　学校のことでたくさん不安と疑問が生じてるのに、茶柱先生のこと

も気になってしまう。
とりあえず学校のことを優先にしよう。
茶柱先生のことは我慢だ。
「はい！」
俺は質問をするために元気よく右手を挙げた。
「立花悪いな。もう時間がない」
「後ほど質問は受け付けると言ってくれたのにですか？」
「それは……放課後で、という意味だ」
「わかりました。６時限目が終わったらすぐ職員室に行きます」
「……わかった」
「よろしくお願いします」
「それでは失礼する」
茶柱先生はため息を吐きながら教室を後にした。
俺の質問を受け付けるだけで、あそこまで元気をなくすだろうか。
やはりプライベートでなにかあったに違いない。
茶柱先生が去った教室は少しだけ荒れた。
まず幸村が自身がＤクラスに割り当てされたことに納得できないようで声を荒げていた。
そんな幸村の立ち振る舞いに高円寺が苦言を呈して、幸村が高円寺に噛みついたが、平田と三宅が仲裁に入ってすぐにおさまった。
赤点を取った山内と菊池は退学になった自分を思い描いたのか顔面が蒼白になっており、須藤は舌打ちしながら廊下に出ていったが、彼を気遣い追う生徒は一人もいなかった。
「だいたい予想通りだったね」
隣人の松下が身体をこちらに向ける。
「そうだな。Ｄクラスになった理由には驚いたけど」
「だね。それについて話したいんだけど放課後って時間ある？」
「昼休みじゃ駄目なのか？」
「なるべく二人きりがいいんだけど」
「わかった。放課後は用事と約束があるからそれが終わってからでいいか？」

「用事はわかるけど、約束って？」
「堀北に俺が茶柱先生にした質問の内容を教えてほしいと言われた」
「堀北さんが？」
「ああ。久しぶりに会話したよ」
堀北もプライド高そうだから、幸村と同じでＤクラスになったことに納得してなさそうだな。
「ふぅん。わかった。それじゃ時間空いたら連絡してくれる？」
「わかった」
どうやら今日の放課後は入学してから一番忙しくなりそうだ。

7話

昼休みの教室。いつもは食堂で昼食を取っている平田、佐藤、篠原の姿があった。

理由はもちろん今後の話し合いをするためだ。

「ポイント変動は予想通りだったけど、進学・就職の恩恵がＡクラスのみなのはきついね」

珍しく平田がため息を吐いた。

「マジそれ最悪」

「佐藤は行きたい大学や企業があるのか？」

「うん。ファッション雑誌の編集になりたいから出版社に勤めたいんだよね」

そういえば佐藤はお洒落に人一倍興味があったな。

休日にグループで遊んだ時に私服をディスられたっけ……。

「洋服が好きなのは知ってたけど、仕事にまでしたかったのか」

「まぁね。松下さんたちは行きたい大学や会社はないの？」

「私は特にないかな」

「あたしも」

「私もないよ。大学は行きたいと思うけど」

進学希望の篠原だが小テストは５０点だったので、相当頑張らないと偏差値５０以下の大学に進学しそうだ。

「立花くんと平田くんはどうなの？」

佐藤が続けて男子二人に問う。

「今のところ決まってないかな。進学はするつもりだけど」

「俺は地元の大学に進学する予定」

「もう行きたい大学決まってるの？」

「ああ。大学卒業したら家業を継ぐことも決まってる」

「なにそれ!?」

俺の実家は明治時代から続く老舗旅館を営んでいる。

父親曰くだいぶ儲かってるみたいで、一人っ子の俺は家業を継ぐのが生まれた時から決まっていた。

高度育成高校に進学したのは一度くらい東京で暮らしたい願望があったからだ。

在学中は帰省どころか外部と接触も出来ないので両親も難色を示したが地元の大学に進学することを条件になんとか許可を得ることが出来た。

高度育成高校に進学した経緯を説明したところ、みんな感心したような顔をしていた。

「ちゃんと将来のこと考えてたんだ。意外」

軽井沢が失礼なことを言う。

「じゃあ立花くんの奥さんになる人は必然的に若女将になるわけだ」

「そうなるな」

松下の言う通り将来の嫁には家業を手伝ってもらうことになる。

「わ、若女将……」

軽井沢が何やら妄想してるようだが、着物を着たいなら黒髪に戻しなさい。

「それより今後の話をするんだろ。俺と佐藤以外は進路が不透明だけどAクラスを目指すってことでいいんだよな？」

「そうだね。やるからには上を目指したい」

平田はいつもかっこいいことを言う。

なんてこんな優等生がDクラスなんだろう。

気になるがそれについては松下と放課後に話すとしよう。

「あたしもポイントはたくさんほしいからAクラスを目指す方向でいいかな」

「私も将来の選択肢を広げるためにもAクラスを目指したい」

軽井沢と篠原も勉強は出来ないが上昇志向の持ち主のようだ。

「私は出版社に入りたいから絶対Aクラスになりたい！」

拳を握りながら宣言する佐藤。

そんな佐藤とは対照的に松下はクールに言う。

「私もAクラスで卒業したいかな」

俺たちのグループは全員Aクラスを目指すことで意見が一致した。

「よし。あとは他の人たちの意見も聞きたいね。中間テストのことも

あるから放課後みんなに話してみるよ」
「さすが平田くん。頼りになるー」
「もう学級委員長だね」
佐藤と篠原が平田を煽てる。
「中間テストの対策としては勉強会を開くことくらいしかないよな？」
小テストの結果を見る限りうちのクラスは勉強が苦手な生徒が多い。
なので勉強会は必須だろう。特に池たちは一人じゃ何もしなさそうだし。
「そうだね。みんな勉強会に参加してくれるといいんだけど……」
みんなに優しい平田だが、俺と同様に一部の男子からは好かれていない。
平田もそれを自覚しており、一部の男子たちが勉強会に参加しないことを危惧しているのだろう。
「それについては対策を考えてるから俺に任せてくれ」
「本当かい？」
「ああ。とりあえず平田は今後の方針と勉強会の開催について進めてくれればいい」
「わかったよ。ありがとう！」
笑顔が眩しい。
佐藤や篠原の知性が感じられない笑顔とは大違いだ。
「なんで私と篠原さんの顔を見たの？」
「……何でもない」

♦♦♦

放課後。念のためトイレを済ませた俺は堀北に話しかけた。
「堀北。約束の前に茶柱先生のところに行ってもいいか？」
「ちょうどいいわ。私も茶柱先生に用があるの」
「そうか。それじゃ行くか」

「ええ」
恐らく茶柱先生に自分がDクラスに割り当てられたことを抗議するつもりだろう。
「あなたは話し合いに参加しなくていいの？」
俺たちが教室を出る直前。平田は教壇に立ちクラスメイトに声をかけていた。
「平田には許可を取ってる」
「そう」
「堀北こそ参加しなくてよかったのか？」
「話し合いは得意じゃないから」
「だろうな」
「どういう意味かしら？」
「……なんでもありません」
自分で言っておいてなんで怒るんだよ。
俺も人のこと言えないけど、堀北ってけっこう面倒くさいやつでは？
「そういえば綾小路が茶柱先生に呼び出されていたな」
「そうね」
「なにかやらかしたのか？」
「知らないわよ。なんで私に聞くのかしら？」
「仲良さそうに見えるから」
「そう見えるならレーシック手術を受けることをお勧めするわ」
どうやら綾小路と仲良しなのを認めたくないらしい。
しかし、佐藤と篠原が二人が付き合ってるのではないかと疑うくらいにはクラスメイトに仲良しに見えている。
俺も美男美女でお似合いだと思う。
それを言ったら怒られそうだから言わないけど。
「失礼します！」
今日は職員室ではなく指導室に来るよう言われた。
場所は違えど、いつも通り元気よく声を発してノックをする。
「いきなり大きな声を出さないで……」

「悪い」
　堀北が一瞬ビクッとなったのが面白かった。
「いいぞ。入れ」
「はい」
「し、失礼します」
　入室すると茶柱先生が待ち構えていた。
「ほう。今日は松下ではなく堀北と一緒か」
「堀北も茶柱先生に質問があるみたいでして」
「わかった。それでは堀北から聞こうか」
「……ありがとうございます。率直に聞きますが、なぜ私がＤクラスに配属されたのでしょうか？」
「本当に率直だな」
「先生はＡクラスから順に優秀な生徒が割り当てられると言いました。つまりＤクラスは学校から最低評価を受けた生徒たちの集まりということですよね？」
「そうだ。納得できないか？」
「できません。入学試験の問題は殆ど解けたと自負していますし、面接でも大きなミスをした記憶がありません。少なくともＤクラスになるとは思えないんです」
　プライドが高そうな堀北は自身が誤った評価を受けたと思っているのだろう。
「確かに堀北は入試で３位と好成績を残している。１位や２位とも僅差だ。十分過ぎる出来だ」
　マジか。俺は何位だったんだろう。
「ちなみに立花は１４位だ」
「あ、ありがとうございます……」
　顔に出ていたのか茶柱先生はすぐに教えてくれた。
「堀北の話に戻そう。面接も問題はなかった。むしろ高評価だったと思われる」
「ありがとうございます。ではなぜ私がＤクラスなのですか？」
「……やはりＤクラスであることは不服か？」

「当たり前でしょう。正当な評価をされていないんですから」
「正当な評価？　どうやらお前は相当自己評価が高いんだな」
茶柱先生の目が輝きだした。
「お前の学力が優れているのは認めよう。だが、学力に優れた生徒が優秀なクラスに入れると誰が決めた？　そんなことは我々は一度も言ってないぞ」
「それは――――世の中の、常識の話をしているんです」
「常識？　その常識とやらが今のダメな日本を作ったんじゃないのか？」
堀北と茶柱先生の話はしばらく続いた。
結局、堀北は最後まで自身がＤクラスに配属されたことに納得していなかった。
「それでは質問をしていいですか？」
「いいだろう。かかってこい」
「かかってこい？」
俺と茶柱先生のやり取りに堀北は困惑の表情を浮かべる。
「まずＡクラスから順に優秀な生徒が配属されるとのことですが、学力や運動能力以外にコミュニケーション能力や社会奉仕なども評価の対象なんですか？」
「学力や運動能力以外も評価の対象になる、とだけ答えてやる」
「ありがとうございます。次に定期テストや運動会でクラスポイントの増加はありますか？」
「ポイントの増加についてはイベント前に説明することになっている」
つまりポイントの増加はあるってことだ。
「定期テストと運動会以外でポイントが増加するイベントはありますか？」
「今は答えられない」
「わかりました。次に部活で活躍したり、資格を取得した場合はクラスポイントが増加したりしますか？」
「するぞ。クラスポイントだけでなく、プライベートポイントも付与

される」
「ありがとうございます。続いて、進学・就職の恩恵はAクラスのみということですが、Aクラス以外で卒業すると後々学費や寮費が請求されることはありませんか？」
「それはないから安心しろ」
「よかったぁ……。次に、もし退学者が出た場合はクラスポイントは引かれるんですか？」
「引かれる。だが引かれるポイント数は答えられない」
「かしこまりました。過去の退学者で定期テストの赤点以外の理由で退学になった方はいますか？」
「いるぞ」
「退学になった理由を聞いても？」
「いいだろう。ポイントの詐欺行為、いじめ、暴力事件を起こしたり様々だな」
「やっぱりいじめはあるんですか……」
「私たちも気をつけてはいるんだがな……」
軽井沢は虐められないよう必ず守られなければ！
「あとは、今日から俺たちはBクラスになりましたけど、教室はそのままですか？」
「そうだ。クラスが変わっても教室は変わらない」
「つまりAクラスに上がっても教室のグレードは変わらないということですね」
「グレード？」
「はい。机や椅子が高いやつに変わったり、タブレット端末で授業を受けたりなど、です」
「ぶふっ」
「なんで笑うんですか!?」
「いや、すまない……。教室のグレードか。私もそこまでは考えなかったな」
そうなのか。教室のグレードを上げればよりAクラスを目指すのに貪欲になりそうだけど。

「施設のグレードを気にするあたり、さすが旅館の息子と言ったところか？」
「実家は関係ないです。次が最後の質問です」
「さっさと言え」
「茶柱先生は俺たちが中間テストで赤点を取らずに乗り切る方法があると言ってましたが、ヒントでもいいから教えてくれませんか？」
「自分たちで考えろ」
「……わかりました。とりあえず今日はここまでです」
「そうか。質問の質が上がったな。松下のおかげか？」
「そうですね。松下のおかげで効率よく質問が出来るようになりましたよ」
「そうだな。松下は今後もお前の支えになってくれるだろう。大事にしろよ？」
「はい。それではまた明日の朝来ます」
「ああ。気をつけてかえ――――――ちょっと待て」
「はい？」
踵を返したところ茶柱先生に腕を掴まれた。
堀北は質問を開始してからずっと呆けた顔で俺を見ている。
「出てこい綾小路」
茶柱先生が綾小路を召喚した。
どうやら給湯室に隠れて俺たちの話を聞いていたらしい。
呼び出されたと思ったら、そこで盗み聞きしてたんかい。
「いつまで待たせれば気が済むんですかね。本当に」
げっそりした顔で茶柱先生を睨む綾小路。
綾小路を見て堀北は帰ろうとしたが、俺と同じく茶柱先生に引き留められた。
なんと綾小路がＡクラスに上がるためのヒントになるらしい。
「お前は面白い生徒だな、綾小路」
「茶柱なんておめでたい苗字を持った先生ほどじゃないですよ」
「確かに」
「立花、綾小路、全国の茶柱さんに喧嘩を売ってるのか？」

「すみません」
　素直に謝っておいた。
「実は入試の結果をもとに、個別の指導方法を模索していたんだが、お前のテスト結果を見て興味深いことに気づいたんだ」
　そう言うと、茶柱は入試の解答用紙を机に並び出した。
「全教科５０点。先日の小テストも５０点。これが意味するものが何かわかるか？」
　俺と堀北はテスト用紙を食い入るように見た。
「偶然って怖いっスね」
「偶然なわけがないだろう。お前は意図的にやったのだろう？」
「偶然ですよ。証拠はありません。そもそもテストの点数を操作してオレに何の得があるんです？」
　偶然と言い張る綾小路だが、解答した問題の正解率の低さから、意図的に５０点を取ったのは明らかだ。
「あなたは……どうしてこんなわけのわからないことをしたの？」
　堀北が問うが、綾小路は偶然だと言い続ける。
「立花、お前はどうしてだと思う？」
「そうですね……」
　茶柱先生に訊かれたので、入試１４位の頭をフル回転させる。
　高度育成高校が学力だけで生徒を入学させないのはわかったが、入試の時点では高得点でなければ合格は出来ないとみんな思ってはずだ。
　それをわざと全教科５０点を取ったとなると……考えられる答えは一つだ。
「恐らく綾小路はこの学校に入学したくなかったんじゃないですか？」
「なぜそう思う？」
「高度育成高校は国立の名門校です。俺を含めた生徒たちは入学する前は全国から優秀な生徒が入試を受けていると思っていたでしょう」
「そうだな」
「つまり高得点を取らなければ入学できる可能性は低くなる。これは

どの進学校にも言えることですよね」
「ああ」
「なのに綾小路は全教科５０点を取った。彼は入試に落ちるつもりだったんです」
「理由は何だと思う？」
「これは完全に俺の推測ですが……この学校は3年間外部と接触が出来ません。家族や親しい人と3年間離れ離れになってしまう」
「つまり？」
「両親や担任にこの学校を勧められ入試を受けることになってしまった。しかし綾小路は大切な人――仮に家族や彼女にしましょう。その人たちと離れたくないからわざと低い点数を取った。どうでしょう？」
「ふふっ。どうなんだ綾小路？」
「違います。本当に偶然点数が揃っただけです」
俺の推理を否定する綾小路。
確かにその年頃だと恥ずかしいだろうが、家族や彼女想いなのはいいことだ。
小テストが５０点なのも、家族や彼女と離れ離れでモチベーションが上がらないのだろう。
「さて立花の面白い推理も聞けたことだし、私は職員室に戻る。ここを閉めるから三人ともここを出ろ」
面白い推理ってなんだよ。こっちは真面目に推理したんだぞ。
指導室を後にした俺たちは3人で寮に向かっていた。
「綾小路」
「なんだ？」
「今度平田と3人で遊ばないか？」
「……なんだと？」
「実は平田しか男の友達がいなくて。お前も一緒にどうだ？」
「い、いいのか……？」
「もちろん」
「よろしく頼む」

「ああ」
こうして俺と綾小路は友達になった。
俺と平田との交流で彼の寂しさが少しでも埋まればいいのだが。
「なんで堀北も4階で降りるんだ?」
堀北が同じ階でエレベーターを降りたことに疑問を感じる綾小路。
「彼の部屋に行くのよ」
堀北の一方的な約束で、俺は彼女に茶柱先生への質問リストを共有することになっている。
きっと俺の質問を見てAクラスに上がるためのヒントを得るつもりだろう。
普段から交流があれば、もっと早く情報を共有できたんだけどな。
「いつからお前たちはそういう関係になったんだ?」
刹那。堀北の原始的な暴力が綾小路を襲った。

8話

手負いの綾小路と別れた俺は堀北を部屋に招き入れた。
質問リストを渡すだけなら玄関に待たせてもよかったのだが、堀北の用件はそれだけではない予感がしたので部屋に上げることにした。
「初めて男子の部屋に上がったけれど、意外と綺麗にしてるのね」
今の発言から堀北も年齢＝恋人いない歴であることがわかった。
ほんの少し親近感を持ったことは黙っておこう。
「綺麗好きだし、そもそも物自体が少ないからな」
学生寮は8畳ワンルームで高校生の一人暮らしには十分な広さになっている。
さらにベッド、学習机、テーブル、冷蔵庫、電子レンジ、エアコンが備え付けとなっており、自身で用意した家電はテレビ、ＤＶＤレコーダー、ノートパソコンくらいだ。
「麦茶とオレンジジュースどっちがいい？」
「麦茶をお願いできるかしら」
「了解」
二つのコップに麦茶を注ぎ、そっとテーブルの上に置く。
「あとこれが茶柱先生に質問したリストだ」
「リストまで作っていたのね」
机の引き出しからリストを取り出して堀北に渡す。
「松下にアドバイスをされて作ったんだ」
「紙で用意してくれたのはありがたいけれど、後でデータファイルを貰える？」
「いいけど……なんでだ？」
「万が一紛失したときに他のクラスに情報が漏洩するリスクを減らすためよ」
「なるほど。でもＵＳＢに焼いても失くしたら同じじゃないか？」
「暗号化すれば問題ないでしょう」
「そういうことか」
昨日までは他のクラスとの競争を考えていなかったので、紙でも保

管していたがこれは処分したほうがよさそうだ。
「それにしても沢山質問してるのね」
「入学二日目からほぼ毎日してたからな」
「ほぼ毎日……」
堀北は麦茶を飲みながら、じっくりと質問リストを確認している。
「プライベートな質問もしてるのね」
「ああ。特に興味はなかったけど、全部未回答だと心が折れると思ったから、一日に一つだけプライベートな質問をしてみた」
「そう」
堀北が質問リストの確認を終えるまで10分ほどかかっただろうか。
ようやく紙から俺に目を向けた。
「ほぼ未回答だけれど、これは肯定と捉えていいのよね？」
「そうだな」
「しかしよくこんなに質問を思いついたわね」
「疑問に思ったことはすべて質問したからな」
「それにしてもこんなに多くの質問をするなんて異常だわ」
「自覚はある」
「自覚はしてるのね……」
もう15年も生きてるのだ。
自分が極度の心配性で、他人から変に思われるのは慣れている。
「でもこの学校ならその心配性な性格は活きると思うわ」
松下と同じことを言われた。
俺の極度な心配性を肯定してくれたのは二人目だ。
「立花くん」
「は、はい」
「あなたはDクラスに配属されたことに納得しているのかしら？」
そういえば堀北はDクラスに配属されたことに納得していないままだったな。
「納得はしている」
「なぜ？　あなたは小テストで85点だったし、体育の授業を見る限

り運動能力も高い方だと思うのだけれど」
「ちょっと中学時代にやらかしたことがあるんだ。恐らくそれが原因でDクラスに配属されたんだと思う」
堀北の言う通り学力と運動能力には自信があった。それに友達もそれなりに多かったからコミュニケーション能力も問題ないはずだ。
なのに俺はDクラスに配属された。
とすれば理由はアレしか考えられない。
「問題を起こしたということ？」
「そうだな。詳しく知りたい？」
「いえ。無理に聞くつもりはないわ。……でも私は中学時代に特に問題を起こしたことはない」
「そうか。ちなみに中学時代に友達っていたか？」
「いないけれど。そもそも必要なかったもの」
「そうか。……ていうか堀北も薄々気づいてるんじゃないのか？」
「……何にかしら？」
「自分がDクラスに配属された理由に」
今日、共に行動して気づいたが、堀北も松下と同じくらい頭が切れるタイプだ。
なので茶柱先生の話を聞いて、答えに辿りついていてもおかしくはない。
「あなたにわかるというの？」
「恐らく堀北がDクラスに配属された理由は――社交性が極端に低いことだ」
綾小路とのやり取りを見た限り多少は会話するようだが友人とは思えなかった。
俺との関係を疑われたくらいで、胃液が逆流するほどの腹パンを友人にはしないだろう。
それに中学時代にも友達はいないと答えた。
つまり学校からは社交性に問題ありと評価されているのだろう。
「それが原因とは限らないでしょう」
「そうか？　堀北は学力も運動能力も高い」

水泳の５０メートル走では水泳部の小野寺に次いで2位だった。
松下の話だと短距離はクラスで一番速かったらしい。
つまり運動能力はクラスでトップクラスということになる。
「中学時代に問題を起こしてないなら、考えられる原因は社交性しかないだろう」
ここまで情報があれば、誰でも簡単に答えに辿り着ける。
佐藤や篠原のお馬鹿二人でもわかる問題だろう。
「……っ」
事実を受け止めたのか、悔しそうに唇を噛む堀北。
綺麗な顔が台無しだからおやめなさい。
「今までは友達や仲間がいなくても問題なかったんだろうけど、この学校じゃそうはいかないみたいだぞ」
なぜ堀北は友達が必要ないと思うようになってしまったのだろう？
気になる。
気になってしかたない。
「私は……」
容姿は美少女と言っても過言ではなく、芸能界にいてもトップクラスに可愛いと思う。
勉強も運動も出来るから、他人からも一目置かれる存在だったはずだ。
とすれば、考えられる原因は……
嫉妬によるいじめか！
幼馴染が言っていた。
女子の嫉妬から生み出されるパワーは非常に恐ろしいものだと。
突出した存在は特に嫉妬されやすいらしい。
そういえば隣のクラスの美少女が中二に上がったらクラスからはぶかれたと聞いたことがある。
その生徒は中一のときに同じクラスだったが性格は特に問題なかったと思う。むしろクラスメイトに勉強を教えたり、運動が苦手な子に付き添ったり優しい子だったと思う。

それでもいじめの被害にあってしまった。
原因はクラスメイトの女子による嫉妬だ。
幼馴染の話だと、女子グループのトップの子が自分より人気があるのが気に入らず、その子を無視するよう女子たちに指示したらしい。
その話を聞いて女子は男子より陰湿だと実感させられた。
恐らく堀北も似たような経験をしたのだろう。
ハイスペックに対する僻みなのか。
男子からの人気に対する僻みなのか。
原因はわからない。
デリケートな問題なので直接本人にも聞かない方がいいだろう。
だが安心してほしい。
中学時代は堀北一人だけが突出した存在になってしまったようだが、幸いうちの学校は国立の名門校様だ。
我がBクラスには松下、櫛田とハイスペックな女子がいる。
それに容姿だけなら軽井沢、佐藤、長谷部もいる。
堀北だけが突出することはないだろう。
だから中学時代のような思いはしなくて済むはずだ。
「いきなり友達を作れとは言わない。まずは仲間を作るところから始めたらどうだ?」
「仲間……?」
「ああ。仲間と言う言葉も気に入らなければ、Aクラスを目指すステークホルダーと思えばいい」
いきなり友達や仲間と言われても、周りに壁を作っている堀北は拒絶するかもしれない。
「なぜ私がAクラスを目指すと思ったの?」
「茶柱先生とのやり取りで、私がAクラスじゃないのは納得できないと言ってただろ?」
「そこまでは言ってないわ」
「それじゃBやCクラスだったら納得していたのか?」
「しないわ」
結局Aクラス以外納得しないんじゃないか!

「……まぁ、あなたが言いたいことは少しはわかるわ」
「少しだけかよ」
「まだDクラスに配属されたことに納得はしていないけれど、私もAクラスを目指すつもり――いいえ、私はAクラスにならないといけないの」
堀北から並々ならぬ決意と覚悟を感じた。
「そんなに入りたい大学や企業があるのか？」
「いいえ。私を認めさせたい人がいるの」
認めさせたい人か。恐らく親御さんだろうな。
「だから私に協力しなさい」
「それは俺を仲間にしたいということでいいのか？」
「勘違いしないで。私の駒になりなさい、と言っているの」
「ねえ、さっきの俺の話聞いてた？」
あいかわらずの上から目線だが、そこまで本気で言ってるわけではなさそうだ。
先ほどより表情が柔らかくなっている。
「元Dクラスだからあまり期待はできないけれど、ほかに使えそうな人材はいるのかしら？」
その台詞からすると、少しは堀北に評価されているようだ。
「安心しろ。うちのクラスは優秀な生徒がそれなりにいるぞ。堀北の中学と違ってな」
「え……？」
「中学時代は周りが馬鹿やクズばかりで苦労しただろうが安心してくれ」
中学では自分を貶めようとする生徒ばかりで堀北も苦労したことだろう。
「なぜ私の元同級生をいきなり貶すのかしら？」
「違うのか？」
「一応国内トップクラスの進学校に通っていたのだけれど」
「……へ？」
「○○学院って聞いたことない？　地方にある全寮制の進学校でそれ

なりに有名だと思うわ」
　聞いたことある。
　岩手のお隣にある超名門中学校じゃないか。
「少なくとも今のクラスより学力が高かったのは間違いないわ」
　堀北はそんな秀才な生徒たちから迫害されていたのか。
　きっと俺が通っていた田舎の公立校では考えられない苛めの被害にあっていたのかもしれない。
　それなら堀北が今のようになってしまったのも納得できる。
「それであなたがいう優秀な生徒は誰なの？」
「えっと、松下と平田。あまり絡んだことないけど櫛田も優秀だと思う。学力だけなら幸村がナンバーワンだろう」
「幸村くんがナンバーワン？　その評価は尚早だと思うわ。まだ小テストだけだし、私と彼の差はあってないようなものよ」
　どうやら自分より幸村が上だという評価が納得できないらしい。
　やっぱり堀北って面倒くさい女子かも。
「そ、そうだな……。あとは綾小路も優秀だと思うぞ」
「そうね。ただ彼が何を考えているかわからない」
「確かに」
「でも利用できるなら利用するにこしたことはないわね」
　そういえば綾小路は大丈夫だろうか。
　松下との話が終わったらお見舞いにいったほうがいいかもしれない。
　それから俺と堀北は中間テストの対策について話し合いを始めた。
「対策と言っても勉強会くらいしかないと思うのだけれど」
「そうだな。ただ茶柱先生が気になること言ってただろ？」
「私たちが赤点を取らずに乗り切る方法があると断言していたこと？」
「そうだ」
　さすが堀北。記憶力抜群だ。
「まだ時間はあるし、俺はその方法とやらを探ってみるよ」
「そう。せいぜい頑張りなさい」

「お前もコミュ障を治せるよう頑張れよ」
「死にたいの？」
「生きたいです」
しまった。調子に乗って煽ってしまった。
危うく綾小路の二の舞になるところだった……。
「そういえば立花くんはなぜＡクラスを目指すの？」
「え……？」
「将来実家を継ぐことが決まっているのでしょう？」
「聞こえてたのか」
「ええ。女子の声が大きかったから嫌でも聞こえてしまったわ」
恐らく佐藤と篠原のことを言ってるのだろう。
「……そうだな。実際Ａクラスで卒業できなくても大したダメージはない」
進学予定の地元の大学はそこまでレベルは高くない。
無理に競争せずに楽しく高校生活を送りたい気持ちもある。
「ならなぜ？」
「……Ａクラスを目指していない――消極的と判断された生徒が退学処分を受けるかもしれないと不安に思ったからだ」
俺は高度育成高校のシステムを知ってから強い不安に襲われた。
「な、なぜそう思ったの？」
「国立の名門校だから理念に反した生徒には厳しい処分が下るのかと思って」
一度の赤点で容赦なく退学にさせる学校だ。
油断は出来ない。
「はぁ……。本当に極度の心配性なのね」
呆れたように溜息を吐く堀北。
「でも私はその心配性な性格を活かさせてもらうわ」
堀北はそう言うと麦茶を一気に飲み干し、そのまま綾小路の部屋に向かった。
男子の部屋をはしごするなんてはしたない女だ。
もちろん言葉にすると折檻されるので、心の中で留めておいたのは

言うまでもない。

9話

松下が部屋にやって来たのは午後5時過ぎだった。
「ごめん。遅くなっちゃった」
「いや、大丈夫だ。話し合い長引いたのか？」
放課後。うちのクラスは平田が中心となって今後について話し合いを行っていたが、俺は茶柱先生への質問と堀北との約束を果たすために不参加だった。
「ううん。話し合いは３０分ほどで終わったよ」
「意外と早く終わったな」
「今回は中間テストの対策だけだったからね。実は櫛田さんと話してたんだ」
「櫛田と？」
松下が櫛田と絡むのは珍しい。
「クラスメイトについて色々聞いていたの。一番情報通なのは櫛田さんだからね」
「クラスメイトについて？」
「そう。みんながＤクラスに配属された理由がわかるかと思って」
「なるほど」
つまり俺との話し合いの前に情報を集めてくれたのか。
やはり松下はできる女だ。
「櫛田さんに聞いてクラスメイトのスペックとかだいぶわかったよ」
「小テストもあったしな」
「うん」
「まず勉強も運動も苦手な生徒はＤクラスでもおかしくないよね」
「だな」
女子なら軽井沢や篠原。男子なら池たちがそれに当てはまるだろう。
「次に学力か運動能力。片方のみ秀でている生徒」
「幸村と須藤か」
「うん。女子だと王さんが当てはまるかな」

「王ってそんなに学力高かったのか」
「そうみたい。もともと中国に住んでいて、中国語はもちろん英語も日常会話レベルで話せるみたいだよ」
「マジか。トライリンガルじゃん」
「立花くんも英語に自信あったようだけど、上には上がいるってわけだね」
「そうだな」
旅館に海外からのお客さんも増加したことにより、母親から英語をマスターするように命じられた俺は中一から洋画や洋楽に触れたり、駅前留学をしていた。
「さすがに駅前じゃ本場に勝てないか……」
「中国は英語の本場じゃないよ」
松下がジト目で俺を見る。
今は真面目な話をしてるから冗談は控えろ、ってことだろう。
「あとは小野寺さんもだね。運動神経は抜群だけど勉強はからっきし駄目」
「辛辣だな」
「事実だからね。次に学力も運動能力も高いけど性格に難がある生徒」
「堀北と高円寺か」
「正解。そういえば堀北さんと約束してたんだよね？」
「ああ。一緒に茶柱先生に質問したり、約束通り質問リストを渡したぞ」
「……ふーん。リスト渡すだけなのに部屋に上げたんだ？」
「え……？」
「長い黒髪が落ちてる。これは堀北さんの髪でしょ？」
床に落ちていた抜け毛を摘まみ上げ、俺に見せつける松下。
「こっちの茶色い髪は軽井沢さんかな」
「うっ……」
「私が知らないところで、女子を二人も部屋に連れ込んでたんだ」
松下に睨まれ身体が硬直した。

超能力をかけられたかのように、身体が動いてくれない。
「あ、あの……」
恐怖を感じる俺にお構いなく松下は睨み続けている。
「……なんちゃって」
「……へ？」
「一度こういうのやってみたかったんだよね」
「びっくりするからやめてくれよ……」
重圧から解放されようやく身体を動かせるようになった。
俺はへなへなとテーブルにもたれかかった。
「ごめんね」
可愛らしく舌を出して謝る松下。
本当に可愛いので許そう。
「いいよ。話戻すけど、堀北は自分がＤクラスに配属されたことに納得していなかった」
「だろうね。あの子プライド高そうだもん」
「正解。小テストで幸村に負けたのも納得してなかったし」
「そうなの？」
「幸村がクラスで一番学力があると言ったら、なんかぐちぐち言ってきた」
「なにそれ。面白いかも」
面白いだろうか。相手するのが面倒なだけだぞ。
「高円寺くんは何考えてるかわからないよね」
「だな。でも定期テストは真面目に受けるだろう」
「小テスト９０点だったもんね」
学力も高くて身体能力は化物並。
あれで性格がまともならＡクラスだっただろうに。
「数人しか名前出さなかったけど、他もＤクラスが妥当な生徒ばかりだったよ」
「……櫛田ってそんなに情報持ってたのか？」
「うん。私も驚いちゃった」
高校に入学してから一ヶ月で、クラスメイトの情報をそんなに集め

るなんて……。
「しかも他クラスに何人も友達いるみたいだよ」
「凄いな」
「だよね。……なんで櫛田さんがDクラスなんだろうね」
松下の言う通りだ。
櫛田は学力も高い方だし、運動能力も悪くない。社交性は堀北と天と地の差がある。
「櫛田さん以外にもいるよね。Dクラスに配属されたのがおかしい生徒」
「そうだな。この部屋にも二人いるな」
松下には中学時代にやらかしたことは言っていない。
もちろん聞かれたらすぐに教えるつもりだ。
「ちなみに私はDクラスが妥当だよ」
「なんでだ？」
「中学では勉強も運動も手を抜いていたから」
「そうなのか？」
「うん。あと入試でも平均６０点くらいだったし、面接も適当に答えたから」
「理由を聞いてもいいか？」
「もちろん。勉強と運動も手を抜いていたのは、他の子より突出したくなかったから」
「友人関係を保つために？」
「正解。よくわかったね」
高校では優秀な部類に入る松下が、中学では平凡な生徒を演じていたのか。
「生意気に聞こえるかもしれないけど、私って昔から大した努力をしなくても勉強も運動も出来たんだ」
「天才かよ」
「天才は言いすぎかな。でも私のグループはどちらも平均レベルの子しかいなかったから……」
「だから突出した存在にならないように気をつけたのか」

「うん。……もしかして立花くんの周りに、私に似たような人がいたのかな？」
「いた。そいつは勉強も運動も手を抜いていなかったが、人間関係を円滑にするよう努力してた」
「凄いね。私はそこまでエネルギー使いたくなかったから、楽な方を選んじゃった」
「……やっぱり女子って面倒なんだな」
「面倒だよ。男女関係のトラブルに巻き込まれたことも何回もあったし……」
嫌な過去を思い出しているのだろう。
松下が遠い目をしだした。
「入試や面接で手を抜いたのは？」
「それは単純。この学校に入りたくなかったから」
「マジで？」
「マジ。だって3年間外部と接触禁止なんだよ。そんなの嫌に決まってるじゃん」
「そりゃそうだけど」
「別にうちはお金に困ってなかったし、一人暮らしにも憧れなんてなかったしね」
「それじゃ担任や両親に勧められていやいや受けた感じか？」
「そうだよ。まさかあの点数で受かるとは思わなくて……」
綾小路は全教科５０点で受かったので、６０点前後の松下も受かるのはおかしくない。
「受かっちゃったから入学しないわけにはいかなくて……」
「そんな経緯があったのか」
「うん。……今はこの学校に入学できてよかったと思ってるけどね」
珍しく松下の頬が紅潮した。
クールな松下が心のうちを明かすのは珍しいので、恐らく恥ずかしがってるのだろう。
「そうだな。俺も松下と出会えてよかったよ」
「っ……」

心のうちを明かしてくれた松下に応えるため、恥ずかしいけど俺も想いを素直に打ち明けた。

恐らく俺の顔も赤くなっているだろう。

しばらく無言の時間が続いた。

「そ、そういえばなんで高校では勉強も運動も手を抜かないんだ？」

「そ、それは……。国立の学校だから優等生しかいないと思って……」

そりゃそう思うよな。

まさか劣等生だったり、ヤンキーがいるとは思わないよな。

「それで立花くんは？」

「俺？」

「そう。立花くんはなんでＤクラスに配属されたの？」

「あー、それはだな――――――」

中学二年の夏休み前。

いつものように幼馴染と下校中に地元の不良たちに囲まれてしまった。

不良たちの狙いは幼馴染だった。

どうやら俺が知らない間に、その連中のリーダーに告白を受けたようで、幼馴染ははっきり断ったが、それが彼のプライドを傷つけたらしく、彼女に復讐しに来たのだ。

キックボクシングを習っていた俺だったが、角材で後頭部を殴られてしまった。

薄れ行く意識の中で彼女の悲鳴を聴きながら、俺は意識を手放してしまった。

どれくらい気絶していたかわからない。

強烈な股間の痛みに意識が覚醒させられると、いつの間にか不良たちが血まみれで倒れていた。

とうとう幼馴染が本性を現したかと思ったが、不良たちを倒したのは俺だったようだ。

まったく記憶がないので彼女に訊いたところ、気絶したと思ったらすぐに立ち上がり、リーダー以外の不良たちを一発で倒したらしい。

そのリーダーは仲間たちを置いて逃げようとしたが、俺が捕まえて

半殺しにしてしまったようだった。
このままでは殺してしまう。
恐怖を感じた幼馴染は俺の股間を思いっきり蹴り上げた。
あまりの痛さに悶絶しているときに、いつもの俺に戻ったらしい。
その後。通報を受けた不良たちは警察に連行され、俺と幼馴染は事情聴取を受けることになった。
危うく相手の親御さんから過剰防衛で訴えられそうになったが、何とかお咎めなしになり、無事に事件は解決した。
ただ、その事件の話は瞬く間に学校中に広まり、友達が半分以上減ってしまった。
きっと切れると何するかわからない子、だと思われていたのだろう。
「恐らくこのことが原因で俺はDクラスに配属されたんだと思う」
「そんなことがあったんだ」
特に面白みのない話だったが、松下は話を遮ることもなく真剣に聞いてくれた。
「立花くんって二重人格なの？」
「いや、そんなことはないと思うんだけど」
あれから人を傷つけたことは一度もない。
街中で不良に絡まれたことが何回かあったが、顔を見たら向こうから逃げてくれた。
卒業まで平和に暮らしていたのだ。
「それ以外でDクラスに配属された原因は思いつかない？」
「そうだな」
「そっか。立花くんは悪くないのに、それでDクラス判定って厳しいね」
「……ていうか怖くないのか？」
いくら相手が悪いとはいえ、半殺しにしてしまう人間だ。
俺が松下だったら怖くて近づけない。
「うーん、今の立花くんしか知らないから……怖くないかな？」
「そ、そっか」

「なに？　喧嘩強い俺を怖がってほしい、と思ってたりするわけ？」
「そんなこと言ってないだろ」
「だよね。立花くんはそんなこと思わないもんね。ていうか喧嘩とか嫌いでしょ？」
「そうだな」
当たり前だ。
できれば喧嘩なんてしたくない。
なのでＤクラス（旧Ｃクラス）とは、卒業まで関わりたくないが、それは無理な話だろう。
「てかよくわかったな」
「わかるよ。だって、須藤くんがふざけて池くんたちを殴ってるとき、忌々しげに見てるし」
「……そんな顔してた？」
「してたよ。嫌悪感マックスな感じ」
そんな嫌そうな顔してたのか。
須藤もバスケは真面目にやってるようだから、根は悪いやつじゃないと思うんだけど。
ふざけ合いでも暴力は好きじゃない。
「私も暴力は好きじゃないけど……」
「けど？」
続きを促すと、松下は上目遣いで見つめだした。
「もし私が危なくなったら守ってね？」
きっと計算して言ってるのだろう。
松下は天然でこんなこと言える女子じゃない。
でも悲しいかな。
美少女に可愛くお願いされたら、断れないのが男の性である。
「松下のごとは、ずっとまぶってんが！」
やばい！
興奮して岩手弁が出ちまった！
「……へ？　まぶってんが……？」
「い、いやっ……なんでもない！」

岩手弁を松下に追及されたのは言うまでもないだろう。
よほどつぼにはまったのか。
しばらくの間、松下は涙を流しながら笑い続けていた。
「はぁ……。今ので一年分くらい笑ったかも」
「そ、それはなにより……」
「よし。話を戻そうか」
「そうしてくれ」
「うん。最後は平田くんだね」
平田洋介。
クラスの学級委員長的存在で、数少ない男子の友達である。
学力・運動能力ともにトップクラスで、社交性も高い。
「私の予想だと、平田くんも中学で何かしらトラブルを起こしてると思う」
「それしかないよな」
「平田くんから何か聞いてたりしないの？」
「してない」
「だよね。……立花くん凄く気になってるでしょ？」
「そうだな。でも無理に聞くつもりはない」
人間一つや二つくらい隠したいことはあるだろう。
俺も外見に騙されて幼馴染に告白して振られたのは誰にも言うつもりはない。
そういえば本性を現したのは告白してからだったな。
告白しなければずっと騙されたままだったのか……。
「うん。それがいいと思う」
「本当は気になって仕方ないけどな。……っともう１８時か」
「もうそんな時間？」
「そろそろ解散する？」
「……うーん、せっかくポイントも入ったことだし、よかったら外食にでも行かない？」
「いいな」
「でしょ。もちろんファミレスとか安いところでいいから」

「今日くらいもう少し高いお店でもいいんじゃないか？」
「高いお店で二人分出せるの？」
「奢らせるのかよっ!?」
松下と二人きりでの初めての外食はファミレスになった。
喫茶店などは放課後にたまに行っていたが、がっつり外で飯を食べるのは一ヶ月ぶりだった。
いつもは小食な松下も多めにメニューを頼んでいた。
俺もステーキやパスタなどカロリーを度外視して好きな食べ物を何品も注文した。
食事中。松下にパスタをあーんされたり、口の周りについたソースを拭かれたりなど、何度も心拍数を上昇させてしまった。
どうやら今後も松下にからかわれる日々が続きそうだ。

１０話

５月初日から3日が過ぎた。
俺たちBクラスは、中間テストに向けての勉強会を翌週から始める予定となっている。
講師役は俺、平田、幸村、堀北、櫛田、王の６人だ。松下はサポート役に徹するらしい。
勉強が苦手な生徒たちはほぼ全員が参加することになっている。
池や山内など勉強会に参加することに渋っていた生徒もいたが、櫛田から池たちに中卒になった場合の悲惨な未来を説明してもらい、最後は上目遣いでお願いをしたらあっさり陥落した。
ちなみに櫛田を利用した作戦は松下の考案である。
問題は部活動を優先したい須藤だった。
同じグループの池と山内が真面目に授業を受けるようになってから、たまに居眠りをするが授業態度はマシになっている須藤だが、部活動だけは譲れないらしい。
「須藤くん大丈夫かな？」
体育の授業。準備体操をしていると平田が心配そうに呟いた。
「そうだな……」
俺と平田は須藤と親しくない。なので俺たちがお願いをしてもそっけなく答えが返ってくるだけだ。
池と山内と違って嫌われてる感じはないが、これから仲良くなることもないだろう。
そう思っていたが、授業後に須藤との距離が縮まることになった。
「バスケ部に入れよ立花！」
制服に着替えていると須藤が鼻息を荒くしながら勧誘してきた。
体育の授業でバスケットをしたのだが、紅白戦で見せた俺のプレイを気に入ってくれたらしい。
「その実力で帰宅部なのはもったいないぜ！」
気持ち悪いくらい評価してくれる須藤だが、バスケ部に入部するつもりはない。

「悪いな。俺は帰宅部で青春を謳歌したいんだ」
「そうか……。なら気持ちが変わったら俺に言えよな！」
もっとしつこく誘ってくると思ったが、意外とあっさり引いてくれた。
もともとの好感度が低かったせいか、たったそれだけで須藤の好感度が上がってしまった。
ヤンキーが捨て犬を拾うだけで、好感度が爆上がりするみたいなものだろうか。
「なあ須藤」
教室に向かう途中で、隣を歩く須藤に優しく声をかける。
今なら俺の話を聞いてくれるかもしれない。
松下に相談するか迷ったが、彼女に頼りすぎるのも男としてどうかと思ったので、思い切って須藤に再度勉強会に参加するようお願いをしてみた。
「あん？」
「須藤はプロのバスケ選手を目指してるんだよな？」
「ああ。小さい頃からの夢だからな」
「そっか。可能であれば高卒でのプロを目指してるのか？」
「そうだな。一日でも早くプロになりてぇからな」
須藤は一年で唯一スタメンを狙えるレベルらしい。
高度育成高校のバスケ部の実力は知らないが、弱小校ってわけではないだろう。
本人もプロを目指してると公言しているし、それなりの実力があるに違いない。
しかし……
「でもバスケ選手ってほとんどが大卒だよな」
「……そうなのか？」
「知らなかったのかよっ!?」
「いや、プロの試合はＮＢＡしか見ねえからな」
おいおい。プロを目指してるならそっちの世界も少しは勉強しようぜ……。

しかしこれはチャンスかもしれない。
「確かに日本とはレベルが違うもんな」
「おう。立花もバスケの試合見たりすんのか？」
「そこそこな」
幼馴染がバスケ部だったから、テレビ観戦によく付き合わされていた。
「話戻すけど日本でプロを目指すなら大学を経由するのがベターだ」
「大学か……」
「高卒でスカウトされる可能性もあるだろうけど、世代別代表の選手も大学経由してるから、進学することを考えてた方がいいぞ」
「マジかよ……。世代別代表でも高卒プロは厳しいのか……」
適当に言ったけどすっかり信じてくれてるようだ。
念のため部屋に戻ったらネットで調べておこう。
もし違ったら違う球技と勘違いをしていたと謝ろう。
「しかも強豪校は偏差値が高い大学が多い」
「そうなのか」
「なので須藤もプロを目指すなら、それなりの学力が必要になる」
「はぁっ!?」
大学は学部によって偏差値が異なるので、俺が言ってることは正しくはない。
強豪でも偏差値が低くても入学できる大学もそこそこあるだろう。
ただ須藤は情弱だ。
騙される方が悪い、というブラックな考えで須藤を落とす。
俺たちはAクラスを目指すのだ。
一学期の中間テストでいきなり退学者を出すわけにはいかない。
「須藤だって入学するなら強豪校の方がいいだろう？」
「そうだけどよ……」
「それに将来海外でプレイするなら英語も勉強しておいた方がいいだろ？」
「か、海外……？」
「そう。それに日本代表になったら審判とコミュニケーションを取る

こともあるんじゃないのか？」
「に、日本代表……」
俺の言葉に輝かしい未来を想像しているのだろう。
須藤の目がキラキラしている。
「だから勉強会に参加したほうがいいじゃないか？」
恐らくバスケ選手を目指す須藤にとって勉強は不必要なものだと判断していたのだろう。
だがその勉強をバスケに結びつければ？
苦手な勉強も夢の為だと思えば、少しはやる気になってくれるかもしれない。
「……わかったよ。毎日は無理だが俺も勉強会に参加するぜ」
「本当かっ!?」
「ああ。その代わりちゃんと教えろよ？」
「わかったよ」
こうして俺は須藤を勉強会に参加させることにこぎつけた。

♦♦♦

「へー、須藤くんの勧誘に成功したんだ？」
その日の夜。調理中の軽井沢が感心したように言った。
「ああ。これで赤点候補者は全員勉強会に参加させることが出来たよ」
「……その赤点候補者にあたしは入ってる？」
「今の軽井沢なら大丈夫だろ」
「本当に……？」
「ああ。でも勉強会には参加してくれよ？」
「わかってるわよ」
小テストが４５点だった軽井沢。
そんな彼女の学力が上がった理由。
そもそもなぜ彼女が俺の部屋で料理をしているのか。
話は小テストが実施された日に戻る。

「勉強を教えてほしい？」
放課後。まっすぐ寮に帰宅して３０分ほど経ってからだろうか。
制服のままの軽井沢が部屋にやって来た。
「うん。授業の復習はしておいた方がいいって言ってたじゃない？」
その日の昼休み。
俺、松下、軽井沢との朝食中に小テストの話題になったのだが、軽井沢の自己採点が４０点だったのだ。
このままでは赤点で退学になると危惧した俺は、彼女に授業の復習をするよう勧めた。
「だから立花くんに教えてもらおうかと思って」
「やる気があるのはいいことだけど、俺より同性の松下の方がいいんじゃないか？」
松下は自己採点が俺と同じだったし、教え方も彼女の方が上手そうな気がする。
「そ、それは……。松下さんの時間奪っちゃうの悪いし……」
「俺の時間は奪ってもいいのかよっ！」
「だってあたしのこと守ってくれるって言ったじゃない！」
「うぐっ……。それは、いじめから守るって意味で……」
「じゃあ立花くんは、あたしが赤点取って退学になってもいいんだ？」
「いや、それは……」
プライベートな時間が減るのは嫌だ。
もちろん軽井沢のような美少女と一緒にいるのは嬉しいが、映画を観たり、音楽を聴いたり、保健体育をしたり、一人で過ごす時間も大切なのだ。
だがここで頑なに断ったらどうなる？
せっかく軽井沢が俺を信頼してくれたのだ。
それなのに彼女のお願いを無下にしたら、俺の信頼度がぐんと下がってしまう。
さらに、もし軽井沢が退学になって地元に戻ったら……。
恐らくいじめっ子たちは地元に残っているのだろう。
再びそいつらの餌食になって、軽井沢の心も身体もボロボロになっ

たら……。
　またしても彼女の最悪の未来を想像してしまった。
　そうだ。
　俺は彼女を守ると決めたのだ。
　プライベートな時間が減るくらいなんだ。
　軽井沢の命と比べたら軽いものだろう。
「わかった。責任を持って勉強を見る」
「ほ、ホントにっ!?」
「ああ。そのかわり、軽井沢も真面目に受けてくれよ？」
「うん。それじゃ学校に戻るわよ」
「なんで？」
「教科書を取りに戻るために決まってるじゃない」
「置き勉してたのかよ！」
　あれから3週間。軽井沢は週４日ほど俺の部屋で授業の復習をしている。
　最初は勉強を教えるだけだったが、いつからか軽井沢が夕食を作ってくれるようになった。
　勉強を教えるお礼とのことだ。
　見た目からして料理が苦手そうな軽井沢だが、その腕前は確かだった。
　どうやら両親が共働きで、寄り道もせず毎日まっすぐ帰宅していた彼女が、軽井沢家の料理担当だったらしい。
「お待たせ。出来たわよ」
　今日の献立は、俺の大好きなペペロンチーノとサラダの盛り合わせだ。
「いただきます」
　入学したばかりの頃は合掌はしていなかったが、東京は合掌しながら言うのが当たり前のようで、今ではお辞儀をしつつ合掌をしている。
　郷に入っては郷に従え、だ。
　彼女は和洋両方とも得意なようだが、個人的に洋食の方が好みなの

で、洋7和3の割合で作ってもらっている。
「ごちそうさまでした」
「お粗末様」
毎回俺の方が軽井沢より早く食べ終わる。
彼女が食べ終わるのを待って、俺が洗い物をする。その際に軽井沢が勉強の準備をするのが日課になっていた。
「やっぱ食後って眠たくなるわよね」
勉強を開始してから30分ほどすると、彼女が可愛らしく欠伸をしながら言った。
「そうだな。今日は早めに終わらすか」
「いいの？」
「復習する科目も少ないからな」
今日は体育やLHRがあったので、他の曜日より楽な時間割だ。
「じゃあ勉強が終わったらDVD見てもいい？」
「いい加減DVDプレーヤー買えよ」
「嫌よ。だってポイントがもったいないじゃない」
軽井沢は最近K—POPにはまっているようで、よく俺の部屋でライブDVDや動画を見たりしている。
自分の部屋で見てほしいものだが、実家から持参したDVDプレイヤーが壊れてしまったらしい。
「節約するのはいいことだけど」
「でしょ。それに一人で見るより、二人で見たほうが楽しいし」
映画は一人で見るのが好きな俺には理解しかねるが、軽井沢が楽しんでいるのなら仕方ない。
授業の復習を終えた俺たちは、軽井沢の希望通り人気アーティストのライブDVDを鑑賞していた。
純粋に音楽を楽しんでいる彼女を見てふと思った。
きっと音楽も彼女にとって嫌な時間を忘れさせてくれるものだったのだろう。
普段はからかったり言い合いをしている俺たちだが、たまに庇護欲が掻き立てられてしまうことがある。

「もう21時か」
そろそろお風呂に入る時間だ。
「もうそんな時間なんだ。それじゃあたし帰るね」
「ああ」
「……あっ、やばっ」
帰り支度をしていた軽井沢が思い出したように呟いた。
「どうした？」
「コンビニで買いたいのあったんだけど忘れてた」
「遅い時間だし明日にしたら？」
「うーん、でも今日買いたいから今からコンビニ行ってくる」
「そっか。気をつけていってらっしゃい」
「一緒に来てよ……」
「いや必要ないだろ」
寮からコンビニまでは徒歩5分くらいだ。
「あたしが危ない目にあったらどうするのよ？」
学校の敷地内なので、暴漢などに襲われる可能性はゼロに近いと思う。
いや待て。
もしかしたら男子生徒にナンパされるかもしれない。
この時間に外をうろつく生徒だ。
Dクラス（旧Cクラス）のヤンキーの可能性も十分に考えられる。
ヤンキーはギャル好きが多いから、軽井沢の容姿はドストライクだろう。
軽井沢は虚勢を張る癖があるので、ナンパ男を罵倒しながら断る姿が容易に想像できる。
それに逆ギレして、ナンパ男が軽井沢に暴力を振るう可能性も……。
「わかった。それじゃ行くか」
「……いいの？」
「軽井沢が言ったんだろ」
「う、うんっ！」

「涼しそうだからパーカー着ていくか」
自室なのでTシャツにジャージとラフな格好をしていた。
クローゼットから上着を取り出すと、軽井沢がそれを掴んできた。
「……あたしにも貸して」
「え……？」
「あたしもこの格好だと寒いだろうから、パーカー貸してよ」
ジャケットは自室に置いてきたようで、彼女の上着はブラウスのみだった。
ちなみにスカートは相変わらずミニで美脚をさらけ出してくれている。
ありがたや。
「わかった。ほれ」
「……ありがと」
寝間着で使用しているパーカーを渡すと、軽井沢は嬉しそうにそれを抱きしめた。
パーカーファッションに憧れでも抱いていたのだろうか。
「それで何買うんだ？」
「えっと……文房具？」
「なんで疑問形なんだよ」
「うるさいわね。勉強疲れで忘れちゃったのよ」
ぷんぷんしながら文房具コーナーを漁る軽井沢。
「軽井沢の小さい脳みそじゃ仕方ないか」
「喧嘩売ってんの？」
きりっと睨む軽井沢だが、彼女の本性を知っている俺にとっては可愛いものだ。
それにしてもパーカーにミニスカートもなかなかいいものだ。
特に軽井沢みたいなギャルは似合う。
「あれ？　立花くんと軽井沢さんじゃん」
振り向くと佐藤が立っていた。
「さ、佐藤さんっ!?」
なぜか佐藤の出現に焦りだす軽井沢。

「佐藤か。こんな時間にどうしたんだ？」
「ジュース買いに来たの」
「ふーん」
「二人は何してるの？」
「それは軽井沢の買い物に付き――――いたっ!?」
言いかけたところで軽井沢が俺の足を思いっきり踏みつけた。
「あ、あたしたち、たまたま偶然会ってっ！　えっと……あたしは文房具買いに来たのよねっ！」
そういえば俺の部屋で勉強会をしてるのは内緒だったな。
危うく佐藤に話すところだった。
「文房具って……偉いね軽井沢さん」
「ま、まぁ中間テストも近いし？」
「そっかそっか。それにしても本当に偶然だよねぇ」
「……な、なにが？」
佐藤はにやにやしながら俺と軽井沢を交互に見る。
何が面白いのだろう。
「だって二人とも色違いの同じパーカー着てるんだもん」
直後。軽井沢が奇声を発した。
後々知ったことだが、軽井沢がちょくちょく俺の部屋に来ていたことは、佐藤も篠原も知っていたらしい。
どうやら俺の部屋を出た直後にエレベーターで鉢合わせしたことがあるようで、軽井沢は上手く誤魔化したつもりのようだが、実際はバレバレだった。
その後。俺たちは一緒に寮に帰宅したのだが、ペアルックだの、彼氏パーカーだの、佐藤にからかわれた軽井沢は終始顔が真っ赤だった。

11話

5月第2週。今日の放課後から中間テストに向けた勉強会が開始される。

開催場所は教室のみだ。

当初は図書室でも勉強会をする予定だったが、他のクラスとトラブルになる可能性を考慮して教室のみで実施することになった。

特にDクラスはヤンキーが多いので、勉強会の邪魔をしてくる可能性は高いだろう。

なので他クラスとの接触が避けられる教室が一番安全だ。

「私は誰に教えればいいの？」

水筒を忘れたので自販機で飲み物を買おうとしたところ、堀北がいつの間にか背後に立っていた。

「佐藤、篠原の二人を頼む」

「二人だけでいいの？」

「ああ。講師が6人もいるからな」

「そう。その二人の学力がどれくらいかわかる？」

「この前の小テストで二人とも40点台だった」

「……つまり中学生レベルということね」

「大変だろうけどよろしく頼む」

「任せなさい。平均80点以上は取らせるわ」

凄い自信だな。

だがあの二人はそうとうお馬鹿さんだ。

そう上手くいくかな。

「あなたは誰に教えるのかしら？」

「軽井沢、須藤、三宅、沖谷の4人だな」

「……なぜあなたの方が多いの？」

不服そうな態度を隠さず堀北が問う。

「サポートに松下が入ってくれるから。実質二人で教えるんだよ」

「そう。それなら納得よ」

負けず嫌いな堀北が人数の少なさに文句を言ってくるのは想定内

だ。
　ちなみに池たちは櫛田が教えることになっている。
　勉強嫌いな池たちも櫛田に教えてもらえるなら頑張るだろう、という松下の采配である。
「時間は一日二時間でいいのよね？」
「ああ。多少前後しても構わないから、そこらへんは堀北の裁量に任せる」
「わかったわ」
　そのまま堀北は教室に帰っていった。
「頼んだぞ佐藤、篠原」
　佐藤と篠原には堀北から勉強を教えてもらうようお願いをしている。
　この勉強会は佐藤と篠原の為でもあるが、堀北の為でもある。
　中学の同級生たちのせいで孤独を好むようになってしまった堀北。
　佐藤と篠原に堀北の過去（俺の推測）を話したところ、快く引き受けてくれた。
　堀北のことなので、勉強が苦手な二人に厳しい言葉を浴びせるだろう。
　二人ともそれくらいは我慢してくれるとのことで、無事に堀北のコミュ障を改善する協力をしてもらうことになった。
　どうやら二人とも、堀北を可哀そうな子だと思っているようだ。
「私たちが堀北さんをまともな子にしてあげるよ！」
　学力がまともじゃない佐藤の言葉を回想していると松下が声をかけてきた。
「堀北さんとなに話してたの？」
「……松下も飲み物買いに来たのか？」
「うん」
　どうやら松下は俺と堀北のやり取りを見ていたようだ。
「それで？」
「誰に勉強を教えればいいのか聞かれた」
「佐藤さんと篠原さんだよね」

「ああ。なんとか堀北のキツイ言葉に堪えてくれればいいんだけど」
「そうだね。あ、今日はカルピスにしようかな」
「珍しいな」
「たまにはね。軽井沢さんが待ってるから教室戻ろっか」
「そうだな」
松下が買い終わるのを待ち、教室に向かう。
道中。以前より周囲の視線が気になったが、恐らくＢクラスに昇級した影響だろう。
Ｄクラスからクラスに昇級したのは、俺たちが思っているより偉業らしい。
「なんか落ち着かないね」
「松下も気づいてたか」
「そりゃ気づくよ。美男美女カップルって注目されやすいから仕方ないね」
「え？　そっちなのっ!?」
なるほど。俺がイケメンで、松下が美少女だったから見られていたのか。
「違うけど」
「違うのかよっ！」
からかわれたのはムカつくけど、美男と言われたので内心は嬉しくてたまらなかった。

♦♦♦

茶柱先生によるＳＨＲが終わると、勉強会に参加する生徒たちが講師の下に集まりだした。
平田、櫛田の下には、目がハートになっている生徒たち。
幸村の下には、気まずそうな雰囲気を醸し出している生徒たち。
王の下には、性格が穏やかな生徒たち。
堀北の下には、生温かい視線を講師に向ける女子二人。
「よろしく頼むぜ！」

「いてっ」
須藤が元気よく声をかけてきたと思ったら、背中を思いきり叩かれてしまった。
「ちょっと須藤くん。暴力はやめなさいよね」
「ぼ、暴力じゃねえよ……」
暴力に敏感な軽井沢が須藤を注意した。
過去のトラウマからか、このようなコミュニケーションには敏感である。
「立花、よろしく頼む」
「よろしくね」
須藤に続いて、三宅と沖谷も集まった。
三宅は物静かな性格で、基本的に一人でいることが多いが、長谷部と仲が良いらしい。
沖谷は中性的な顔が特徴の男子だ。よく女子の玩具にされている。
「ああ。こちらこそよろしくな」
この面子で一番学力が低いのは須藤だ。
普段面倒を見ている軽井沢はもちろんだが、三宅と沖谷もきちんとテスト勉強をすれば赤点を取ることはないだろう。
あれ？　赤点って何点以下なら赤点なんだっけ？
小テストだと３０点以下だったが、本番が同じとは限らない。
くそ！　なんであの時質問しなかったんだ俺は！
勉強会が終わったら茶柱先生に確認しなければ。
ここは高度育成高校だ。
もしかしたら本番は５０点や６０点がボーダーラインの可能性もある。
「どうしたの？」
険しい表情に気づいたのか、松下が心配にそうに見つめていた。
「赤点のボーダーラインを考えていた」
周りに不安を与えないよう、小声で松下に答える。
「３０点以下じゃないの？」
「普通の学校ならそうなんだろうけど……」

「なるほど。明日辺り茶柱先生に確認しないとね」
「勉強会が終わったら聞きにいく」
いつの間にか俺は赤点は３０点以下だと決めつけていた。
油断するな俺！
深呼吸をして、気を引き締める。
「それじゃ始めるか」
勉強会は須藤のあまりの学力の低さに驚いたこと以外は順調に行われた。
三宅と沖谷も平均以上の学力はあったようで、苦手な科目だけを教えれば問題なさそうだ。
問題は須藤だ。
もし中学校が義務教育でなければ、卒業できないレベルである。
次回からは俺が須藤につきっきりで教え、他の面子は松下に任せた方がよさそうだ。
「堀北はどうだった？」
堀北組も勉強会が終わったようなので、佐藤と篠原に確認してみる。
「うーん、上から目線なのはムカついたけど、教え方は問題なかったよ」
「篠原さん、ムカついちゃだめだよ。堀北さんは可哀そうな子なんだから」
「あ、そっか」
「問題はなさそうってことでいいのか？」
「うん。篠原さんも問題ないよね？」
「ないよー」
「ならよかった」
勉強会が崩壊したらどうしようかと不安だったが、二人の様子を見る限り大丈夫そうだ。
さすがの堀北も真面目に勉強をする生徒には、きちんと対応をしてくれるらしい。
「ただ気になったのは――」

思い出したように佐藤が語りだした。
時折堀北が幸村を睨みつけていたらしい。
恐らく自分より小テストの結果がよかった幸村に対抗心を燃やしているのだろう。
勉強会で教えてる人数も幸村の方が多い。
「テストの点数負けて悔しがってるんだ。堀北さん可愛いね」
「確かに。意外と子供？」
なぜか佐藤と篠原の堀北に対する好感度が上がっていた。
対抗心を燃やす女子は可愛いのか。
よくわからないな。
「いきなり何なんだあいつは！」
廊下から幸村の荒れた声が聞こえてきた。
「幸村くん、いったいどうしたんだい？」
すぐに平田が駆けつける。
こういう時にすぐに反応できるのも平田のいいところだ。
本当にDクラスに所属されたのは不思議でしょうがない。
「堀北にいきなり喧嘩を売られたんだ！」
「堀北さんに？」
「ああ。訳がわからない」
恐らく「小テストで私に勝ったからっていい気にならないことね」みたいなことを言ったのだろう。
「幸村くーん、堀北さんは可哀そうな子なんだから怒っちゃ駄目だよー」
いつの間にか佐藤が幸村のもとに移動していた。
「か、かわいそうな子だと？」
「うん。だからあまり怒らないであげてね」
「意味がわからないんだが……」
幸村が困惑している。
この場は平田に任せよう。
俺は茶柱先生の下に行かなければならない。

♦♦♦

松下と軽井沢を先に帰らせ、俺は職員室にやって来た。
「放課後に質問しに来るとは珍しいな」
「すみません。どうしても確認したいことがありまして」
「わかった。言ってみろ」
「はい。中間テストの赤点は何点以下になりますか？」
「……ほう。いい質問だ」
口角を上げ感心したかのような笑みを浮かべる茶柱先生。
「だがお前なら小テストの結果発表した日に質問をしてくると思ったぞ」
「それは……」
「極度の心配性なお前でも、学校生活に慣れて気が緩んだのかもしれないな」
「くっ」
図星を突かれ返す言葉がない。
「そんな顔をするな。注意しているわけじゃない」
「……それで赤点は何点なんですか？」
「平均点割る2の点数以下が赤点になる」
「やはり30点じゃなかったんですね」
「ああ。一応国立の名門校だからな」
「ですよね」
後で平田や松下に連絡をしなければ。
赤点の基準が予想より上がったことで、勉強会に参加させる生徒が増えるかもしれない。
「それと赤点を回避する方法は見つかったのか？」
「……いえ。いくつか思いついたのはあるんですけど」
「言ってみろ」
「茶柱先生に土下座をする？」
「しても何も意味はないぞ」
「ポイントで先生を買収する？」

「それがばれたら私が学校を解雇になってしまうな」
「ですよね……」
「まだ時間はある。もう少し粘ってみろ」
「はい。それじゃ失礼しました」
「ああ。気をつけて帰れ」
今日の茶柱先生はいつも以上に生き生きしていた。
もしかして生徒が困っている姿を見ると興奮するサドなんだろうか。
……いや、さすがにそれはないだろう。
きっとプライベートでいいことがあったんだろう。
「帰りに図書室にでも寄るか」
気分転換に読書でもしよう。
もしかしたら読んでる最中にいい考えが思いつくかもしれない。

♦♦♦

一週間ぶりの図書室は、いつもより多くの生徒が見受けられた。
どうやら他のクラスも考えていることは一緒のようで、ほとんどの生徒は勉強会目的で図書室を利用している。
本を探しながら、様子を窺ってみる。
どの生徒も真面目に勉強をしているようだ。
その中で一際目立っているのは、ストロベリーブロンドの美少女だった。
見た目は明るく活発そうで、胸囲は破壊力抜群だった。
普段一緒にいる松下や軽井沢の比ではない。
「あの」
美少女に見惚れていると、背後から声をかけられ、敏感な反応をしてしまった。
「な、なに……？」
振り向くと、そこには眠たげな顔をしている銀髪の美少女がいた。
「本をお探しなんでしょうか？」

「そ、そうだけど……」
この子、見覚えあるな。
よく図書室にいる子だ。
初めて見かけたときに見惚れて、松下に足を踏まれた記憶がある。
「探している本は小説ですか？」
「そうだよ。気分転換に読書でもしようかと思って」
「そうですか！　実は私も読書好きなんです！」
急に目が輝きだしたぞこの子。
本好きと出会えて興奮しているのだろうか。
「そ、そうなんだ……」
「はい。よかったら私とお話してくれませんか？」
「え……？」
「実はクラスに読書好きな方がいなくて……。本を語り合える人を探していたんです」
「えっと、君は何組なんだ……？」
「自己紹介がまだでしたね。失礼しました。１年Ｄ組の椎名ひよりと申します」
まさかのＤクラス!?
文学美少女なのになぜヤンキークラスに配属されてしまったんだ。
「あなたのお名前は？」
「俺は１年Ｂクラスの立花恭平」
「立花くんですね。よろしくお願いします」
確かにＤクラスなら読書好きは少なさそうだ。
……待て。
椎名はクラスメイトに読書好きな生徒がいないと言っていた。
本当にそうだろうか？
一クラスに４０人はいるんだぞ。さすがに読書好きが椎名一人とは考えにくい。
「あの……席も空いてますし、あそこで少しお話しませんか？」
さらに図書室で本を借りる生徒ならいくらでもいる。
なぜこのタイミングで俺に声をかけてきた？

俺は図書室には一ヶ月近く通っている。
なのに今まで一度も椎名に声をかけられたことはない。
基本松下と一緒に通っていたので、もし読書好きの友達が欲しいのなら、同性の松下が一緒にいた時の方が声をかけやすいはずだ。
……もしかしてハニートラップか!?
それなら椎名が声をかけてきた理由がわかる。
今日は俺一人だ。
松下がいない今なら美少女の誘いを簡単に受けてしまうだろう。
「立花くん……？」
恐らくDクラスのリーダーにでも指示されているのだろう。
俺から情報を引き出そうとしたに違いない。
ヤンキーは短絡至高だから、図書室に通う男子は、女子にモテなくて、大人しいやつらばかりだと思っているのだろう。
甘いな。
俺は普段から松下や軽井沢のような美少女と付き合いがある。
いくら椎名が美少女でも、そう簡単に引っかからないぞ。
「悪い。今日はあまり時間がないんだ」
「そうですか……」
「また声をかけてくれ」
「……はいっ！」
「それじゃまたな」
俺は適当に本を見繕って、速やかに図書室を後にした。
「ふぅ。危なかった……」
誘いを断った時の落胆している表情。
最後に見せてくれた最高級の微笑み。
とても演技には見えなかった。
椎名ひより。
なんて恐ろしい女だ。

12話

「Dクラスがハニートラップを仕掛けてきただって？」
「ああ」
帰宅後。俺は平田に椎名ひよりに声を掛けられたことを報告した。
「確か平田もDクラスの女子に告白されたんだよな？」
「そうだね」
入学して一ヶ月弱で平田は複数の女子から告白を受けている。
一年女子のみで投票されたイケメンランキングで2位だったこと、彼女がいないことから、彼の人気は止まることを知らないようだ。
だがこの学校の正体が明らかになってからの告白は疑わしい、と言わざるを得ない。
「……まさか、それもハニートラップだったということかい？」
「Dクラスの女子に告白されたのは5月に入ってからだよな？」
「そうだね」
「ならその可能性は高いと思う」
「そっか……」
「平田も気をつけてくれ」
「うん。心配してくれてありがとう」
「それじゃまた明日」
「うん」
平田は優しい男だ。
告白を断るたびに胸を痛めているのが一目でわかる。
もしかしたらハニートラップはだめもとで、平田の心を傷つけるのが目的かもしれない。
平田がBクラスのリーダー的存在なことは他クラスも把握しているだろう。
「電話終わった？」
軽井沢はそう言うと、テーブルに夕食を並べ始めた。
クラスで勉強会をしている俺たちだが、日頃行っている個別の勉強会も継続中だ。

「終わった」
「なら飲み物用意してもらっていい？」
「わかった」
軽井沢と二人で夕食をとるのも随分と慣れてきた。
最初は女子の手料理を頂けるとのことで、ドキドキしていたのが懐かしい。
たまに、軽井沢と同棲したらこんな感じになるのかと妄想するのは内緒である。
夕食を美味しく頂きながら、明日から須藤にマンツーマンで勉強を教えることを軽井沢に伝えた。
やはり軽井沢は須藤のことが嫌いなようで、いい顔はしなかったが渋々了承してくれた。
なぜ軽井沢の承認が必要なのかわからないが、納得してくれたのでよしとする。
夕食を食べ終えると、ようやく勉強の時間だ。
週４で勉強を教えているおかげで、学力は順調に上がっている。
本人は勉強嫌いと公言しているが、中学時代に学校が苦痛の場所でしかなかったのも関係があるかもしれない。
「そういえば今日も問題なかったか？」
「ないわよ」
俺は毎日軽井沢に学校でトラブルが起きなかったか確認をしている。
特に５月に入ってからはしつこいくらい聞いている。
「他のクラスの女子に絡まれたりは？」
「されてないわよ。そもそも教室からあまり出ないし」
確かに移動教室やお手洗いに行くときくらいしか教室から出ていない。
ちなみに食堂を利用している生徒たちには、他のクラスの生徒に絡まれないよう注意を促している。
「それよりここわかんないから教えて」
英語の教科書を手にしながら距離を縮めてくる軽井沢。

勉強なので仕方ないが、肩がぶつかるくらい近いと、ドキっとしてしまう。
「えっと、ここはだな……」
「うん」
軽井沢のいい匂いに鼻腔をくすぐられながら、何とか今日も個別の勉強会を終えた。
ちなみに勉強が終わっても、軽井沢はすぐに帰らない。
今日もＫ－ＰＯＰのライブＤＶＤを見せられた。
どうやらカラオケで俺に歌わせたいらしい。カラオケくらいで喜んでくれるなら、頑張ってマスターしようじゃないか。
「そういえば立花くんも中学の授業でダンスあった？」
「あったぞ。けっこう楽しかったな。軽井沢は？」
「あったけど、ほとんど見学してた」
「そっか。高校はなさそうだな」
「ないでしょ」
「だよな。それでなんでダンスの話を？」
「えっと、運動不足にならないように自分の部屋でダンスでもしようかと思って」
「いいんじゃないか？」
「本当にそう思う？」
「ああ。これから体育祭やマラソン大会があるかもしれないし、体力はつけておいた方がいいだろ」
ちなみに俺は中間テストが終わったら、ケヤキモール内にあるトレーニングジムに通う予定だ。
月額１５００ポイントで利用し放題で、トレーナーも少数だがいるらしい。
体力をつけるならジョギングでもいいのだが、野外だと他のクラスの生徒から襲われる可能性があるので、安全性を考えてジムに通うことにした。
「そ、そうよねっ！」
「うちの寮って防音性が高いみたいだから、激しい踊りじゃなければ

他の部屋の人たちにも迷惑は掛からないと思うぞ」
「そんな高いわけ？」
「ああ」
「そ、そうなんだ……。へ、へぇ……」
なぜか顔を赤らめる軽井沢。
ダンスで失敗して転倒した自分でも想像しているのだろうか。

♦♦♦

翌日。俺は他クラスを偵察するために、松下を連れて勉強会終了後に図書室を訪れていた。
昨日は椎名に絡まれたが、今日は松下がいるので問題ないだろう。
「勉強会をしてるのはCクラスとDクラスだね」
「なんでわかるんだ？」
「Cクラスの一之瀬さんは有名だし、Dクラスの生徒は櫛田さんに確認しておいたから」
「一之瀬ってCクラスの学級委員長って呼ばれてる人だっけ？」
「そうそう」
「一之瀬の隣にいるイケメンは？」
「確か神崎くんだったかな。一之瀬さんの右腕らしいよ」
「それも櫛田情報？」
「うん」
「……あいつ凄いな」
さすがコミュ力の化身である。
堀北に櫛田の一割でもコミュ力があれば……。
「ちなみにDクラスのリーダーは知ってる？」
「ううん。Dクラスの情報は少ないみたい」
「そっか」
「それよりいつまで読書をしたふりすればいいの？」
俺と松下は本で顔を隠しながら他クラスの様子を窺っている。
傍から見たら文学カップルにしか見えないだろう。

「もう少しだ」
「別にいいけど。それより椎名さんはいないみたいだね」
「ああ。やはりハニートラップだったんだな」
やはり俺が一人になるのを見計らって声をかけてきたんだ。
今日も松下が俺から離れたら絡んでくるかもしれない。
「松下」
「ん？」
「頼むから俺から離れないでくれ」
「……今のは告白？」
鼻で笑いながら問いかける松下。
わかってるくせに、意地悪な性格をしている。
そもそもこんな状況で人生初告白をしてたまるか！
「告白するならもう少しロマンチックな場所がいいな」
「……た、例えば？」
からかわれるとわかってるのに、つい質問をしてしまった。
「ベッドの上とか？」
「ばっ……!?」
しまった。予想外の答えに大声を出してしまった。
勉強をしている生徒たちの視線が俺達に注ぎ込まれる。
「……帰るか」
「うん」
一瞬だが注目を集めてしまったので俺の心臓はバクバクしている。
それとは正反対に松下はいつものすまし顔だった。
美少女なので普段から視線を浴びるのに慣れているのだろうか。
……もう少し俺もメンタルを鍛えなければ。
図書館を後にした俺たちはファミレスに来ていた。
今日は軽井沢との勉強会がないので、松下と一緒に夕食をとることにした。
「今日は俺が奢るよ」
「いいの？」
「うん。勉強会で迷惑をかけてるからな」

もともと松下は俺のサポート役で参加していたが、俺が須藤に専念するため松下が軽井沢、三宅、沖谷の面倒を見ることになった。
なのでお礼を兼ねて夕食を奢ることにしたのだ。
「別に迷惑だとは思ってないよ。でもお礼ということなら遠慮なく奢ってもらうね」
「ああ」
「次はプラダのバックがいいな」
「貢ぐ君にはならないぞ?」
「冗談だよ」
松下と軽口を叩いてると、注文した品が運ばれてきた。
今日はチーズハンバーグだ。
勉強会を頑張っている自分へのご褒美だ。
これで中間テストでいい成績を残せたらリブステーキでも頼もう。
そんなことを思いながら、松下との食事を楽しんだ俺であった。

♦♦♦

その日の晩。珍しく寝付けなくなった俺は気分転換しようと軽く散歩に出かけることにした。
そこまで遅い時間帯ではないが、念のため防犯グッズを携帯する。
ちなみに松下、軽井沢、佐藤、篠原にも同じ防犯グッズを持たせている。
最初に勧めた時は必要ないとあしらわれたが、可愛い女子は暴漢に狙われる可能性が高いと説明したところ、すぐに購入してくれた。
篠原以外の3人は美少女なので、俺に言われる前に自覚して防犯グッズくらい携帯してほしいものだ。
周囲を警戒しながら寮の裏手に向かうと、とんでもないものを見てしまった。
綾小路が襲われているっ!?
俺は急いで防犯ブザーのピンを抜いた。
直後に大音量のブザーが出力される。

「な、なにっ!?」
「なんだ!?」
この防犯ブザーは家電量販店で購入したものだ。
音量は１００ｄｂに設定されている。標準は８５から９０ｄｂ前後なので、非常に大きな音量と言えるだろう。
「立花くんっ!?」
「立花だと？」
女子の声がすると思ったら堀北だった。
なるほど。
暴漢に襲われた堀北を綾小路が守ったんだな。
やるじゃないか綾小路！
「二人とも安心しろ。もう大丈夫だ」
「何が大丈夫なの？　うるさいから早く止めて」
被害者の堀北が防犯ブザーを止めろと言ってくる。
可哀そうに。
あまりの恐怖に混乱しているのだろう。
「落ち着け堀北」
「私は落ち着いているわ。いいから早く止めなさい」
「先生が来るまで止めない方がいいだろ」
「それが困ると言ってるのよ」
先生に知られたくないとは。
まさか綾小路は間に合わず、堀北はいかがわしい写真でも撮られてしまったのだろうか。
「立花。オレも大事にはしたくない。だから止めてくれないか？」
「綾小路まで脅されているのか？」
「お前は何を言っているんだ？」
恐らく綾小路は暴漢からカメラを奪おうとしたのだろう。
「いいから貸してっ！」
「あっ」
綾小路と話している最中に、堀北が防犯ブザーを奪いピンを元の位置に戻してしまった。

「なにをするんだっ!?」
「それはこっちの台詞よ！」
確かに性被害など先生には知られたくないだろう。
……仕方ない。
ここは俺が暴漢からカメラを奪うしかない。
「お前が立花恭平か」
「っ……」
いつの間にか目の前に暴漢が立っていた。
「くっ……！」
瞬間的に首をガードしながら距離を取る。
危なかった。
堀北に集中しすぎて完全に油断をしていた。
「あなたは……生徒会長っ!?」
改めて暴漢の顔を見ると、正体は我が高度育成高校の生徒会長だった。
「ほう。俺を知っているのか」
「生徒会長だから当たり前じゃないですか。それに月一の生徒会だよりも見てます」
「それは嬉しいな」
「情報収集の為です。それに橘先輩のコラムが面白いので」
「ふっ。それは本人に言ってやれ」
「……それよりショックですよ。まさか生徒会長が女子を襲うなんて……」
生徒会トップの人間がこのような愚行をするとは……。
どうやら高度育成高校は腐っているようだ。
「えっと、確かに襲われたけれど……違うのよっ！」
なぜか被害者の堀北が生徒会長を庇う。
そこまで弱みを握られてるのか……。
「……鈴音。俺から説明をするから黙っていろ」
「は、はい……。兄さん」
「……兄さん？」

「ああ。俺は堀北学。鈴音の兄だ」
まさか生徒会長が堀北のお兄さんだったなんて……。
青天の霹靂である。
確かに兄妹と言われれば、似ているかもしれない。特に目つきの悪いところなんてそっくりだ。
しかし兄が妹を襲うなんて……。
「近親相姦はだめですよ」
「……」
「いくら妹が美人だからって欲情しちゃダメでしょ」
生徒会長に哀れみの目を向ける。
恐らく2年ぶりにあった妹が美人に成長していたものだから、三大欲求である性欲が暴走してしまったのだろう。
だからって人を襲っちゃいけない。
まして実の妹を襲うなんて言語道断だ。
「あなたは何を言ってるのっ!?」
「……ん?」
「私は兄さんに性的被害は受けていないわ」
「……え?　そうなの?」
「そうよ。ただ私が兄さんを怒らせてしまっただけ……」
「つまり性的被害は受けてないけど、DVは受けてるってことか?」
「DVも受けてないわ」
「ちょっと何言ってるかわからない」
「それはこちらの台詞なのだけれど」
混乱してると生徒会長と綾小路が事の経緯を説明してくれた。
どうやら当初Dクラスに配属された堀北に失望した生徒会長が退学するよう迫ったらしい。
それを拒否した堀北が投げられそうになったところを綾小路が助けたとのことだった。
「……結局DV未遂じゃん」
「うっ……。それは……」
「生徒会長」

「なんだ？」
「実の妹に手を出しちゃダメでしょ」
「お前には関係ない。これは家族の問題だ」
「いや、家族関係なく暴力はだめでしょう。いくらしつけでも」
「……」
「生徒会長の頭って昭和なんですか？　今は令和ですよ。考え方をアップデートしましょうよ」
「……」
「お兄さんがそんなんだから、堀北の性格が歪んでしまったんじゃないんですか？」
「ちょっと、誰の性格が歪んでるですって？」
「堀北に決まって……ぐげぇっ!?」
　刹那。腹部に衝撃が走った。
「い、痛い……」
　堀北が腹パンをかましてきたのだ。
　暴力を振るった人間に説教しているときに暴力を振るうなんて……。
「こ、この……ＤＶ兄妹め……」
「死にたいの？」
「生きたいです！」
「ふはっ」
　堀北の暴力から逃れようとしていると、急に生徒会長が笑った。
　他人が暴力を受けている姿を見て笑うなんてひどい男だ。
「鈴音。面白い友人と出会えたみたいだな」
「彼は友人ではありません」
「そ、そうです……」
　堀北は友達が一人もいない可哀そうな子だ。
「なにか失礼なこと考えなかった？」
「考えてない！」
　再び拳を振り上げる堀北。
「どうやらまだ孤高と孤独を履き違えているようだな鈴音」

「え……？」
「だが面白いクラスに配属されたのはよかったかもしれないな」
「面白いクラスですか……？」
「立花。それと綾小路」
堀北の質問を無視して俺と綾小路に目を向ける生徒会長。
「入学して一ヶ月でＢクラスに昇級したのは見事だったが、Ａクラスの壁は高いぞ」
「は、はぁ……」
「それにＣ、Ｄクラスもこのまま黙っていないだろう」
「そ、そうですね……」
「Ａクラスに上がりたければ、死に物狂いで足掻け。それしか方法はない」
生徒会長はそう言い残し、ゆっくりと暗闇に消えていった。
残された俺たちは、しばらく無言の時間が続いた。
お腹の痛みが引かないので、こっそり帰ろうとしたところ堀北に腕を掴まれた。
「今からあなたの部屋に行くわよ」
拒否する気力はもう残っていなかった。

13話

綾小路と別れた俺は堀北を部屋に招いた。正確には堀北が強引に部屋に上がってきたのだが……。

とりあえず飲み物でも出そうと思ったが、堀北はすぐにでも話をしたいようで、座るよう命じられた。

ここ俺の部屋なんだけどな。

「兄さんとのことは他言無用でお願い」

もちろん他人に話すつもりはない。

それより俺は堀北が命令ではなくお願い事をしたことに驚いた。

「堀北ってお願い事出来るんだな」

「あなた、私をなんだと思っているの？」

「いや、堀北のことだから強制的に命じられると思って」

「……あなたと綾小路くんには迷惑をかけたから」

罰が悪そうに堀北が言う。

家族の揉め事にクラスメイトを巻き込んでしまったことに多少罪悪感を感じているようだ。

「それで他の人には言わないでくれるのよね？」

「ああ、誰にも言わないから安心してくれ」

「……そう」

「ただ生徒会長とは距離を取った方がいいと思うぞ」

さすがにクラスメイトが実の兄に暴力を振るわれるのを黙って見ているわけにはいかない。

恐らく堀北が俺や綾小路に暴力を振るうのは兄貴の影響だろう。

家族からＤＶ被害を受けた人は、自身の子供にも暴力を振るってしまう傾向があるとニュースで見たことがある。

堀北にも軽井沢みたいに、身体のどこかに傷があるのかもしれない。

「それなら心配ないわ。兄さんは私を見限ったと思うから……」

そうなのだろうか。

むしろ兄貴の方が妹に執着しているように見えたが……。

でも堀北がそう思ってるなら、勘違いしたままの方がいいかもしれない。

兄貴と距離を取ってもらった方が彼女は安全だ。

「そっか。それで勉強会の調子はどうだ？」

空気が悪くなりそうだったので、話題を変えることにした。

「問題ないと思うけれど。佐藤さんも篠原さんも基礎は出来ているから」

「そういえば佐藤は中一までは真面目に勉強してたと言ってたな」

「そう」

「遊びでも覚えて、勉強を疎かにしちゃったんだろうな」

「もったいないわね。それよりあなたの方はどうなの？」

「勉強会のことか？」

「いえ。赤点を免れる方法は見つけたのかしら？」

そっちか……。

赤点を確実に免れる方法はあると茶柱先生は言っていたが、いまだにその方法は見つけられていない。

思い当たることはいくつかあるが、どれも現実的ではない。

「まだだ」

「でしょうね。そもそも本当にあるか怪しいと思うのだけれど」

「茶柱先生が嘘をついていると？」

「ええ。だって確実に赤点を免れるとしたら、事前にテスト問題と解答を知るくらいしかないでしょ？」

事前にテスト問題と解答がわかれば赤点を免れる？

……そうか！

それが答えだったんだ！

「わかったぞ堀北！」

「え……？」

「堀北が今言ったことが答えだったんだ」

「……どういうことかしら？」

「だから事前にテスト問題と解答を知ればいいんだよ」

「どうやって？」

「……茶柱先生にポイントを支払って買うとか？」
「売ってくれるのかしら？」
「明日聞いてみる」
「ええ」
どうしよう……。
さっきは解決したと思ったけど、堀北に突っ込まれて自信がなくなってきた。
以前先生を買収できるか聞いたが、答えはＮＯだった。
テスト問題を売ってもらうのは買収になるのだろうか。
明日松下に相談してみよう。

♦♦♦

「さすがにテスト問題はポイントを支払っても教えてくれないと思うよ」
翌朝。いつもの待ち合わせ場所であるエントランスで松下にさっそく相談したところ、俺の意見は一蹴されてしまった。
「そっか……」
「とりあえずここじゃ他の生徒に話も聞かれるかもしれないし歩きながら話そうか」
「わかった」
松下に促され横に並んで歩きだす。
寮を出ると強烈な紫外線が俺たちを襲った。
５月初旬だがそれなりに気温は高くブレザーを鬱陶しく感じてしまう。
「私も色々考えたんだけど」
「うん」
「過去問なんてどうかな？」
「過去問？」
「そう。恐らく一学期の中間テストの範囲は毎年変わってなくて、過去問を解くのが赤点を免れる一番の方法かなって思ったんだけど」

過去問か。
中学校の定期テストじゃ過去問なんて考えもしなかったが、確かに可能性は一番高そうだ。
先生を買収出来ない以上、過去問くらいしか赤点を免れる方法はないだろう。
「確かにそれしか考えられないかも」
「でしょ。だから今日あたり手に入れようかと思って」
「過去問なら先生から譲ってもらえるかもな」
「どうだろう。とりあえずダメもとでお願いしてみて、ダメなら先輩から買うよ」
「知り合いの先輩でもいるのか？」
「いないよ。でも自信はあるから大丈夫」
確かに松下の容姿なら軽いボディタッチで落とせそうだ。
俺と松下は学校につくとすぐに職員室に向かった。
中間テストが近いからか、茶柱先生に声をかけたところ生徒指導室に移動させられた。
「それで今日の質問はなんだ？」
「質問というよりかお願いなんですけど」
「言ってみろ」
「過去問をくれませんか？」
「……過去問だと？」
「はい」
茶柱先生の目が鋭くなる。
「可能なら過去2年分の過去問を頂きたいです」
松下がさらに要求する。
これも彼女の提案で、過去2年の過去問を手に入れて、テストの範囲に違いはないか、問題の傾向などを解析したいらしい。
やっぱり松下は俺より頭が切れる。ていうかBクラスで一番じゃないだろうか。
「過去問は松下が考えたのか？」
「そうですけど」

「そうか」
　茶柱先生が何だが嬉しそうだ。
　俺の質問攻めがないのがわかって安心してるんだろうか。
「だが過去問を渡すことは出来ない」
「そんな殺生な……」
「そんな顔をしても過去問はやらんぞ立花。それに私から貰えるとは思っていなかっただろ？」
「そうですけど。先生からなら無料で手に入るかと少し期待してたんで」
「残念だが私はそんな安い女じゃないぞ」
「でしたか。……煙草１カートンじゃだめですか？」
「ダメだ。……それよりなんで私が喫煙者だとわかった？」
「え……？　だって臭いますし」
「……え？」
「俺って人一倍嗅覚が鋭いみたいなので」
「そ、そうか……。松下はわかっていたか？」
「いえ。私は気づきませんでした」
「ほっ」
　一安心してる茶柱先生に、俺は最後に質問をぶつける。
「念のため確認なんですけど、テスト範囲に変更はありませんか？」
「……っ!?」
　久しぶりに驚愕の表情を浮かべる茶柱先生。
　そんな大した質問をしたつもりじゃないんだけど。
「なぜそんなことを聞く？」
「いや、いつも通り気になったからですけど」
「……そうか。テスト範囲の変更はある。この後のＳＨＲで案内する予定だ」
「そうでしたか。それじゃ俺たちはこれで失礼します」
「待て立花」
　退室しようとすると茶柱先生に呼び止められた。
「なぜテスト範囲が変更になるか気になった？」

「えっと、中二のときの担任が定期テストの範囲を間違って教えてて、痛い目にあったことがあるんですよ」
「そうなのか」
「はい。なので念のため確認しました」
「わかった。呼び止めて悪かったな。教室に戻れ」
「はい。失礼します」
茶柱先生は話は終わったとばかりに、手をひらひらと振って、仕草で示した。
「立花くん」
「ん？」
「さっきのはアウトだから」
教室に向かう道中。松下が呆れたような顔で指摘しだす。
「煙草の話か？」
「正確には煙草の匂いがするって話ね」
「でも指摘したほうが本人のためになるんじゃないか？」
「指摘するなら第三者がいないところで言わないとダメでしょ」
「そうなのか……」
「茶柱先生だから大丈夫だと思うけど、教師に恥をかかすのは自分の印象を悪くするだけだよ」
「……わかった。気をつける」
「うん」
松下の教育的指導を受けながら教室に辿り着いた。
いつも通り談笑しているグループ、真面目にテスト勉強をしている生徒、手鏡で自分の美しさにうっとりしている生徒、『猿でもわかる英語』という教材を真面目に呼んでいるバスケ少年など、いつもの光景が目に入ってくる。
「おっす立花！」
「おはよう。今日も勉強熱心だな」
「当たり前だろ！　このグローリーな時代に英語は必須だぜ！」
「グローリーじゃなくてグローバルな」
テスト勉強だけに専念してほしいところだが、本人がやる気になっ

てるので本音は言わないでおこう。
それに中学じゃろくに勉強していなかったので、子供向けの教材の方が須藤の頭に入るかもしれない。
「見てろよ。卒業するまでにＴＷＩＣＥで満点を取ってやるぜ！」
「ＴＯＥＩＣな」
須藤が言ってるのは軽井沢が好きなガールズグループだ。
何度もライブＤＶＤを見せられたから覚えちゃったよ。

♦♦♦

昼休み。松下は軽井沢、櫛田、王を連れて食堂に向かった。
なぜ軽井沢たちも連れて行くのか事前に聞いたところ、標的にする男子生徒の好みに合う可能性を高くするためだそうだ。
松下はお嬢様系、軽井沢はギャル、櫛田は巨乳＋正統派、王はロリータ、といったところだろう。
贅沢を言えば堀北と長谷部もいれば完璧だった。
標的は2年か3年のＤクラスの男子生徒だ。
松下たちは山菜定食をまずそうに食している男子に声をかけた。
山菜定食は無料で、恐らくＤクラスの生徒しか注文しないメニューだ。
なので上級生の顔と名前が一致しない松下でもすぐにＤクラスの生徒を見つけ出すことが出来た。
俺と平田は心配そうに影から見守った。
遠目からなので会話は聞こえなかったが、その上級生は櫛田に両手を握られ顔を真っ赤にしている。
まるで松下にからかわれている自分を見ているようだ。
とどめとばかりに松下が上目遣いでお願いをしているのがわかった。
それが決まり手となったようで、上級生の食事を終えると5人は食堂を出ていった。
恐らく目立たない場所で過去問の受け渡しとポイントの譲渡をす

るのだろう。
　昼休み終了まで１０分。松下からミッションコンプリートの通知が届いた。
　なんと５０００ポイントという格安で取引が成立したらしい。
　ちなみに費用はクラスメイト全員から徴収する予定だ。
　クレームを言いそうな生徒もいるだろうが、女子には平田、男子には櫛田からお願いをすれば問題ないだろう。
　放課後。勉強会の準備をしようとしたところ松下と軽井沢から指令が出された。
「明日は立花くんたちの番だから」
「どういうことだ？」
　詳細を求めると松下が答える。
「言ったでしょ。過去問は２年分欲しいって」
「ああ」
「今日手に入ったのは２年生が保管していた過去問。つまり去年の過去問ね」
「３年からも過去問を手に入れろってことか？」
「正解。なので明日は立花くん、平田くん、綾小路くんの３人で頑張って手に入れてね」
「３年も松下たちが相手したほうがいいんじゃないか？」
「女子ばかりに働かせて、男子は働かないつもりなんだ？」
「いや、そういうわけじゃ……」
　確かにこのままだと女子におんぶにだっこ状態である。
　でも俺も平田も勉強会で講師してるし……、
　だめだ。軽井沢ならともかく、松下に口論で勝てる気がしない。
「わかった。３年からは俺たちが過去問をゲットするよ」
「うん、よろしくね」
「頑張りなさいよ」
　松下と軽井沢から励ましの言葉を頂いた俺はさっそく平田と綾小路に指令を伝えた。
　綾小路は嫌がっていたが、渋々承諾してくれた。

「とりあえず綾小路くんは服装どうにかしようか」
「……え？」
翌朝。部活に所属していない俺と綾小路は２０分ほど早く登校していた。
教室にはすでに松下、軽井沢、佐藤がいた。
「シャツをズボンから出すのダサいし、ネクタイも緩みすぎ」
「だ、ダサい……」
佐藤の容赦ない口撃が綾小路を襲う。
どうやらファッションに詳しい佐藤が、俺と綾小路の身だしなみをチェックするらしい。
「でもシャツを出すのが流行ってると聞いたんだが……」
「そんなの初耳なんだけど」
「え」
「そんな制服を着崩してるの時代遅れのヤンキーくらいだよ」
「じ、時代遅れ……」
「前から思ってたけど、綾小路くん悪目立ちしてるよ？」
「……」
普段はクールフェイスの綾小路だが、明らかにショックを受けている表情を浮かべている。
俺も綾小路の格好についてはお腹も冷えそうだしどうかと思っていたが、女子たちにも不評だったらしい。
「とりあえずこんなもんかな」
１０分後。お洒落に制服を着崩している綾小路の姿があった。
シャツのボタンは一つ目だけ外され、ネクタイも程よく緩んでいる。
さらに髪も手をくわえられたようで、無造作な中分から韓流アイドルのような中分になっていた。
軽井沢が調子に乗ってメイクをしようとしていたが、さすがの綾小路も断固拒否していた。
ちなみに俺は髪形を整えられたくらいで、あまり変化はなかった。
過去問はすぐ手に入った。

山菜定食を食べている女子に声をかけたところ、運がいいことに3年Dクラスの女子だった。

ちなみに声をかけたのはじゃんけんで負けた平田だ。

3人ともナンパ経験はゼロで、彼女いない歴＝年齢だったのである。

その女子生徒は平田がお好みのようで、過去問を譲ってくれるようお願いをしたら、３０００ポイントと俺たちの写真で取引が成立した。

写真を何に使うか聞いたところ、気味悪い笑みを浮かべただけで答えてくれなかった。

仕事を終え教室に帰ろうとしたところ、綾小路が上級生の女子たちに捕まっていた。

どうやら逆ナンされているようだ。

女子たちは綾小路の腕に抱き着いたり、顔を近づけたり、やりたい放題である。

素直に羨ましいと思った俺も混ざろうかと思い一歩踏み出したところ、松下と軽井沢に腕を掴まれて教室に連れ戻されてしまった。

その日。密かに女子のみで投票されているイケメンランキングに変動があった。

食堂に突如現れたイケメンが見事一位に輝いたらしい。

１４話

無事に過去２年分の過去問を手に入れた俺たちは、ようやく茶柱先生が言っていた確実に赤点を免れる方法に辿り着いた。

２つの過去問は問題構成がまったく同じであったのだ。

なので今年の中間テストも同じ問題が出題される可能性が高い。

これならどんなお馬鹿さんでも解答欄をずれて書いたりしなければ赤点を取ることもないだろう。

「よし。早速みんなに教えるか」

「待って。みんなにはぎりぎりまで教えない方がいいと思う」

２つの過去問を確認し終えた俺はクラスメイトに報告しようとしたところ、一緒に確認をしてくれていた松下がそれを止めた。

「なんでだ？」

「過去問の存在がわかったら、みんなテスト勉強やめちゃうでしょ？」

「だろうな。過去問を暗記すればいいしな」

「だよね。私の予想だけど一部の生徒を除いて、みんな今が人生で一番勉強してると思うんだ」

「少なくとも須藤や軽井沢たちはそうだろうな」

「うん。だから今後のことも考えて、退学に対する恐怖心を持ちながら勉強してもらった方がいいと思うんだよね」

「な、なるほど」

確かに期末テスト以降は過去問が手に入るとも限らないし、そもそも問題構成が違う可能性も高い。

過去問に頼る楽さを覚えてしまったら、期末テスト以降にテスト勉強に身が入らない生徒が出てくるのは否めない。

松下は今回だけじゃなく先のことまで考えていたのか。

「わかった。平田には俺から言っておく」

「よろしく。私は軽井沢さんたちに伝えるね」

過去問を手に入れた事実を知っているのは今のところ俺、松下、軽井沢、平田、佐藤、篠原の６人だ。

「ちなみにぎりぎりって何日前に渡すつもりなんだ？」

「うーん、2，3日前でいいんじゃないかな。前日だと寝落ちしちゃう人もいるかもしれないし」
「確かに須藤あたりは寝落ちしそうだな……」
「でしょ。あ、でも講師の人たちには伝えてもいいかも。そこらへんは平田くんと調整してくれる？」
「わかった」
その後。平田や軽井沢たちも松下の提案に異論はなく、過去問は本番2日前にクラスメイトに渡すことになった。
ただ須藤に関しては不安だったので、みんなより1日早く過去問を渡すことにした。
なお、過去問を手に入れて一安心した俺だったが、順調に事が進んでいることに不安感を抱いてしまい、過去問以外に赤点を免れる方法がないかと考えてしまう日々が続いた。

♦♦♦

本番まで一週間を切った某日。ほかのクラスも過去問を手に入れたか確認したくなった俺は松下、軽井沢を連れて図書室に足を運んでいた。
前回は椎名ひよりのハニートラップに引っかかりそうになったが、今回は女子が二人もいるので問題ないだろう。
「うわぁ。すっごい人がいるじゃん」
軽井沢は図書室に入るのは初めてなようで、利用している生徒数の多さに驚いている。
「テスト前だからね。普段は空いてるよ」
「そうなんだ。松下さん読書好きだったんだ？」
「お金かからないからね。軽井沢さんは？」
「あたしは漫画しか読まないかな」
だろうな。
軽井沢が読書してるイメージがわかない。
俺たちは本を探すふりをしながらテスト勉強をしている生徒たち

を観察した。
　１０分ほど観察したが、どうやら過去問を暗記している生徒はいなさそうだ。
「そろそろ帰るか」
　目的は果たせた。長居は無用だ。
　二人を連れて退室しようとしたところ、銀髪の美少女が目に飛び込んできた。
　椎名ひよりだ。
　数冊の単行本を抱えて入室してきたので、恐らく返却しに来たのだろう。
　俺は咄嗟に二人の腕を掴み、本棚に身を隠した。
「き、急にどうしたのよっ!?」
　軽井沢が顔を赤くしながら非難めいた視線を向けてきた。
「椎名ひよりが現れた。二人がいるから問題ないと思うが、なるべく接触は避けたい」
「椎名ひよりって……この前言ってたハニートラップの女子だっけ？」
「そうだ」
「そんな感じには見えないけど」
　甘いぞ軽井沢。
　確かに見た目は文学少女にしか見えないが、椎名が所属しているのはＤクラス。
　クラスのリーダーに命じられて平気でハニートラップを仕掛ける女だ。
　すでに何人かの男子生徒が餌食になっているかもしれない。
「松下さんはどう思う？」
「外見だけ見れば悪い人には見えないけど。でも他クラスの人だから警戒するに越したことはないと思う」
「そっか。だよね」
　本の返却を終えた椎名はそのまま図書室を後にした。
　新たに本を借りる予定はなかったようだ。

退室する前にきょろきょろしていたが、クラスメイトでも探していたのだろうか。

……いや。新たな獲物を探していたのかもしれない。

俺を落とすことに失敗したので、次の獲物は慎重に選んでいるのだろう。

まったく可愛い顔をして恐ろしい女だ。

♦♦♦

中間テストの二日前。予定通りクラスメイトに過去問が配られた。

ほとんどの生徒が突如舞い降りた幸福に興奮を抑えきれず狂喜乱舞だ。

山内がもっと早く寄越せと文句を言っていたが、軽井沢と篠原に口撃され撃沈していたのが面白かった。

過去問を手に入れた生徒たちには、早々に帰宅してもらうことにした。

これは暗記はもちろんだが、過去問の情報を他のクラスに漏洩させないためである。

他のクラスに友達が多い櫛田にもテストが終わるまでは交流しないようお願いをしている。

「立花くん。あたしたちも帰ろうよ」

「いいけど。本当に俺の部屋で勉強するのか？」

「そうだけど」

「過去問があるから暗記すればよくないか？」

「最終的に暗記はするけど、まずは普通に解いた方が勉強になるでしょ？」

「……本当に軽井沢か？」

「どういう意味よっ！」

まさか軽井沢からそんな言葉が聞けるなんて。

本当に成長したんだな。

勉強会を続けてよかった……。

「ちゃんと毎日勉強してるんだからね！」
「知ってる」
いつからか知らないが、どうやら軽井沢は俺との勉強会がない日でも一人で予習・復習をしていたらしい。
「それじゃ帰るか」
「うん」
寮までの道中。
軽井沢から意外な情報が入った。
「佐藤が綾小路に惚れてる？」
「まだ気になってる程度だと思うけど」
「いつからだ？」
「過去問ゲット作戦のとき」
あの時か。
いつの間にそんな作戦名が名付けられていたのかと疑問に思ったがスルーすることにした。
「佐藤さんってメンクイだからねー」
「平田は？」
「平田くんはライバル多いから狙うのはやめたんじゃない？」
「そうか」
「でも綾小路だってライバル多くなるんじゃないか？」
「だから今のうちに唾を付けようとしてるのかも」
「汚いな」
「本当に唾をつけるわけじゃないわよ！」
やはり軽井沢の突っ込みは鋭い。
俺が軽くぼけても的確に突っ込んでくる。
松下とも相性がいいと思ったが、軽井沢もなかなかどうして。
そんな雑談をしていたらすぐに寮に辿り着いてしまった。
帰宅早々に軽井沢は勝手知ったる俺の部屋で冷蔵庫から飲み物を取り出して用意してくれた。
軽く水分補給をし、過去問に取り掛かる俺と軽井沢。
２時間ほどで全教科の過去問を解き終え、自己採点をしたところ、

軽井沢は全教科８０点以上の好成績だった。
「凄いじゃん」
「でしょ！」
「これなら赤点の心配はないだろ」
「やった。それじゃあたし夕食作るね」
「いいのか？」
「いいわよ。立花くんはお風呂でも入ったら？」
「それじゃお言葉に甘えて」
夕食の献立はかつ丼だった。
中間テストに向けてのゲン担ぎのようで、明日はとんかつを作ってくれるらしい。
ギャルなのに古風な考えをお持ちなんだな。

♦♦♦

「欠席者はなし、全員揃ってるみたいだな」
中間テスト当日。茶柱先生は不敵な笑みを浮かべながら教室へやって来た。
「とうとう中間テストを迎えたわけだが、何か質問がある者はいないか？　立花以外で」
なぜ俺を省く。
さすがの俺もテスト前に質問攻めにしたりはしないぞ。
「……いないようだな」
「はい。僕たちは数週間真面目にテスト勉強に取り組んできました。このクラスで赤点を取る生徒はいませんよ」
「随分な自信だな平田」
「自信じゃありません。確信です」
平田の言葉に教室にいる半数以上の女子たちがうっとりしたことだろう。
茶柱先生はそんな平田の言葉が嬉しかったのか、足取りも軽くテスト用紙を配りだした。

「もし、今回の中間テストと7月に実施される期末テスト。二つとも誰一人赤点を取らなかったら、お前ら全員夏休みにバカンスに連れて行ってやる」
「本当ですかっ!?」
茶柱先生の甘い言葉に池が反応した。
「本当だ。青い海に囲まれた島で夢のような生活を送らせてやろう」
「マジかよ……」
これは俺たちのモチベーションを上げるためについた茶柱先生の嘘だろう。
この学校が俺たちにそんな甘い蜜を吸わせてくれるわけがない。
無人島で悪夢のような生活を送らせてやる。
心の中ではこう言ったに違いない。
甘いですよ茶柱先生。
俺の心配性はクラスメイトにも伝染している。
「期待するなよ池」
ここで幸村がトリップしそうな池を制する。
「恐らく無人島でサバイバル生活をさせるんだろう」
「……え?」
「……え?」
池と茶柱先生が間抜けな反応を示した。
「幸村の言う通りだと思う」
「三宅もそう思うか?」
「ああ。10万ポイント支給の時みたいに、天国から地獄に落とそうとしてるんだろうぜ」
「じ、地獄……」
生徒から発される物騒な単語に茶柱先生が狼狽える。
「そういえば水泳の授業でガチゴリラ先生が全員泳げるようにするって言ってなかった?」
「言ってた言ってた!」
「もしかして遠泳でもさせられるんじゃないの?」
「きっとそうだよ!」

「理事長が黄金伝説のファンだって噂聞いたことあるよ！」
幸村と三宅に続き、生徒たちが憶測し始めた。
こんなにも学校に対して不信感を持ってくれるとは。
いい傾向だ。
「みんな落ち着くんだ」
ざわつくクラスメイトを平田が落ち着かせる。
「まだ決まったわけじゃない。もしかしたら中間テストの平均点数が一番高いクラスにバカンスがプレゼントされるかもしれない」
「平田の言う通りだ。まずは中間テストに集中しよう」
「だよねー。夏休みのことはテスト終わってから考えればよくない？」
俺の言葉に軽井沢が同調する。
彼女には俺や平田にとりあえず同調するように指示している。
このような発言を重ねれば、軽井沢の地位が盤石になっていくはずだ。
「先生。説明を続けてください」
「あ、ああ……」
平田に促され茶柱先生が説明を再開した。
中間テストは5教科のみなので、一日で終えることになる。
期末より教科は少ないが、一日で受ける教科の数は中間の方が多いことになる。
昨晩。須藤から寝落ちが心配だと相談を受けたので、俺の部屋で過去問を暗記させた。
軽井沢から文句を言われたが、退学者を出さないためなので、休日に買い物に付き合うことを条件に承諾してもらった。
「それでは始め」

♦♦♦

中間テストは何も問題なく終わった。
自己採点で赤点を申告する生徒もいなかったので、全員が平均点以

上を取れたはずだ。
俺も自己採点は全教科１００点だった。ちなみに松下、平田、堀北、幸村も全教科１００点だったらしい。
一番面倒を見ていた軽井沢も軒並み９０点以上を叩きだし、須藤も６０点以上は取れたようだ。
採点結果は翌日に発表された。
予想通り赤点を取った生徒は一人もおらず、クラス全員が無事に退学を免れることとなった。
過去問を手に入れたからか、俺を嫌ってるはずの池や山内からも感謝された。
軽井沢と同じグループの佐藤と篠原は講師である堀北に抱き着いていた。
堀北は鬱陶しそうにしていたが、俺や綾小路と違って暴力を振るうことはなかった。
昼休み。
様々な重圧から一時的に解放された俺は平田と一緒に生徒会室に向かっている。
平田が先輩から備品補充の申請書を生徒会に提出するよう命を受けたらしい。
「ごめんね付き合わせて」
「気にしなくていいよ。生徒会には俺も用があったし」
久しぶりに橘先輩に会えるチャンスだ。
もし生徒会長がいなければ質問をしていい情報を聞き出せるかもしれない。
そんなことを思いながらスキップをし始めた瞬間だった。
「こんにちは」
前方から美少女が現れた。
「……っ」
その美少女は、まるでお人形の様だった。
美しいとしかいいようがない銀髪、日本人とは思えない青い瞳、お洒落な現代風の杖。

まるで創作物から飛び出してきたようだ。
「初めまして立花恭平くん、平田洋介くん」
「は、初めまして……」
二人そろって情けない声で挨拶をしてしまった。
「私はAクラスの坂柳有栖と申します」
「Aクラスだって？」
「はい。一緒にいるのはクラスメイトの神室真澄さん、橋本正義くん、鬼頭隼くんです」
坂柳有栖。
櫛田から頭脳明晰なAクラスのリーダーと聞いている。
まさかこんな小柄な少女だったとは。
「以前からお二人にはお声をかけようと思っていたんですよ」
あんな小さな身体で、見た目が強者そうな生徒を従えているのか。
特にあのロッチ中○みたいな髪形の生徒。
誰にやられたのか、顔がところどころ腫れている。
それより、最も気になるのは……
「あ、この杖は気にしないでください」
「怪我でもしているのか？」
「いえ。先天性の病気を患っていまして、歩行時に杖が必要なんです」
「そうなのか……」
本当にそうだろうか。
そのわりに、なかなか肉付きがいい太ももをしている。
……まさか！
「くっ……！」
俺は最悪の答えに辿り着き、大きく後ろに下がった。
いきなりバックステップをしたからか、この場にいる全員がきょとんとしている。
「平田気をつけろ！」
「な、なにがだい……？」
「あの杖……武器を仕込んでいる可能性がある」
「……はい？」

返事をしたのは平田ではなく坂柳だった。
「平田、ここはどこだ？」
「え？　ろ、廊下だけど……」
「正確には監視カメラが死角になっている廊下だ」
「……っ」
この学校はあらゆるところに監視カメラが設置されている。
だがどんなに設置していても、カメラの死角部分は出来てしまう。
恐らく坂柳たちはそこを狙ったのだろう。
俺たちＢクラスはＡクラスの一番のライバルだ。そのＢクラスの中心人物と評される生徒が二人も無防備に廊下を歩いているんだ。
Ａクラスにとって、これ以上の好機はないと判断したんだろう。
俺はポケットに忍ばせている防犯の刃を握りしめながら問い始める。
「危なかったぜ坂柳」
「な、なにがですか……？」
「まさか中間テスト直後に仕掛けてくるとはな」
「え、ええ。テストが終わったらお二人に声をかけようかと思ってましたが……」
「随分素直に答えてくれるんだな」
「事実ですから」
「そうか」
俺がポケットに手を入れてから、長髪の男子が殺気を放ってきている。
恐らく俺が武器を隠し持っていると思ったのだろう。
他の二人は俺を警戒する様子はない。先ほどから怪訝そうに俺を見てくるだけだ。
つまりあの長髪が坂柳の一番のしもべに違いない。
……もしかしてあの顔は坂柳にやられたのか？
そうだよな。
あんな武闘派みたいな男が、頭脳だけの女子に従うわけがない。
あの杖は……フェイクだ！

「あの、この杖は武器なんて仕込んでないですよ？」
「それはどうだろうな。そもそも坂柳は本当に杖が必要なのか？」
「え……？」
「歩行に杖が必要なわりに、なかなか肉付きがいい太ももをしている」
「なっ……」
「ガーターベルトで隠しているようだが、俺の目は誤魔化せないぞ」
「あ、あなたはどこを見ているんですかっ！」
頬を紅潮しながら坂柳が非難の目を向ける。
頭脳明晰なのに、意外と感情的なんだな。
「隣にいる長髪の男子」
「き、鬼頭くんのことですか……？」
「ああ。その顔。坂柳がその杖でボコボコにしたんだろ？」
「してません！」
「他の二人は調教不足のようだな。鬼頭と違って警戒心が足りない」
確か神室と橋本と言ったか。
俺に指摘されるとは思っていなかったようで、動揺しているようだ。
「調教なんてしていません！」
２対４か。分が悪すぎるな。
防犯ブザーを鳴らしてもいいが、被害を受けたわけではないので、逆に茶柱先生に怒られる可能性が高い。
「平田、撤退するぞ」
「わかった」
俺と平田は坂柳たちを警戒しながらバックステップでその場を後にした。
「あ、待ってくださいっ！」
坂柳が叫んでいるが、大人しく待つほど俺たちも馬鹿じゃない。
椎名ひよりを使ってハニートラップを仕掛けてきたＤクラス。
リーダー自ら俺たちを潰しに来たＡクラス。
「まったくどのクラスもいかれてやがる」
Ｃクラスのリーダーである一之瀬も危険な思考の持ち主に違いな

い。

いずれ仕掛けてくるであろう美少女の存在に俺は頭を悩ませた。

2巻
15話

中間テストが終わってから二週間が過ぎた。
俺たちBクラスは大きなトラブルに見舞われることなく、平和な学校生活を送っている。
また、嬉しいことに小さな変化もいくつかあった。
まずは学力がトップの幸村が週に二回ほど勉強会を開くようになった。
勉強会には博士、沖谷、佐倉など勉強が苦手な生徒が参加している。
みんな危機感を持ってくれているようで何よりだ。
「幸村、俺も今日から勉強会に参加していいか？」
放課後。とある生徒が勉強会の参加を望んだことに、クラスがざわついた。
「具合でも悪いのか？」
「失礼だな！　健康だよ！」
幸村が心配するのも仕方ないだろう。
なぜなら、とある生徒というのが――――問題児である池なのだから。
クラスメイトが動揺しているが、俺はこうなることをわかっていた。
話は昨晩に遡る。
「立花頼む！　櫛田ちゃんと付き合える方法を教えてくれ！」
夕食後、池に呼び出され、部屋に上がるなり土下座してお願いをされた。
「急にどうしたんだ？」
「どうしても櫛田ちゃんと付き合いたいんだ！」
「それはわかるけど、なんで俺に聞くんだ？」
悲しいかな。
俺は彼女いない歴＝年齢の恋愛未経験者だ。

「ほら、お前って軽井沢や松下と仲良しだろ」
「そうだな」
「クラスに彼女持ちがいないから、お前が一番女性経験あると思ったんだよ」
「なるほど」
平田や綾小路といったイケメンがいるが、彼らも彼女がいたことはないらしい。
三宅は長谷部と一緒にいることが多いが、ただの友達のようだ。
沖谷は女子に人気あるが、愛玩動物扱いをされているので論外。
つまり消去法で、美少女二人と仲良しの俺がセレクトされたのだろう。
「なあ頼むよ。お前だけが頼りなんだよぉ」
どうしたものか。
アドバイスしたからといって、池が櫛田と付き合える可能性は低いだろう。
ただ、こうして頼ってくれるのは嬉しい。
特に、池はもともと俺のことを嫌っていたので、これは親交を深めるいい機会かもしれない。
「わかった。協力する」
「本当かっ!?」
「ああ。ただ、櫛田と付き合えるかは断言できないから、それだけは理解してくれ」
「おう。よろしく頼むぜ師匠！」
「師匠っ!?」
こうして、俺は池と師弟関係を結ぶことになった。
「とりあえず櫛田と付き合いたいなら、櫛田に見合う男にならないといけない」
「今のままじゃ釣り合わないってことだよな」
「自覚はしてたのか」
「当たり前だろ。そこまで俺も馬鹿じゃないぞ」
驚いた。

てっきり自己評価が高いかと思っていた。
「それで何をすればいいんだ？」
「まずは自分磨きだ」
俺は池に以下のアドバイスを授けた。
・勉強を頑張って成績を上げる
・身だしなみを整える
・下ネタを控える
「べ、勉強か……」
「勉強は学生の本分だからな」
「そうだけどよ……」
「テストで赤点取って退学になりたくないだろ。退学になったら櫛田と会えなくなるんだぞ」
「櫛田ちゃんに会えなくなる……」
「そうだ。それに、奇跡的に櫛田と付き合えた場合のことも考えろ」
「く、櫛田ちゃんが俺と……」
「しっかり話を聞け」
「いてっ」
トリップしそうな池に脳天チョップをくらわせる。
「櫛田の学力はクラスでも上位だ」
「知ってるよ」
「もし進学希望の場合は、卒業後に偏差値が高い大学に進学するだろう」
「だろうな」
「もし池が馬鹿のままだったら、櫛田と付き合えても別々の大学に進学することになる」
「……っ」
「櫛田は美少女だからな。言い寄ってくる男も多いだろうな」
「なっ……」
「二人はすれ違いが多くなり、会う回数も徐々に減っていく」
そんな未来を想像しているのか、池の顔が徐々に青くなっていく。
「最悪、そのまま自然消滅してしまうかもしれないなぁ」

「そんな……」
絶望して顔を覆い隠す池。
これくらい脅しておけば十分だろう。
「そうなりたくないだろ？」
「当たり前だろ。せっかく櫛田ちゃんと付き合えたのに……」
いや、まだ付き合えてないから。
「なら、勉強頑張れるよな？」
「……おう！　やってやるぜ！」
恋心を利用して、俺は池のやる気スイッチを押したのだった。
池の学力は微妙だが、幸村なら根気強く付き合ってくれるだろう。
頼むぞ幸村。お前がエースだ。
「池くん、どうしたんだろうね？」
「さぁな」
「……悪い顔してる。池くんになにかしたんでしょ？」
「失礼だな。アドバイスをしただけだ」
「あとで教えてよね」
「わかった」
「それじゃ帰ろ」
「あいよ」
俺は軽井沢を連れ立って教室を後にした。

♦♦♦

「ねえ、今日は図書室行かないの？」
隣りを歩く軽井沢が訊ねた。
「行かない」
「まだ椎名さんを警戒してるの？」
「当たり前だろ」
椎名ひより。
Ｄクラス所属の自称読書大好き少女だ。
しかしそれは表向きの顔だ。

正体は――――ハニートラップ要員である。
椎名は読書好きの男子を標的にして、自身の優れた容姿を活かし、男子をたらしこむ悪女だ。
幸い俺はトラップに引っかかることはなかったが、恐らく数多くの男子が餌食になっているだろう。
「それより今日もスーパー寄るのか？」
「うん。牛乳とお米が切れそうだからさ」
軽井沢が申告した台所事情は、自室ではなく俺の部屋のことだ。
「今日はなに食べたい？」
「うーん、肉系がいい」
「肉系ってアバウトすぎなのよね……」
俺は軽井沢に勉強を教える代わりに、夕食を作ってもらっている。
軽井沢は家事が苦手そうに見えるが、実は女子力が高い。
「じゃあ肉じゃがで」
「肉じゃがね。……最近、野菜が高いのよね」
溜息をつきながらスーパーのネット広告をチェックする軽井沢。
「軽井沢はいいお嫁さんになるな」
「きゅ、急に何言ってんのよっ!?」
軽井沢はすぐに顔を真っ赤にさせて取り乱した。
自己評価が低い彼女は褒められると、すぐに照れてしまう。
「そんなに照れなくても」
「うるさい！　それ以上言うと、夕食を野菜炒めにするわよ！」
「すみませんでした」
肉じゃがから野菜炒めはグレードダウン過ぎる。
軽井沢を弄るのは夕食を作り終えてからにしよう。

♦♦♦

「夜分遅くごめんね」
時刻は２２時過ぎ。
相談したいことがあるとのことで、私服姿の松下が部屋にやって来

た。
「いや、大丈夫だ」
「今日も軽井沢さんに勉強教えてたんでしょ」
軽井沢に勉強を教え、彼女の手料理を美味しく頂き、二人で洗い物をして、軽井沢が大好きなＫ―ＰＯＰのＤＶＤを見てから、軽井沢は帰っていった。
「いつものことだからな」
「そっか。なら遠慮なくお時間頂くね」
「ああ。それで相談したいことって？」
「櫛田さんのことなんだけど」
櫛田桔梗。
我がＢクラスに所属する生徒だ。
櫛田は誰にでも優しく、その容姿もあいまって、男女問わず一番人気がある生徒といっても過言ではない。
「櫛田がどうかしたのか？」
「彼女の本質がわかったかなって」
「本質？」
「うん。恐らく彼女は――――承認欲求が人一倍強いと思う」
松下は以前から櫛田を警戒していた。
理由は櫛田がＤクラスに配属されたからだ。
もともと最底辺のＤクラスだった俺たちは不良品と呼ばれる生徒が集められたクラスだ。
勉強や運動が苦手だったり、コミュニケーション能力が低かったりなど、様々な生徒がいる。
そんな不良品クラスの中で異質なのが、櫛田と平田だ。
櫛田も平田も文武両道で素行も問題がない。
彼女たちのスペックを考えれば、ＡクラスかＢクラスが配属されるのが妥当だろう。
しかし、二人はＤクラスに配属された。
可能性として考えられるのが、俺のように中学時代に問題を起こした場合だ。

平田に関しては友達なので、彼から打ち明けてくれるまで待つつもりだ。

そんな俺のスタンスとは違い、松下は積極的に櫛田を観察した。

「まさか櫛田さんがあんな顔をするなんてね」

松下からの報告によると、櫛田はクラスメイトと学校で誰が一番可愛いのかという話をしていたらしい。

当然、櫛田の名前も候補に挙がったが、結果的に一番だったのはCクラスの一之瀬帆波だった。

『櫛田さんも可愛いけど、一之瀬さんはレベルが違うかも』

クラスメイトがそう言った直後、櫛田は怒りと憎しみに歪んだ顔をしていたようだ。

もちろん、相手にばれないよう顔を背けていたが、隠れて観察していた松下の目は誤魔化せなかった。

「承認欲求が人一倍強いことが、今の櫛田さんを形成しているんだと思う」

「優等生を演じてるってことか？」

「そう。確か立花くんの幼馴染も似たような感じなんだよね？」

「そうだな」

クラスの人気者である櫛田だが、俺はそんな彼女が苦手だった。

なぜなら松下が言った通り、櫛田は俺の幼馴染に似ているからだ。

表向きは優等生を演じ、裏では愚痴や中傷をしまくる腹黒女。

「まだ櫛田さんがDクラスに配属された理由はわからないけど、彼女の取り扱いに注意した方がいいと思うよ」

「別に今のままでいいんじゃないか？」

櫛田はクラスの人気者という立場を得ている。

これ以上何を望むというのだろうか。

「もっと彼女の承認欲求を満たしてあげるんだよ」

「まだ足りないってことか？」

「そう。立花くんって櫛田さんとあまり絡まないでしょ？」

「苦手だからな」

「それは知ってる。でも今後はもう少し櫛田さんと絡んでほしいな」

「……俺が櫛田の承認欲求を満たすってことか？」
「正解」
「なんで俺なんだ？」
「立花くんは、平田くんと山内くん、どっちに褒められたら嬉しい？」
「そりゃ平田だけど」
平田と山内を比べてはいけない。
平田に失礼すぎるぞ松下。
「それと同じだよ」
「……ん？」
「つまりね、立花くんみたいなクラス内で影響力が強い人物に褒められた方が、櫛田さんの承認欲求をより満たせるってことだよ」
「な、なるほど……」
「わかってくれた？」
「わかりました」
松下からの指示により、明日から定期的に櫛田を褒めることになった。
櫛田は苦手なタイプだが、これもＡクラスに上がるためなので我慢しよう。
櫛田の話は終わったが、俺たちは雑談に興じていた。
まず綾小路に好意を寄せている佐藤だが、週末に二人で出掛けることになったらしい。
意外なことに佐藤はデートが初めてのようで、松下にアドバイスを求めているとのことだった。
次の話題も色恋沙汰だった。
なんと、みーちゃんは幸村が気になっているようで、来週から勉強会のサポートをするようだ。
確かに彼女は英語が得意なので、講師役は十分に務まるだろう。
「みんな青春してるな」
「だね。それだけ学校生活に慣れてきたってことじゃない？」
「そうだな」
入学して二ヶ月近くが経過した。

衝撃的な展開が続いたが、中間テストが終わってからは、大きなイベントやトラブルもなく、比較的平和な学校生活を送っている。
「だから気をつけないと」
学校側はこの緩みを見逃さないはずだ。
学校だけじゃない。
Ａクラスの坂柳有栖。
Ｃクラスの一之瀬帆波。
Ｄクラスのリーダー。
各クラスのリーダーも、俺たちを潰す機会を窺っているはずだ。
俺たちのクラスは、入学後一ヶ月でＤからＢクラスに昇格したことにより、他クラスだけでなく上級生からも注目されている。
史上初の快挙を遂げた俺たちは、坂柳たちからしたら面白くない存在だろう。
特にＣ、Ｄクラスからしたら、『史上初の一ヶ月で降格したクラス』という不名誉な称号を与えられてしまったのだ。
「嫌な予感がするぜ」
近々大きなトラブルが起きる。
俺のシックスセンスがそう叫んでいた。

16話

翌朝。俺は松下から指示された業務を遂行するため、いつもより20分早く登校した。

松下から櫛田は毎日始業の30分前には登校していると聞いたので、二人きりになれる時間を確保するため、俺も早めに登校した次第である。

教室に入ると、鼻歌を歌いながら携帯を弄る櫛田の姿があった。

「あれ？　立花くんだ。おはようっ」

「おはよう、櫛田」

「ずいぶん早い登校だね」

「ちょっと早起きしちゃって。櫛田も早いな」

「私は毎日この時間に登校してるよ」

松下から聞いたから知ってるよ。

「毎日か。偉いな」

「そんなことないよ。早く登校しても勉強してるわけでもないし」

「じゃあなんで早めに登校してるの？」

「うーん、なんとなく」

「なんじゃそりゃ」

「あはは。よかったら私とお喋りしない？」

「いいぞ。俺も始業時間までどうやって時間を潰そうか思ってたところだし」

「ありがとう」

俺は櫛田と他愛もない話で盛り上がった。

気になったのは、中学でどう過ごしていたか聞かれたことくらいか。

「そっか。立花くんの実家は旅館だったんだね」

「ああ。ネットで調べるとすぐにヒットするぞ」

「そんなに有名なの？」

「かなり。なんでだと思う？」

「えっと……温泉が人気あるとか？」

「それもあるけど、一番の理由は座敷童子だな」
「座敷童子？」
「そ。櫛田も聞いたことあるだろ」
「うん」
うちの実家は昭和初期から座敷童子が出ると言われる旅館だ。
母親の話だと、何十人も座敷童子を見たと報告するお客さんがいたらしい。
ちなみに俺は見たことはない。
「確か、座敷童子を見たら幸せになれるんだっけ？」
「そう言われてる。実際、うちに泊まったお客さんで総理大臣や大企業の社長さんもいたからな」
「凄いねっ！」
「だろ。だから岩手で旅行する機会があったら、うちの旅館に泊まってくれ」
「うん。その時は友達割引してくれると嬉しいなっ」
やはり櫛田はあざとい。
洗練された男に媚びる可愛らしい動作は幼馴染にそっくりだ。
だがこれはＢクラスの武器ともいえる。
実際、櫛田のおかげで過去問を手にれることも出来たし。
「わかったよ。両親も櫛田みたいな美少女がお客さんになってくれたら喜ぶだろうからな」
「そ、そんな……美少女だなんてっ……」
よし。自然に容姿を褒めることが出来た。
このまま櫛田の承認欲求を満たしてやるぜ。
「いや、事実だろ。客観的に見て櫛田は美少女だと思うぞ」
「あ、ありがと……」
容姿を評価され、頬を紅潮させる櫛田。
顔の赤みまでコントロールできるなんてすごいなこの女。
退学して女優目指した方がいいんじゃないか。
「でも……私以外にも可愛い子たくさんいるよね」
ここで、〝私よりも〟ではなく〝私以外にも〟と言ったことから、

櫛田の承認欲求の強さが垣間見られる。
　恐らく自身の口から、他人より自分が下だということを、言いたくないのだろう。
「例えば？」
「い、一之瀬さんとか……堀北さんとか……」
「確かに二人とも美少女だと思うが、櫛田の方が愛嬌があって可愛いと思うぞ」
「……っ」
　外見だけなら長髪でスレンダーの堀北が好みだがあの性格じゃな……。
「そ、そうかな……？」
「ああ」
「一之瀬さんや堀北さんより私の方が可愛いの……？」
「さっきからそう言ってるだろ。ちなみに、平田や綾小路も同じこと言ってたぞ」
「平田くんと綾小路くんもっ!?」
　もちろん嘘である。
　ただ櫛田の承認欲求をより満たすため、二人の名前をお借りした。
　あとでメッセージを送って、口裏を合わせてもらえば問題ないだろう。
「そうなんだ。あはは、照れちゃうなぁ」
「だが、俺には心配事がある」
「な、なにかな？」
「櫛田は可愛いからたくさんの男子に言い寄られると思うんだ」
「えっ!?」
「何回も告白されると気苦労が絶えないだろう」
「え、っと……」
「それに櫛田ほど可愛いとストーカーが現れるかもしれない」
「ストーカーっ!?」
「もしトラブルにあったらすぐに茶柱先生に報告するんだぞ」
「あ、そこは立花くんじゃなくて先生なんだ」

「そりゃ生徒より先生の方が頼りになるだろ？」
「そ、そうだね……」
「とりあえず櫛田は可愛いから男には気をつけろってことだ」
「そんな、何回も可愛いと言われると……て、照れちゃうよぉ……」
可愛いなんて何百回も言われているだろうに。
やはり櫛田は演技の才能がある。
文化祭の演劇のヒロインは櫛田に決まりだな。
この学校に文化祭があるか知らんけど。
……よし。放課後に茶柱先生に質問しよう。
「ちょっとお手洗いに行ってくる」
「あ、いってらっしゃい」
今日はこれくらいでいいだろう。
櫛田の承認欲求もだいぶ満たされたはずだ。
むしろ満たされ過ぎて昇天しているかもしれない。
昼休みにでも松下に報告しよう。きっと褒めてくれるに違いない。
仕事を終えた俺はほくほくしながら教室を後にした。

♦♦♦

私――櫛田桔梗は承認欲求の塊だ。
家族に愛されなかったり、友人に恵まれなかったりなど、不幸な経験をしたわけではない。
同性の中でも恵まれた容姿であることも自覚しているし、運動も勉強も得意な方だった。
けれど、私より可愛い子は当然存在するし、私より勉強や運動が得意な子も存在する。
それも、芸能人やスポーツ選手ではなく、クラスメイトなどの身近な存在だ。
私は身近な誰かに負けると、感情が大きく揺さぶられる人間だった。
悔しさ、嫉妬、憎しみといった感情が混ざり合い、私の心の中に生

まれた闇は、負ける度に深まっていった。
そんな苦しみから逃げだすために、私は誰よりも友人から『信頼』を得ることで承認欲求を満たすことにした。
必死な努力のおかげで、私は誰からも好かれる人気者になった。
いろんな人間と関わることでストレスは溜まったけれど、それでも私は幸せだった。
さらに、みんなからの信頼を得た私は、みんなの『秘密』を知ることができた。
『秘密』とは、みんなが内に秘めたもの。
好きな相手だったり、過去の過ち、中には性癖まで晒してくれる人もいた。
他人には言えないであろう『秘密』を教えてくれることに、私はかつてないほどの優越感を得ることになった。
けれど、自分でも自覚できないほどのストレスを抱えた私は過ちを犯してしまった。
結果、私の中学生活は悲惨なものとなった。
だからこそ、私はリベンジを誓った。
過去の私を誰も知らない場所で、新しい楽園を作ろうとした。
なのに……あの女と再会してしまった。
堀北鈴音。
中学の同級生で、私の過去を知る唯一の人物。
堀北がいる限り、私に本当の平穏は訪れない。
私は新しい楽園を作るため、堀北を退学させることを誓った。
それなのに……
「わ、私が……一之瀬や堀北より可愛い……」
今朝は珍しい生徒と二人きりで会話をした。
生徒の名前は、立花恭平。
平田くんと並ぶクラスのリーダー的存在だ。
運動も勉強も得意で、顔も整ってる方だと思う。
そんな彼が、私を一番可愛いと評価した。
昨日。森と誰が学年で一番可愛いかという話をしていた。

もちろん私の名前もあがったけれど、一之瀬さんが一番という結論に達した。
それだけなら問題なかった。
私より一之瀬の方が美人なのは自分でもわかっている。
けれど、森はあろうことか私とレベルが違うとまで言ったのだ。
ふざけるなこのブスが！
他人の悪口ばかり言う外見も性格もブスのお前に言われる筋合いはない。
森の発言は私のプライドを酷く傷つけた。
すぐにでも森がみんなの陰口を言っていることを、クラスメイトに言いふらそうと思ったくらいだ。
そんなストレスを抱えながらも、私は今日も早めに登校した。
そして、立花から一之瀬より可愛いと言われてしまった。
私は今までの人生で一番の優越感を感じた。
あの堀北よりも可愛いと言われたことも、私の承認欲求を満たすスパイスになった。
「あいつ、私に惚れてるの……？」
立花には、松下千秋と軽井沢恵という親しくしている女子がいる。
それなのに二人の名前は一切出てこなかった。
つまり二人よりも私の方が可愛いと言うことだろう。
松下も軽井沢もタイプは違えど美少女の部類に入る存在だ。
そんなやつらに私は勝ったんだ。
あの一之瀬よりも。
うざい堀北よりも。
私は勝った。
私が一番なんだ。
「あぁ……」
立花は言った。
私の方が愛嬌があって可愛いと。
その愛嬌は私が努力して得たものだ。
なんだろう。

一之瀬より可愛いと言われたことも嬉しいけど、今までの努力も認められたような気がして、それも嬉しい。
「立花恭平……」
もしも、私が私じゃなければ、彼に恋に落ちたかもしれない。
でも、私は櫛田桔梗だ。
立花と付き合うのもいいかもしれない。
私があいつの恋人になったら、松下と軽井沢の悔しがる顔を見るだけで、かつてないほどの優越感に浸れそうだ。
けれど、私は誰とも付き合うつもりはない。
私に彼氏が出来れば、男子からの人気は落ちてしまうだろう。
そんなの許されない。
私はみんなから一番人気がある存在でいたい。
だから……
「ごめんね、立花くん。君とは付き合えないよ」
「……え？　なんで俺いきなり振られてるの？」
いつの間にか立花が教室に戻ってきていた。
立花の間抜け顔を見て、私は久しぶりに腹の底から笑った。
笑い声が発されるたびに、心の中の闇が薄まっていくような気がした。
なんか堀北とかどうでもよくなってきちゃった。
そうだよ。堀北が私の過去を言ったところで、誰も信じないに決まってる。
それに、堀北のために私の貴重な時間を使うなんてもったいない。
私が、櫛田桔梗であるために使った方がいいに決まってる。
「ありがとう立花くん」
「なにが？」

♦♦♦

放課後。茶柱先生に文化祭の質問をしてから帰路につく。
今日は告白もしていないのに振られるという珍しい体験をした。

それにしても、なぜ櫛田は俺を振ったのだろうか。
もしかして、可愛いとほめ過ぎて、告白されたと勘違いさせてしまったのかもしれない。
そうなってくると、今後どう褒めればいいのかわからなくなってきたぞ。
（嫌な予感って櫛田に振られることだったのか）
女子に振られるというのは、思春期の男子にとって大きな出来事である。
今回は櫛田だからよかったけど、これが松下や軽井沢だったらと思うとぞっとする。
告白したことないのに、告白のトラウマをもってしまった。
「はぁ……」
俺はため息をつきながら一人でスーパーに向かう。
軽井沢、松下と下校しようとしたところ、軽井沢は佐藤とショッピング、松下は美容院に行くということで、久しぶりに一人で下校することになった。
一人ということは、それだけ襲われる可能性が高まる。
なので、俺は監視カメラの死角にならないよう、細心の注意を払って歩行している。
時折、奇異の目で見られるが、気にしない。
監視カメラの死角に入って坂柳やＤクラスのリーダーの餌食になるよりマシだ。
（Ｄクラスのリーダーも早く特定しないと）
Ｄクラスのリーダーはあまり表に出ないようでまったく情報が入ってこない。
ハニートラップを仕掛けてくる輩なので、女性経験が豊富なやつかもしれない。
もしかしたら、女子がリーダーの可能性も考えられる。
ＡクラスもＣクラスも女子がリーダーだからな。
（まったくとんでもない女子が多すぎるぜ）
Ｄクラスのリーダーに頭を悩ませていると、いつの間にかスーパー

に辿り着いた。
今日は精神的に疲れたので、半額弁当で夕食を済まそう。
「お、重たい……」
半額弁当とミネラルウォーターをカゴに入れてレジに並ぼうとしたところ、５キロのお米を重たそうに運んでいる女子の後姿が見えた。
今にでもお米を落としそうなほどふらついている。
素直にカートを使えばいいのに。
「あっ」
そう思っていると、バランスが崩れたのか、とうとう女子が両手からお米を離してしまった。
俺は咄嗟にカゴを床に置き、地面に落ちる前に、なんとかお米を両手でキャッチすることに成功した。
「ぎ、ギリギリセーフ……」
お米の銘柄を見たところ『秋田こまち』だった。
「あ、ありがとう……」
「いや」
顔をあげると、そこには秋田美人顔負けの美少女がいた。
「ごめんね。助かったよ」
「あっ」
俺はこの女を知っている。
話したことはないが、この女は有名人だ。
恐らく同学年で、この女を知らない生徒はいないだろう。
女の名は――――一之瀬帆波。
俺たちＢクラスの敵である、Ｃクラスのリーダー様だ。

17話

やはり俺のシックスセンスは間違っていなかった。
大きなトラブルは櫛田に振られることじゃない。
Cクラスのリーダーである一之瀬帆波に遭遇することだったんだ。
「私の名前は一之瀬帆波。君は立花くんだよね？」
「俺のこと知ってるのか？」
「当たり前だよ」
そりゃそうだ。クラスのリーダーなら、悪目立ちしている俺のことを知っているのは当たり前か。
「それより本当にありがとう」
「いや。……それより会計済ませないか？　他のお客さんの迷惑になるし」
「そうだね。あっ、私持つよ」
「いや、俺が運ぶから」
さっき落としそうになったばかりなのに何を言ってるんだこの女は。
それにここで一之瀬に持たせたら、周りの人からなんて言われるか。
「あ、ありがとう」
「代わりに俺のカゴを持ってくれ」
「うん」
会計を済ませた俺たちはサッカー台で購入した商品をエコバックに詰めている。
「立花くんもエコバッグ持参なんだね」
「節約になるからな」
外の世界と同じく、高度育成高校の敷地内もレジ袋は有料である。
ちなみに小は3円、大は5円だ。大した金額ではないが塵も積もれば山となるので、買い物をする際はエコバッグを持参している。
「偉いね」
「それは一之瀬もだろ」

「にゃはは。そうだった」
「……っ」
なんだその笑い方は。
『にゃはは』って笑う女を初めて見たぞ。
わざとしているのならあざとすぎるし、素でしているなら怖い。
俺の予想通りヤバイ女なのは間違いなさそうだ。
「立花くんはもう寮に帰るの？」
「そうだけど」
「よかったら一緒に帰らない？」
寮まで歩いて１０分ほどかかる。
例え相手が敵でも、か弱い女子に重たいお米を持たせて、先に帰るのは俺の良心が痛む。
一緒に帰ろうと言われたら、イエスと答えるしかないじゃないか。
「そうだな」
「やったー。一度立花くんとは、ゆっくり喋ってみたかったんだー」
「そ、そうなんだ……」
俺からＢクラスの情報を入手するつもりだな。
一之瀬ほどの美少女に聞かれたら、大抵の男はなんでも喋ってしまうだろう。
だが、美少女耐性がある俺にその手は通じない。
むしろＣクラスの情報を聞き出してやるぜ。
「それじゃ行くか」
「あ、お米……」
「俺が持つからいいよ」
「……本当にいいの？」
「一之瀬じゃ寮まで持てないだろ？」
「うっ」
俺に指摘されて、一之瀬は喉を詰まらせた。
「そ、それじゃ……お願いします」
「あいよ」
一之瀬は申し訳なさそうに頭を下げた。

俺は彼女と話す中で、ある結論に至った。
この状況は、一之瀬が意図的に作ったものだ。
恐らく俺が一人でスーパーに寄るのを見計らって、作戦を実行したのだろう。
レジ待ちする俺の前に並び、重たい荷物を持って、最終的に俺に持たせるつもりだったのだ。
そして、二人で帰る流れに持っていき、その帰り道で俺から情報を入手しようとした。
じゃなければ、こんな偶然はありえない。
「次からは量が少ないお米を買った方がいいぞ」
「だね。量が多いほうがお買い得と思って5キロ買っちゃったんだけど、失敗しちゃった」
気持ちはわからないでもない。
お米に限らず、量が多いほうがお買い得なので、ついつい大きいサイズを買ってしまうのだ。
「それより俺とゆっくり喋ってみたかったって？」
「うん」
「それは……俺が敵だからか？」
ストレートに質問してみた。
さて、一之瀬はどう答えるか……。
「それもあるよ。私たちを抜いたBクラスのリーダーがどんな人か知りたかったからね」
「……俺がリーダー？」
「違うの？」
個人的にリーダーは平田だと思っている。
しかし、勘違いしているなら、それに越したことはない。
「まあ、リーダーみたいなものかな」
「だよね？　もう、びっくりさせないでよー」
一之瀬が笑いながら俺の右肩を叩いた。
叩くたびに、一之瀬のとある部分が揺れるのが視界に入った。
まさかリーダー自らハニートラップを仕掛けてくるとは。

椎名と違って、自身の身体を駆使した肉弾戦が得意なようだ。
「一之瀬もリーダーなんだよな？」
「学級委員長だから、そういうことになるのかなー」
俺が必要以上に一之瀬を恐れている理由。
それは、彼女が学級委員長であることが原因だ。
学級委員長。
学校のクラスにおいてリーダー的な立場の役職に就いている生徒の事である。
本来、高度育成高校に学級委員という仕組みはない。
それなのに、一之瀬たちのクラスは学級委員長の役職を設けた。
坂柳やDクラスのリーダーと違って、役職を設けることにより、誰からも自分がクラスのトップだと分かるように仕向けたんだ。
さらに、何かトラブルなどが起きれば、クラスメイトたちは一之瀬を頼ることになる。
なぜなら彼女が学級委員長だから。
ちなみに、松下から聞いた話だと、学級委員を設けるよう進言したのは、一之瀬本人だったらしい。
自分で進言して、自分がクラスのトップにつく。
なんて恐ろしい女だ一之瀬帆波。
ここまでトップになることに、どん欲な女は初めてだ。
きっとAクラスになることに、誰よりも強い思いを持っているに違いない。
油断するなよ俺。
たとえ天使のような笑みで話しかけられても、豊満なあれを押し当てられても、我慢するんだ。
意外なことに、寮につくまで、一之瀬からBクラスのことについて質問されることはなかった。
恐らく時間をかけて俺を攻略するつもりだろう。
なにせ卒業まで三年近く残っているのだ。
もしかしたらBクラスに一番ダメージを与えられる機会を窺っているのかもしれない。

恐ろしや恐ろしや。
結局、俺たちは他愛のない話をしながら、帰路についた。
「今日はありがとう。本当に助かったよ」
俺は一之瀬の部屋の前までついていった。
もちろん下心ではなく、単純にお米を持っていたからだ。
「あのさっ」
「なんだ？」
「お礼に麦茶でも飲んでかない？」
「……っ」
どうやら俺は思い違いをしていたようだ。
一之瀬は一気に俺を落とすつもりだ。
出会った初日から男を部屋に呼び込むなんて。
ふしだらな女と思われようと、それでも男は自分の誘いを断らないと、一之瀬は確信しているのだろう。
予想以上にヤバイ女だ。
「帆波ちゃんに何をしてるんですか！」
どう断ろうか頭を働かせていると、悲鳴にも似た声が聞こえてきた。
「帆波ちゃん、大丈夫っ!?」
声の主であるボーイッシュな女子が、割り込むようにして二人の間に立ち、一之瀬に言葉をかける。
「ち、千尋ちゃん……？」
駆け付けた女子は千尋というらしい。
今の慌てようからするに、一之瀬が俺に襲われていると勘違いしたのだろう。
なんでだよ！
お米を持ちながら女子を襲う男がどこにいるってんだ。
もしかしたら、焦りすぎてお米が見えてないのかもしれない。
「あなた、帆波ちゃんに何の用ですか？」
まるで親の仇のように俺を睨みつける千尋ちゃん。
ただ、童顔だからか迫力はゼロである。

堀北の爪の垢でも煎じて飲むがいい。
「千尋ちゃん、誤解してるよ」
「え……？」
「彼は善意でお米を持ってくれただけだよ」
「……お米？」
一之瀬に指摘され、ゆっくり視線を下げる千尋ちゃん。
お米に気づいたのか、瞬時に頬が紅潮した。
「あっ……」
ようやく自分が早とちりしたと気づいたようだ。
「彼は立花恭平くん。偶然スーパーに一緒になって、お米を持ってきてくれたんだよ」
「そういうことだ」
「え、えっと……すみませんでしたっ！」
恐縮して、身を低くし、頭を下げる千尋ちゃん。
素直に謝れることはいいことだ。
「別にいいよ。一之瀬がピンチだと勘違いしたんだろ」
「は、はい……」
「友達思いのいい子じゃないか」
「でしょ？」
友達が褒められて嬉しいのか、一之瀬は満面の笑みで答えた。
「じゃあ俺は帰るよ」
「えっ……麦茶は？」
「また今度の機会にさせてもらう。じゃあな」
お米を千尋ちゃんに渡し、一之瀬から俺のエコバッグを受け取る。
「わかった。またね、立花くん」
「本当にすみませんでした」
二人に見送られながら俺はその場をあとにした。
エレベーターに乗り込むと、自然とため息が漏れた。
「危なかったぁ……」
まさかいきなり部屋に誘われるとは思わなかった。
Cクラスのリーダーは自ら身体を張るタイプのようだ。

あんな美少女に誘われたら、断れる男子はそうはいないだろう。
「とりあえず松下に報告だな」

♦♦♦

「一之瀬さんがハニートラップを仕掛けてきた？」
一之瀬と別れてすぐに俺は松下にメッセージを送った。
美容院で髪のメンテナンスを終えた松下は、そのまま俺の部屋に来てくれた。
俺はすぐに今日の出来事を漏れなく報告した。
「立花くんはスーパーで一之瀬さんと会ったのは偶然じゃないと思ってるんだね」
「ああ」
「確かに偶然としては出来すぎかもしれないけど」
そもそもあんな重たい商品を買うなら、クラスの男子に声をかけるはずだ。
あんなにふらついてて、寮まで持って帰れるわけがない。
「しかも、お部屋に上がるよう誘われたと？」
「そうだ」
「うーん、出会ったばかりの男子を部屋に誘うなんて……怪しいかも」
「だろ？」
椎名ひよりの時は懐疑的だった松下だが今回は信じてくれそうだ。
「千尋ちゃんが来なかったら危なかった」
「……危なかったって部屋に上がるつもりだったの？」
その千尋ちゃんより鋭い眼差しで俺を睨む松下。
思わずたじろいでしまうほどの圧迫感がある。
「な、ないぞ……」
「ふーん」
「本当にないから」
「……ま、立花くんなら期待より不安が勝って断るだろうね」
「そうだ」

「そんな威張られても……」
なぜか呆れ顔の松下。
「連絡先の交換はしなかったの？」
「しなかった。聞かれもしなかったぞ」
「そうなんだ。……もし、本当にハニートラップなら連絡先の交換はすると思うんだけどね」
「二人とも両手が塞がってたからじゃないか？」
「なら、玄関に荷物を置けばいいだけでしょ」
「な、なるほど……」
「……うん、私も一之瀬さんに接触してみようかな」
「大丈夫なのか？」
「大丈夫だよ。念のため櫛田さんから情報を仕入れてから接触するから」
「……櫛田は一之瀬と友達なのか？」
「うん。前にケヤキモールで遊んでるところ見たことあるし」
まさかCクラスのリーダーと友達だったとは。
櫛田のコミュニケーション能力恐るべし。
ただ、一之瀬と交流があるということは、櫛田からクラスの情報が洩れる可能性があるということだ。
やんわりと櫛田に警告しておこう。
「ちなみに一之瀬と接触してどうするんだ？」
「まずは友達になってみようかな」
「友達に……？」
「うん。それで仲良くなったら、徐々に攻めてみようと思う」
攻めるとは、クラスの情報を聞き出すという意味だろう。
「クラスのリーダーが答えてくれるとは思わないけど」
「だね。でも、一之瀬さんと交流を持つのは悪いことじゃないと思うんだよね」
「そうか？」
「うん。今後、もしかしたら違うクラスと協力する特別試験があるかもしれないし」

「……っ」
そうか。その可能性があったのか。
さすが松下だ。
俺より視野が広いし、先のことを考えている。
俺も彼女を見習って成長しなければ。
「一之瀬さんの話はこれくらいにしておくとして、私からも報告したいことがあるんだよね」
「なんだ？」
「平田くんなんだけど」
「平田がどうかしたのか？」
「Ａクラスの女子から告白されたみたい」
「Ａクラスからっ!?」
「うん」
Ａクラスといえば坂柳有栖。
中間テスト直後に接触されてから、俺と平田は細心の注意を払って、坂柳に遭遇しないようにしている。
「クラス間で争いがあるのに呑気なもんだよね」
「坂柳が仕掛けた可能性は？」
「うーん、その子は葛城くん派閥の女子みたいだから、違うんじゃないかな」
「そっか」
これは最近わかったことだが、Ａクラスは坂柳派と葛城派で対立しているらしい。
このままお互い潰しあって、自滅してくれたら嬉しいが、そんな都合がいい展開にはならないだろう。
個人的には葛城に頑張ってもらいたい。
なぜなら――坂柳は危険すぎるから。
「みんな学校に慣れてきたから、また平田くんに告白する子が増えるかもしれない」
「モテる男は辛いな」
「うん。告白する子が、みんな他のクラスならいいんだけど……」

「同じクラスだと困るのか？」
「男子にはわからないと思うけど、女子って色々あるの」
「平田は彼女作るつもりはないって言ってたから、彼女ができない限りは大丈夫じゃないの？」
「告白しただけでも、問題が起きる場合があるの」
「そ、そうなのか……？」
「そうなの。告白しない協定を結んでいるのに告白しちゃったり、告白して振られた子がいじめの対象になったり……ね」
「うわぁ」
やっぱり女子って怖い。
「うちのクラスも平田くんが好きな女子がちょくちょくいるから」
「平田も罪な男だな」
「本当だよ。それに、私は同じグループだから、告白に協力するようお願いされる可能性もあるし……」
「それは面倒だな」
「すごい面倒」
珍しくしかめっ面をする松下。
もしかしたら中学時代に経験したのかもしれない。
「あの……ちなみに俺は？」
「立花くんに関する相談はないよ」
「そうですか……」
おかしい。
松下からイケメンって評価されたのに、誰も告白してくれない。
平田は五人以上から告白されてるみたいだし、綾小路は佐藤から好意を寄せられてるというのに……。
「なんでショック受けてるの」
「受けてない」
もしかして一之瀬は俺が相手だからハニートラップを仕掛けてきたのでは。
平田、綾小路より俺の方がチョロそうと思ったのかもしれない。
「はぁ……」

男としての自信を少しだけ失い、本日三回目のため息が漏れた。

18話

松下から一之瀬と連絡先の交換をして一緒に出掛ける約束を取り付けたと報告があったのは、あれから三日後のことだった。

一之瀬は平和主義者のようで、クラス同士の競争があったとしても、試験以外は仲良くしたいスタンスらしい。

しかし、それはあくまで表向きの顔だ。

一之瀬は出会った初日から男を部屋に連れ込もうとする肉食系女子である。

恐らく目的のためなら、自分の身体さえも利用する倫理的にヤバイ女だ。

外出の面子になぜか俺も組み込まれているので、一之瀬をじっくり観察させてもらうことにしよう。

そんな一之瀬対策に頭を悩ませている俺とは対照的に佐藤の頭はお花畑状態が続いていた。

好意を寄せる綾小路との仲が順調に深まっているようで、にやけた表情で幸せオーラを教室中に放っている。

綾小路もまんざらではなさそうなので、二人が恋人関係になるのも時間の問題かもしれない。

幸村の勉強会も順調のようだ。参加している生徒の学力は予想以上に上がっていると報告があった。

さらにクラスで一番人見知りとされる佐倉と会話ができるようになったらしい。

コミュ力お化けの櫛田でさえも挨拶を交わす関係で留まっているので、これは快挙といっても過言ではないだろう。

幸村、佐倉、みーちゃんが三角関係にならないか、軽井沢が嬉しそうな表情で心配していたが大きなお世話だ。

それより、堀北がやたら幸村に突っかかる方が心配だ。

「ここに来るのも久しぶりだな」

金曜の放課後、俺は軽井沢と共にケヤキモールにある書店に足を運んでいた。

目的はもちろん本を購入するためである。本といっても、漫画や小説ではない。俺が購入するのは日商簿記のテキストだ。

実家の旅館を継ぐことが決まっているので、両親から大学卒業までに2級を取得するよう命じられているのである。

この学校に入学するまでは、大学に進学してから簿記の勉強をする予定だったが、茶柱先生から資格を取得するとクラスポイント、プライベートポイントに影響があると情報を入手したので、予定より早めに簿記の勉強を始めることにしたのだ。

ちなみに資格については種類は違うが、みーちゃん、幸村、堀北の三人も在学中の取得を目指している。

「とりあえずは三級だな」

簿記のテキストは種類が少なかったので、お目当てのものをすぐに見つけることができた。

来店してから五分も経っていないし、軽井沢もファッション雑誌を立ち読みしているので、しばらく小説コーナーで新刊をチェックすることにした。

毎月１０万ポイントが必ず支給されれば、気軽に新刊を購入できるのだが、この学校ではそうはいかない。

現在は約7万ポイント支給されているが、イベントによって大きく下がる可能性は十分に考えられる。

なので、本に関しては図書室や漫画喫茶ですませているのが実情だ。

「立花くんじゃないですか」

刹那。もうすぐ6月だというのに悪寒が走った。

その声を聞くのは久しぶりだ。

この学校で俺に恐怖を与えた初めての女。

「し、椎名……」

「お久しぶりですね」

Ｄクラスのハニートラップ要員である椎名ひよりが聖母のような笑みを浮かべながら俺の前に現れた。

（軽井沢早くこっちに来てくれ！）

目でコンタクトを取ろうしたが、いつの間にか軽井沢はファッション雑誌のコーナーからいなくなっていた。
あたりをきょろきょろ見回すが、まったく見当たらない。
もしかしたらお手洗いにいったのかもしれない。
（くそ！　お手洗いに行くなら声をかけるよう言っておくんだった！）
またしても俺は油断をしてしまったようだ。
茶柱先生に注意されてから一ヶ月も経っていないというのに……。
「立花くんも新刊を買いに来たのですか？」
声を弾ませながら、一気に俺との距離を縮める椎名。
文学美少女の攻撃の威力は抜群だ。
池や山内だったら、今の攻撃だけでノックダウンしていただろう。
「いや、新刊をチェックしに来たんだ」
椎名に俺が簿記検定の勉強をすることを知られるわけにはいかない。
資格取得は一部のクラスメイトにしか明かしていない機密事項なのだ。
もしDクラスにばれたら、作戦が一つ無駄になってしまう。
俺は咄嗟にテキストの近くの棚に置いた。
「買われないんですか？」
「ああ。いつポイントが減らされるか心配だから、新刊も図書室から借りているんだ」
「そうなんですね。私も基本的に図書室から借りていますが、お気に入りの作者の新刊だけは購入しているんです」
「そ、そうなのか」
「はいっ」
のんびりした雰囲気と違い、今日はいつになく饒舌だ。
椎名は趣味の話題になると、途端に饒舌になるタイプなのだろう。
「立花くんのお気に入りの作者は誰ですか？」
目をキラキラさせながら椎名が訊ねる。
「えっと……」

いずれこうなることはわかっていた。
同じ敷地内で暮らしているのだ。
三年間も逃げ続けることは不可能に近い。
だから、俺は椎名にこのような質問をされた場合の対処法も考えていた。
「貴志祐〇だな」
「貴志祐〇さんですか」
「ああ。ほかには――――」
俺は複数の小説家をあげた。
実は俺があげた小説家には共通点がある。
それは――――猟奇的な作品が多いことだ。
「申し訳ございません。名前は存じ上げておりますが、作品は読んだことない人ばかりです」
「だろうな。けっこうグロテスクな作品が多いからな」
「立花くんは、そのような作風の小説が好きなんですか？」
「ああ」
嘘である。
グロイのは苦手だし、人が死ぬ描写がある小説も好みではない。
そんな俺が嘘をついた理由は、椎名を遠ざけるためである。
椎名はミステリーや純文学がお好きなようなので、俺があげた小説家の本は好みではないことが予想出来ていた。
「人がたくさん死んだり、官能描写が多いのがたまらない」
いくら文学少女とはいえ、俺の発言には引いただろう。
こうやって椎名を不快にさせることにより、俺を標的から外させる作戦だ。
「……なるほど」
椎名の眉間に皺が生じた。
効果は抜群のようだ。
このまま畳みかけるぞ。
「特に悪の〇典で主人公が、教え子たちを容赦なく殺していくのは読んでいて気持ちよかったぞ」

本当は気持ちいいどころか、背筋が凍ったけど。
もし、あの主人公が自分の学校の先生だったらと思うと、恐怖で不登校になってしまいそうだ。
「立花くん……」
「ん？」
このまま俺の下から立ち去るんだ。
そして、Ｄクラスのリーダーに俺のことを報告しろ。
立花恭平はヤバイ小説ばかり読んでいるサイコ野郎だとな。
「私も読んでみたいです！」
「……え？」
「立花くんが熱く語っているのを見て、私も読みたくなってきました」
「あ、あれ……？　椎名ってミステリーが好きなんじゃ……」
「はい。ただ、ミステリー小説も読みつくしてしまいまして、違うジャンルの作品を読もうかと思っていたところなんです」
なんてこった。
悪手を指してしまったようだ。
「あの……よかったら連絡先を交換しませんか？」
仕方ない。
ここでフェーズ２発動だ。
「そうだな。俺も椎名と連絡先を交換したいのはやまやまなんだが……」
「なにが不都合でも？」
「うちのクラスは問題ないんだ。ただ、椎名のクラスのリーダーのことを考えるとな……」
「龍園くんのことですか？」
Ｄクラスのリーダーって龍園っていうんだ。
思わず情報を入手してしまったよ。
「ああ。龍園は相当やばいやつだと聞いたことがある」
「そうかもしれません」
「もし、椎名が俺と交流を持っていることが龍園に知られたら、酷い目にあうんじゃないか？」

「私のこと心配してくれるんですか？」
「まあな」
もちろん嘘である。
ストレートに断るとハニートラップ要員の椎名のプライドを傷つけてしまう。
プライドを傷つけられた女は何をしでかすかわからない。
なので、椎名のプライドを傷つけず、なおかつ好感が持てる理由で拒絶させてもらうつもりだ。
「もしかして、図書室で私を避けていたのも……」
「ばれてしまったか」
避けられているとは気づいていたのか。
「そんなに、私のことを想ってくれていたのですね……」
「同じ読書好きとして、傷ついてほしくなかっただけだ」
これで完璧だ。
椎名としても、龍園を危険人物だと認識させたままにしておきたいに違いない。
ここで強硬的に俺と連絡先を交換してしまうと、椎名が龍園に恐怖を抱いていないことになる。
つまり、椎名は俺の気遣いを受け入れるしかない。
「立花くん」
「ああ」
「お気遣いありがとうございます」
「気にするな」
「ですが、大丈夫です」
「……ん？」
「龍園くんは確かに独裁者ではありますが、交友関係までは言ってこないですので」
嘘だろ。
龍園なにやってんだよ。
他のクラスの生徒と関わらないように命令しておけよ。
「なので連絡先を交換しましょう」

「あ、ああ……」
俺の作戦はすべて裏目に出てしまった。
俺だけじゃない。
松下や軽井沢と一緒に考えた作戦だったのに、椎名はいとも簡単にぶち壊しやがった。
「ふふふ。これで立花くんと本について語り合えます」
可愛らしい笑みを浮かべた椎名だったが、俺には獲物を仕留めた猛獣にしか見えなかった。
軽井沢が本屋に戻ってきたのは椎名と連絡先を交換した直後だった。

♦♦♦

「立花くん、落ち込みすぎでしょ」
買い物を終えた俺たちはスーパーに寄ってから帰路についた。
今日も軽井沢が夕食を作ってくれるようで、俺はベッドで横になり、スマホを眺めていた。
「連絡先を交換しただけでしょ」
「つまり龍園にも俺の情報が渡ったということだ」
「Dクラスのリーダーだっけ？」
「ああ。椎名から聞いた」
「……本当に椎名さんってハニートラップなのかな？」
「なんでそう思った？」
「いや、あたしたちはDクラスのリーダーのこと知らなかったわけじゃん？」
「そうだな」
Dクラスは B クラス以上に閉鎖的なので、リーダーを含めて情報が少ないのである。
「なのに自分からリーダーの名前を言うなんておかしくない？」
「うーん」
「もちろん立花くんを信用させる作戦なのかもしれないけど」

「……軽井沢も少しは考えられるようになったんだな」
「あたしをなんだと思ってるのよ！」
「俺を一人にした罪深き美少女」
「び、美少女って……」
本当に初心だなこの子は。
でも調理中だからからかわない方がいいかも。
「と、とにかくっ！　もう連絡先を交換しちゃったんだし、ポジティブに考えるしかないじゃん」
「ポジティブとは？」
「椎名さんからＤクラスの情報を得るチャンスだと思えばいいってこと」
「チャンス……」
「そう。もし椎名さんがハニートラップなら、立花くんの信用を得ようと、Ｄクラスの情報をもっと流してくれるかもしれないでしょ？」
「……その可能性は十分にあるな」
作戦が裏目に出て落ち込んでしまっていたが、確かにこれはチャンスだ。
俺が椎名のハニートラップに気をつければいいだけだ。
もし呼び出されても、監視カメラが多数ある公共の場を指定すればいい。
最悪、茶柱先生についてきてもらえば問題ないはずだ。
「しっかりしてよね。……あ、あたしのこと、守ってくれるんでしょ……？」
右手の包丁を俺に向ける軽井沢。
その顔は先ほどより赤く染まっている。
「……そうだな。心配かけて悪かった」
「べ、別に……」
「お礼に今日はＤＶＤ二時間見ていいぞ」
「なんでお礼が視聴時間なのよ……」
そう文句を言いつつも、軽井沢はちゃっかり二時間ライブＤＶＤを観てから部屋に帰っていった。

ちなみに、この日の夕食はとんかつだった。
理由を訪ねたところ、落ち込んでた俺に喝を入れたかったらしい。
手料理でギャグをぶち込んでくるとは、軽井沢も変わった女である。

１９話

椎名ひよりは積極的な女だった。

学校では場所を問わずに話しかけてくるし、ＬＩＮＥも毎日送られてくる。

話題の大半は小説なので、読書好きというのは本当のようだ。

さらに椎名は速読の達人で、俺がお勧めした本は必ず翌日までに読み終わっている。

ちなみに、椎名からもお勧めの小説を紹介されるが、海外小説ばかりでなかなかページが進まない。

「今日は５０ページくらい読むか」

放課後はクラスメイトの相談に乗ったり、軽井沢に勉強を教えたりするのであまり時間がない。

そのため、最近は休み時間に読書をすることが多くなった。

「アガサ・クリスティか」

綾小路が珍しく興味深そうに話しかけてきた。

「立花はミステリー小説が好きなのか？」

「好きってほどじゃないけど勧められて」

「そうか」

「綾小路も読書家だよな」

「本は好きだな」

椎名に綾小路を紹介して、俺の負担を減らすか考えたが、佐藤に怒られそうなのでやめておこう。

「海外小説も読むのか」

「そうだな。もちろん翻訳してるやつだが」

「ふーん。……佐藤と話合うのか？」

「趣味は合わないな」

「だよな」

「ただ、佐藤は俺の知らないことをたくさん教えてくれる」

「だから一緒にいて楽しいってか」

「まぁな」

「なるほど」
初めて綾小路の口から聞いたが、本当に佐藤は上手くやっているようだ。
これならクラスで一番目のカップルになるのも近そうだ。
「立花、知っているか？」
「なにを？」
「俺たちの世代はZ世代というらしい」
「……なにそれ？」
流行の音楽は軽井沢から教えてもらっているが、Z世代のことは教えてもらってない。
俺が綾小路からレクチャーを受けていると、なぜか博士が話に割り込んできた。
どうやらZと聞いて、ガンダムの話と勘違いしたようだ。
なぜか、そのまま博士から流行のアニメを教えてもらう流れになり、近々三人でレンタルショップに行くことになってしまった。

＊＊＊

土曜の正午、俺は松下、平田と一緒にいつものファミレスに来ていた。
目的はもちろん一之瀬率いるCクラスとの交流のためである。
「今日は来てくれてありがとう」
「こちらこそ」
主催者である一之瀬と松下が笑顔で握手する。
「改めて自己紹介するね。一之瀬帆波です。学級委員長してます」
「神崎隆二だ。よろしく頼む」
「白波千尋です。よろしくお願いします」
Cクラスにご丁寧にあいさつされたので俺たちも自己紹介を交えて挨拶をした。
席順は右から俺、松下、平田の順で、向かい側は右から白波、一之瀬、神崎の順だ。

「えっと、神崎君と白波さんも学級委員なの？」
「神崎くんは副委員長、千尋ちゃんは書記だよ～」
松下の問いに一之瀬が答える。
つまり神崎と白波が側近というわけだ。
神崎は見た目からしてできる男って感じがするし、白波は忠犬のような雰囲気を醸し出している。
お互いに挨拶を済ませた後は、雑談を交えてゆっくり食事を済ませた。
驚いたのは、櫛田曰く団結力が売りのCクラスだが、最初はまとまりが悪く、好き勝手する生徒が多かったようだ。
それを一之瀬が上手くまとめて、現在のクラスを作り上げたらしい。
千尋ちゃんこと白波が熱弁を振るっていた。
ちなみに一之瀬は照れていたようで、終始顔を赤くしていた。
俺たちBクラスは手土産として、質問リストのファイルデータをプレゼントした。
質問リストとは、俺が今まで茶柱先生に質問した内容をリスト化したものである。
これは松下からの指示だ。
最初に大きな餌を与えて、より信頼させる作戦らしい。
一之瀬は善人なので、必ず恩返しをしてくれると確信しているようだった。
そんな松下の予想はすぐに当たることになる。
「あのね、松下さんたちに伝えておきたいことがあるんだ」
一之瀬から聞いた話は衝撃的だった。
なんとCクラスが、Dクラスからたびたび嫌がらせを受けているとのことだった。
また悪質なのが校則に違反しない程度のものらしく、学校や生徒会に訴えるのも難しい状況のようだ。
「嫌がらせが始まったのは5月に入ってからなの」
つまり一ヶ月近く被害を受けているわけだ。

これはなかなかのストレスになっているだろう。
「厄介なのは、Dクラスのリーダーが誰なのかわからないことなんだよね」
「え？　Dクラスのリーダーならわかるけど」
「うぇっ!?」
俺がそう言うと、一之瀬が奇声をあげた。
「だれだれっ!?」
一之瀬はよほど興奮しているのが、テーブルに身を乗り出して顔を近づけてくる。
顔だけならいい。問題はその大きな二つの果実だ。ブレザーのボタンがはち切れそうな勢いである。
「一之瀬さん、落ち着いて」
ここで相棒の待ったが入った。
さすが松下だ。
危うく一之瀬のハニートラップに引っかかるところだったぜ。
「いたっ」
松下にウインクをしたら、なぜか足を踏まれてしまった。
そんなに気持ち悪かっただろうか。
帰ったら鏡見てウインクの練習をしなければ。
「あ、ごめん……」
「ううん。それより立花くん教えてあげてよ」
「あ、ああ……。Dクラスのリーダーは龍園だ」
「龍園……くん」
「情報元は椎名ひよりだ」
「椎名さんって読書好きな？」
「そうだ」
一之瀬も椎名のことを知っていたのか。
恐らくCクラスの誰かが、椎名のハニートラップに引っかかったのだろう。
いったい何人の男を手懐けたんだあの売女は……。
「龍園くんがリーダー……」

先ほどから一之瀬がぶつぶつ独り言を言っている。
恐らく頭の中で復讐の計画を立てているのだろう。
リーダーがわかった途端に復讐を思索するとは恐ろしい女だ。
いつ寝首を掻かれるか不安でしょうがないぜ。
「……よしっ。立花くん、教えてくれてありがとう！」
「お、おう……」
俺の右手を両手で握りしめ一之瀬がお礼の言葉を述べた。
敵とはいえ、美少女に感謝されるのは悪くない。
そう思った瞬間、またしても松下に足を踏まれてしまった。

＊＊＊

一之瀬たちとの食事会から二週間が過ぎた。
Ｄクラスの悪行について注意喚起されたＢクラスだったが、龍園からアクションが起こることはなかった。
むしろ龍園より坂柳が厄介だった。
廊下を歩くと二回に一回は見かけるので、遠回りしたり、体格がいい生徒の後ろに隠れたりなど、Ａクラスの女王にばれないよう移動するのに苦労した。
そんな化物の対応に気を取られながらも、俺は夏休みに行われるであろうサバイバル合宿の情報収集に勤しんでいる。
まず茶柱先生に質問したが、答えはいつも通り肯定も否定もされなかった。
試しに他の先生に訊こうとしたところ、血相を変えて止められてしまった。
どうやら俺は教師陣にブラックリスト扱いされているようだ。
生徒を差別するなんてひどい教師たちだ。
教師から情報を得るのを諦めた俺は漢字違いだが同姓の橘先輩に訊くことにした。
「というわけで、松下に付いてきてほしいんだけど」
「ごめん。今日は一之瀬さんと約束があるんだよね」

松下は一之瀬と順調に友情を育んでいるようで、週に二回は遊んでいるらしい。
「……そっか」
「軽井沢さん連れていけば？」
「いや、軽井沢を連れて行くのは失礼にあたるだろ」
「なんであたしを連れて行くと失礼になるのよっ!?」
俺の隣で話を聞いていた軽井沢が頬を膨らませ抗議してきた。
「だって生徒会にギャルはおかしいだろ？」
「別におかしくないでしょ！　ていうかあたしそこまでギャルじゃないし」
「この学校ではギャルな方だろ」
「そ、そうかもしれないけど……」
うちのクラスのギャル枠は軽井沢と佐藤だが、他のクラスにも二人よりギャルレベルが高い女子はいない。
二年生にもギャルがいるようだが、残念だからお見かけしたことがない。
「大丈夫だと思うよ。うちの学校は頭髪や服装には緩いみたいだし」
「確かに」
赤髪だったり、金髪の生徒がちらほらいるが、クラスポイントに影響がないのか、黒染めしている奴はいないようだった。
「仕方ない。軽井沢で我慢しよう」
「あたしの扱いが酷すぎるんだけどっ!?」
放課後、ブーブー文句を垂れる軽井沢を連れて、俺は入学してから初めて生徒会室に向かった。
生徒会室は一階に設置されており、一年でも訪ねやすい場所にあるのは有難かった。
「どうぞ」
ノックをすると女子の声を聞こえてきた。
恐らく橘先輩だろう。
「失礼します」
「し、失礼しますっ」

緊張気味の軽井沢に笑いそうになりながら、俺はゆっくりドアを開けた。
「立花くんじゃないですか」
やはり声の主は橘先輩だった。
橘先輩は雰囲気が柔らかいので、質問がしやすい先輩と認識している俺は安堵した。
「お久しぶりです橘先輩」
「はい。お隣は？」
「クラスメイトの軽井沢です」
「か、軽井沢恵ですっ」
「軽井沢さんですね。とにかく座ってください」
橘先輩に促されソファーにする俺と軽井沢。
「えっと、橘先輩おひとりですか？」
「もうすぐ堀北会長がいらっしゃいますよ」
生徒会長はクラスメイトである堀北の兄貴だ。
堀北会長と会うのは、あの一件以来なので若干気まずい感じがする。
「他の方は？」
「今日は二人だけですね」
「そうなんですね」
国立学校の生徒会なので、毎日参加するものとばかり思っていたが、服装と同様で思ったより緩いようだ。
「お茶でも飲んで待ちましょう」
「ありがとうございます」
それから五分ほど経ったころ、堀北会長が生徒会室にやって来た。
相変わらずのクールフェイスだ。
恐らく堀北も兄貴の真似をしているのだろう。
「珍しい客がいるな」
「お邪魔してます」
なぜか微笑む堀北会長。
隣りに可愛いギャルがいるから喜んでいるのだろうか。

「私たちに訊きたいことがあるみたいですよ」
「ほう。言ってみろ」
会長に促され、俺は姿勢を正して訊ねる。
「はい。茶柱先生から夏休みにバカンスに連れて行くと言われたのですが、実はサバイバル合宿だったりしますか？」
「ぶほぉっ！」
刹那。橘先輩が豪快に茶を噴いた。
「橘先輩、大丈夫ですかっ!?」
「だ、大丈夫でず……。ごほっ、ごほっ……」
勢いよく飲み過ぎて変なところにお茶が入ってしまったのだろうか。
「えっと、もう少しゆっくり飲んだ方がいいですよ」
「いえ、そういうことではなくてですね……」
「……はい？」
「立花」
「「はい」」
「一年の立花だ」
こういう時、名字が同じだと面倒である。
「なんでしょう」
「なぜサバイバル合宿だと思った？」
「うっ」
なんてオーラだ。
嘘は絶対に許さない。
堀北会長から、そんな重圧が放たれているように感じてしまう。
まるで旦那に浮気を問い詰める奥さんのようだ。知らんけど。
「えっと、まずうちの学校がただのバカンス旅行に連れていくとは思わないんですよね」
一学期なんて定期テストを受けただけだろうに、そんなご褒美をこの学校が与えてくれるわけがない。
「あと気になったのは、水泳の授業でガチゴリラ先生が、かなづちの生徒も泳げるようにすると仰っていたので、それも関係あるかなと思い

まして」
「教師をあだ名で呼ぶな。ほかには？」
「担任以外の先生に同じ質問をしようとしたら、茶柱先生が血相を変えて止めてきたのも怪しいと思いました」
「そ、そうか……」
「茶柱先生……」
なぜか憐れみの目を向ける生徒会の二人。
「それで教えてくれるんですかー？」
ようやく緊張が解けたのか、軽井沢が回答を促した。
「悪いが俺たちもその質問には答えられない」
「……そうですか」
「すみません」
「いえ、橘先輩が謝る必要ないですよ」
生徒会からも答えを得ることができないのはわかっていた。
こうなったらサバイバル合宿があると予想して、クラスのみんなに準備をしてもらうしかない。
もし無駄に終わったら、うちの旅館の優待予約で許してもらおう。
「それじゃ帰るか」
「だねー」
「待て立花」
「はい？」
ソファから立ち上がろうとしたところ、堀北会長に止められた。
「鈴音は元気にしているか？」
「堀北ですか？」
「ああ」
「……そうですね。口は悪いですけど、クラスメイトに勉強を教えたり、自分よりテストの成績が良かった男子に突っかかったり、元気にしてますよ」
「鈴音が勉強を教えているのか？」
そんなに意外だったのか。
堀北会長が珍しくきょとんとしている。

「中間テストから教えてますよ」
「おかげで佐藤さんたちの学力が上がったり、煽り耐性がついたり、堀北さん様様だよねー」
「そうだな」
「あ、煽り耐性……」
「まあ、マスコットキャラ的な立ち位置ですが、上手くやってると思いますよ」
「鈴音がマスコット……」
「それじゃ失礼しますね。いろいろとありがとうございました」
橘先輩は「また来てくださいねー」と手を振りながら見送ってくれたが、堀北会長は呆然としたままだった。
生徒会室を後にした俺と軽井沢はまっすぐ寮に向かっていた。
「橘先輩がわかりやすくて助かったじゃん」
「なにが？」
「サバイバル合宿のこと」
「……ん？」
「だから、橘先輩がお茶を噴いてたでしょ？」
「ああ。あんなに喉が渇いていたなんてな」
「違うでしょ！　あれは立花くんの質問に動揺してむせたんでしょうが！」
「そ、そうだったのか……？」
「立花くんってやっぱり馬鹿なのね」
「うるさい」
今日の勉強は軽井沢が苦手な数学から教えてやろう。
そして、答えを間違えたら思いっきり詰ってやる。
そんな小さい復讐心を滾らせ、俺は帰路についた。

２０話

俺たちＢクラスは夏休みのバカンス旅行がサバイバル合宿であることを前提に動くことになった。

それも橘先輩がわかりやすい反応をしてくれたおかげだ。

俺はお礼代わりに目安箱に橘先輩がいかに素晴らしい書記であるかをアピールした文書を匿名で投函した。

俺と軽井沢が生徒会室に行った翌日、茶柱先生から許可を得て、ＬＨＲでサバイバル合宿についての対応策を話し合うことになったのだが、経験者はほぼゼロだった。池がボーイスカウトに近いものに参加したぐらいだったので、まず俺たちはサバイバルについて学ぶことにした。

放課後にサバイバルに関する書籍を探すため図書室に足を運んだところ、案の定椎名に捕まってしまった。

もちろん彼女に目当ての本を明かすわけにはいかなかったので、推理小説を探していると嘘をついたところ、一時間ほどお勧めの本を熱弁されてしまった。

ボーイスカウトもどき経験者である池を頼りたいところだが、勉強に集中させたいので、彼にはテクニカルディレクターの役割を与えた。

具体的にどんな役割なのか説明を求められたが、俺にもよくわからないので、気にせず櫛田と付き合うために勉強を頑張るよう発破をかけておいた。

Ｃクラスのリーダーである一之瀬とは定期的に連絡を取り合っている。

彼女の話によると、Ｄクラスからの嫌がらせは徐々に減っているようだ。

一之瀬は安心していたが、俺は不安が増してきた。

Ｃクラスへの嫌がらせが減ってきたということは、標的を他のクラスに変えた可能性があるからだ。

今のところクラスメイトから被害報告は受けていないが、脅されて

言えない状況にされているのかもしれない。
さらに龍園について、クラスメイトの三宅から情報を仕入れることができた。
三宅は龍園と同じ地区の中学校に通っていたようで、Dクラスの暴君について詳しく知ることができた。
龍園は他校に殴り込みをかけ、他校のボスを暴力で屈服させ、中二の夏にはその地区の一番の不良になったようだ。
ちなみに暴走族には参加していなかったらしい。
もしかしたらバイクの運転が苦手なのかもしれない、と三宅が苦笑いしながら言っていた。
俺は龍園のさらなる情報を得るため、寮に戻ってすぐにネットの海に飛び込んだ。
すると、面白いように暴力の化身の情報が次々と出てきた。
・自分に逆らった相手には男女関係なく容赦しない
・暴力で屈服させた相手の爪を無理やり剥がすのが好き
・五人ほど再起不能にしている
・親がヤクザ
・レイプじゃないと興奮しないらしい
・バスケで挫折して不良になってしまった
これらの情報の信ぴょう性がどれほどかはわからない。
ただ、火の無い所に煙は立たぬ、という。
うわさが立つからには、なんらかの根拠があるはずだということだ。
龍園翔。
名字は怖いが、可愛らしい名前をしている。
幼い頃は、かけるっちと友達から呼ばれていたかもしれない。
しかし、今の龍園は、かけるっちというあだ名が似合わない男になってしまった。
あだ名どころか、下の名前で呼んでくれる人は家族以外にいないだろう。
それほどまでに、龍園は恐ろしい存在だ。

「もうすぐ夏だっていうのに寒気がしてきたぜ」
俺は冷房を19度から20度に上げた。

＊＊＊

「軽井沢と松下はDクラスから嫌がらせ受けてないか？」
翌日の昼休み、俺は弁当を食べながら二人に訊ねた。
一之瀬が俺をBクラスのリーダーと勘違いをしていたので、龍園も同じく勘違いをしている可能性がある。
つまり、俺の身近にいる女子が標的にされる可能性が高くなるというわけだ。
「あたしは大丈夫だけど」
「私も」
「ほんとに？　脅されたりしてないか？」
松下は大丈夫だろうが、軽井沢はもともといじめられっ子だ。
高校では強気な女子を演じているが、不良に定評があるDクラスの生徒から本質を見抜かれるかもしれない。
「大丈夫だってば」
「私もないから安心して」
「……そうか」
二人の顔を見たが、嘘はついていないようだ。
他のクラスメイトにも確認してみたが、今日も被害はゼロのようだ。
「私たちより部活してる子の方が心配じゃない？」
「帰宅部よりDクラスと接触する機会が多いからだな」
「そう」
松下の言ってることはごもっともだ。
櫛田情報によると、不良のくせにDクラスの生徒も部活動に参加している生徒がそれなりにいるらしい。
うちのクラスだと平田、須藤、小野寺の三人がDクラスの生徒がいる部活に所属している。

「その中だと一番危険なのは須藤くんかな」
「あたしもそう思う」
「……だな」
須藤は短気だ。
以前よりだいぶマシになったが、それでも彼がクラスで一番の短気なのは変わらない。
「綾小路く～ん、帰りにゲーセン行かない？」
「いいぞ」
「やった。プリ撮ろうよ」
「プリ？　鰤じゃなくてか？」
「なにそれ。綾小路くんってギャグセンスも高いんだねぇ」
「そうか。オレはギャグセンスが高いのか」
「うんっ」
俺たちが真面目に話をしているすぐ後ろで、佐藤は語尾にハートマークがつきそうな甘ったるい口調で綾小路に話しかけている。
「佐藤、レンタルショップも寄りたいんだが」
「もちろんいいよ。なに借りるの？」
「博士に勧められたソロキャンプを題材にしたアニメだ」
「綾小路くんってアニメも見るの？」
「いや、今回が初めてだ」
「そうなんだ。私も一緒に見てもいい？」
「問題ない」
「やったぁ」
信じられるだろうか。
この二人、これで付き合っていないのである。
同じことを思っているのか、目の前で可愛らしい弁当を食べている軽井沢と松下も苦笑いだ。
食堂で昼飯を食べている平田と篠原も恐らく苦笑いをしていることだろう。

＊＊＊

Dクラスからの嫌がらせを受けることなく二週間が過ぎた。
もうすぐ七月に入るころ、高度育成高校に革命が起きた。
ポロシャツの導入である。
もともと高度育成高校に衣替えは存在していなかった。理由は簡単、どこも冷暖房が完備されているからだ。
しかし、堀北会長はそれに疑問を感じていたらしい。
国民の税金で運営される国立の学校が、電力を無駄に消費していいのか。
もし、節電が今まで以上に必要になった場合、高度育成高校は批判の的になってしまうのではないだろうか。
それを危惧した堀北会長は、会長に就任してすぐにポロシャツの導入に動き出した。
保守派の学校側とひと悶着あったようだが、とうとう今夏にポロシャツの導入に成功することとなったのだ。
ポロシャツの導入に生徒たちは歓喜した。
確かに、どこも冷暖房が完備されているが、それはあくまで校舎や施設に限った話である。
通学するにも、施設に遊びに行くにも、俺たちは外を出歩かなくてはならない。
炎天下の中、ブレザーを着用したまま移動するのは過酷だ。
それなら脱げばすむ話と言われるだろうが、真夏にブレザーを持ちながら移動するのもどうかと思うだろう。
もちろん暑いのには変わらないが、ポロシャツのおかげで幾分マシになるはずだ。
さらに冷房の温度も今までより高めに設定することで大幅な節電に繋がる。
ポロシャツの導入の案内に、以下の文章が記載されていた。
『一人一人が無駄な使用をなくすことで、資源を有効に利用することができます。　そして、化石燃料の使用を抑えることは、化石燃料を燃やすことで発生し地球温暖化の原因になっている温室効果ガスを

減らすことにも貢献します』

生徒の負担軽減だけでなく、地球温暖化防止にも役立つとは、堀北会長は素晴らしい生徒会長だ。

恐らく来月の堀北会長の支持率は９０％以上になるだろう。

なお、感銘を受けた俺はポロシャツを五着も購入してしまった。

ちなみに堀北は十着も購入していた。

「さすが兄さんだわ」

ポロシャツの導入後、そんな堀北の独り言が増えたと佐藤と篠原から聞くのはもう少し先の話である。

「これ通気性抜群じゃない？」

俺と同じく紺色のポロシャツを着用した軽井沢が言った。

「確かに。それに動きやすい」

「それね」

「紺色というのもいいな。なんか高級感がある」

「確かに」

紺色なら透けブラ防止にもなるからな。

軽井沢は基本的にブレザーを着用しない。そのため、六月になってから透けブラすることが多くなっていたので、これで一安心だ。

「それより勉強再開するぞ」

「はーい」

軽井沢は俺の部屋で期末テストに向けた勉強中である。

休憩を終えてテスト勉強を再開しようとした直後、ＬＩＮＥの通知音が鳴り響いた。

「タイミング悪いな」

「誰から？」

「……悪い軽井沢。急用ができた」

「え……？」

「ちょっくら学校に行ってくる」

「どうしたのよ？」

「帰ったら教える」

「わかった。いってら」

「おう」

＊＊＊

俺は家庭科室や視聴覚室などがある特別棟に足を運んだ。
目的に到着すると、すでにメッセージの送り主を含めた大勢のクラスメイト（男子のみ）がいた。
合流した俺たちはそのまま特別棟の廊下を突き進む。
すると、見慣れない男子が三人いるのがわかった。
その男子たちは、俺たちの登場に激しく動揺しているようだ。
「な、なんだてめぇらっ!?」
三人の中で一番体格がいい男子が吠える。
「おい須藤！　一人で来いって言っただろうが！」
眼鏡をかけた男子が須藤に言い放った。
「須藤、こいつらが？」
「ああ。Ｄクラスでバスケ部の小宮と近藤だ。もう一人は知らねえ」
そう。先ほどのメッセージの送り主は須藤だった。
部活終わりに小宮と近藤に呼び出しを受けた須藤は、すぐにＢクラス男子限定のトークルームに報告したのだ。
俺たちＢクラスにはいくつかの決めごとを設けている。
その一つが、他クラスの生徒から呼び出しを受けたらすぐにクラスメイトに知らせること。
須藤は決めごとに従い、俺たちに報告をしたというわけだ。
「確か石崎といったか」
「三宅はあいつを知ってるのか？」
「名前と顔だけな。あいつも中学時代は有名な不良だった」
「Ｄクラスは不良ばっかだな！」
国立の学校なのに不良が多すぎる件。
「石崎くん、須藤くんになにか用かな？」
「お前には関係ないだろ平田！」
サッカー部の練習終わりなのだろう。トレーニングウェア姿の平

田が一歩前に出て、石崎に訊ねた。
「いや、須藤くんは僕たちの仲間だ。だから関係あるよ」
「そんなの知らねえよ！」
「小宮くん、須藤くんに一人で来いって言ったんだね？」
「それがどうしたんだよ！」
「僕たちＢクラスはみんなで一つだ。つまり須藤くん一人を呼び出したということは、僕たち全員を呼び出したということになる」
「ど、どういうことだよっ!?」
「こういうことだよ」
まさか石崎たちも、須藤一人を呼び出したら、Ｂクラスの男子ほぼ全員が来ることは思わなかっただろう。
「そもそも他クラスの呼び出しに素直に応じると思っていたのか？」
佐倉とみーちゃんの三角関係が噂される幸村がカッコよく眼鏡をくいっと上げながら問う。
「くっ……！」
「これも龍園の指示か？」
「りゅ、龍園さんは関係ねえよ！」
「いや、動揺しすぎだろ」
「うぐっ……」
明らかに自分より喧嘩が弱そうな相手に凄まれてたじろぐ石崎たち。
なんてわかりやすいやつなんだ。
これは明らかに龍園の人選ミスだ。
……まて、龍園は頭が切れるやつだ。こんなポンコツどもに大切な役割を与えるだろうか。
もしかすると、石崎たちは悪だくみを仕組もうとしたのではなく、本当に須藤に用事があったのかもしれない。
「本当に龍園は関係ないんだな？」
「だからそう言ってるだろうが！」
俺の問いに素直に答える石崎。
「石崎は須藤に伝えたいことがあったんだな」

「そ、そうだよっ！」
「なるほど」
俺は石崎たちが須藤を呼び出した理由を推理した。
特別棟に一人で来るよう呼び出すくらいだ。
誰にも見られなくなかったのだろう。
この様子を見ると、須藤に用があったのは石崎で間違いない。
須藤に接点がある小宮と近藤にお願いをして、須藤を特別棟に呼び出した。
「小宮と近藤は須藤が一人で来たら、おいとまするつもりだったのか？」
「あ、ああ……」
「そ、そうだよ……」
「ふむ」
石崎と須藤を二人っきりにさせるのが目的だった。
もし須藤をボコすなら、小宮と近藤が去るわけがない。
仲良しの二人にも聞かせたくない話とはなんだ？
……そうか！　わかったぞ！
ここで、俺は一つの答えに辿り着いた。
「……もしかして、石崎は須藤に告白をしようとしたのか？」
「……は？」
「だから人目がつかない特別棟に須藤を呼び出したんじゃないのか？」
「な、何言ってんだてめぇっ！」
顔を真っ赤にした石崎が反論する。
「違うのか？」
「違うに決まってんだろ！」
「なら、なぜ須藤を呼び出した？」
「……っ。そ、それは……」
言えないか。
龍園の指示でもないとなると、告白くらいしか思い浮かばないのだが。

「石崎、お前……」
まさか同性から好意を持たれるとは思わなかったのだろう。
須藤が唖然とした様子で石崎の名前を呟いた。
「お、おいっ！　勘違いすんじゃねえよっ！」
お酒も飲んでないのに、石崎の顔はディープレッドだ。
「石崎くん、安心してくれ」
「あっ!?」
「僕たちはこのことを誰にも言いふらすつもりはない」
「なっ……」
「ただ、須藤くんは動揺しているようだから、話の続きはまた今度にしてくれるかい？」
「……」
石崎は口をパクパクするだけで、何も言い返せない状態である。
「須藤くんもそれでいいかな？」
「お、おう……」
「それじゃ、みんな帰ろう」
平田リーダー指示のもと、俺たちは足早に特別棟を去るのであった。
呆然とする石崎たちを残して。
その帰り道、念のためスタンバイしてもらっていた茶柱先生に問題ないことを報告した俺は綾小路と二人で寮に向かって歩いていた。
「立花、あの廊下に監視カメラが設置されていないことは気づいていたか？」
「ああ。生徒会にあそこにも監視カメラを設置するよう要望書を出しておくよ」
「そ、そうか……」
「しかし、監視カメラがないところに呼び出すなんて、映像記録にも残したくなかったんだな」
「そうだな。……石崎は本当に須藤に告白をしようとしたのか？」
「あくまで可能性の話だ」
「龍園の指示とは思わないのか？」

「俺も最初はそう思った。ただ、龍園は頭が切れる不良と聞いている」
「みたいだな」
「そんなリーダーが、あんなポンコツを使うわけがないと思ったんだ」
「なるほどな」
「不良ばかりのDクラスでも、もっとましな人材がいるはずだ」
「そうか」
「……だが、もしかしたらこれも龍園の作戦なのかもしれない」
「作戦？」
「ポンコツを使って俺たちBクラスを油断させる作戦かと思ったんだ」
恐らく龍園は俺たちBクラスに攻撃を仕掛け続けてくるだろう。
一発目にポンコツを利用して俺たちを油断させ、本命を投入するのかもしれない。
ハニートラップ要員であろう椎名は俺が抑えているが、この学校は美少女が多いので、新たな刺客を送り込んでくる可能性もある。
色仕掛けだけではない。
お得意の暴力で俺たちに恐怖を与え、畏怖を抱かせることも十分に考えられる。
「龍園、侮れない男だ」

21話

石崎たちが須藤を呼び出した日から三日が過ぎた。
あれから龍園がBクラスに攻撃する様子は見られない。
再度獲物を変更したのかと一之瀬に訊いてみたが、CクラスもDクラスからの被害はないとのことだった。
とすると、須藤の呼び出しに龍園は関わっていない可能性が高くなってきた。
須藤のような筋肉質の男が歌舞伎町二丁目では人気があるとテレビで聞いたことがあるが、どうやら本当だったようだ。
ただ、須藤はノーマルかつバスケに集中したい時期なので、石崎の恋が実ることはないだろう。
筋肉質の男なら、Dクラスに黒人のサングラスがいたはずなので、そちらに相手を変えてもらいたいところだ。
普通の学校なら構わないが、この学校は他クラスの生徒と付き合うにはハードルが多すぎる。
青春の自由を奪うつもりはないが、恋人を作るならなるべくクラスメイトにしてほしいものだ。
「立花、相談があるんだが放課後時間をくれないか？」
噂をすれば影とやら、女子の間で三角関係で盛り上がっている幸村が話しかけてきた。
本人たちは気づいていないようだが、佐倉とみーちゃんが幸村に好意を抱いているのはバレバレである。
恐らく勉強会でフラグでも建てたのだろう。
幸村は運動が苦手だが、学力に関しては学年でもトップクラスの生徒だ。さらに苦手な運動も克服しようと毎朝ウォーキングをしているらしい。
その向上心は俺も見習わなければ。
「今日は勉強会はないのか？」
「ああ」
「わかった。放課後にまた声をかけてくれ」

「助かる。それじゃまた」
「あいよ」
幸村が俺に相談とは珍しい。
俺より成績がいい幸村が勉強のことで相談することはないので、恐らく恋愛相談で間違いないだろう。
池に続いて恋愛相談を受けることになるとは、幼馴染のあいつが知ったら驚くだろうな。
「幸村くん、佐倉さんとみーちゃんのことかな？」
隣人の松下が一時間目の準備をしながら問う。
「だろうな。でも三角関係になったことなんてないからどう答えればいいやら……」
池の相談は比較的簡単なものだったので問題ないが、三角関係なんてレベルが高い相談を俺が対応できるだろうか不安だ。
「俺じゃ厳しそうだったらヘルプお願いしてもいい？」
「いいけど、あまり期待しないでね」
「俺よりマシだろう」
「そうだけど」
「そこは断言するのか……」
「だって立花くんは彼女いたことないでしょ？」
「そうだけど、松下もだろ？」
「彼氏はいたことないけど、告白なら二桁以上されたから」
「……すげぇ」
「そのおかげで面倒ごとに巻き込まれたんだけどね」
「やっぱり恋愛は面倒ごとが多いんだな」
「そうだね。それより最近櫛田さんはどう？」
「一応毎日褒めてるけど」
松下からの指示で、櫛田の承認欲求を満たすために、俺は一日一回彼女を褒めている。
しかし、それが原因なのかわからないが、櫛田に俺が惚れていると勘違いされたようで、告白もしていないのに振られてしまったことがある。

好意がないとはいえ、美少女に振られるのはそれなりにダメージを受けるものだ。
「なにか櫛田さんに変化あった？」
「うーん、特にないけど……いや、他クラスの情報を聞かなくても教えてくれるようになった」
櫛田は他クラスにも数多くの友人がいるので、半端でない情報量を持っている。
「そうなんだ」
「おかげで絡んだこともないのに、他クラスの生徒の性格とか覚えてしまった」
「それはいいことじゃない？」
「そうだな。特別試験で役立ちそうだ」
「私も一之瀬さんからそれなりにクラスメイトについて情報得られたよ」
「相変わらず仲良しだな」
「うん。今度の土曜も一緒に遊びに行くからね」
松下はCクラスの情報を得るために一之瀬と友人関係を築いている。
他クラスのリーダーと交流を持つなんて危険極まりないが、松下なら問題ないだろう。
学力はもちろん思考力や決断力があり、一之瀬にも負けないスペックの持ち主だと思っている。
……胸囲力を除いては。
「なにか失礼なこと考えなかった？」
「……っ!?」

＊＊＊

「お邪魔するぞ」
「お、お邪魔します……」
「どうぞ」

放課後、幸村が俺の部屋にやってきた。……女連れで。
「わざわざ時間作ってもらって悪いな」
幸村から他人に話を聞かれたくないとのことで、俺は自室に招き入れることにしたのだが、まさか女を連れてくるとは思わなかった。
「佐倉も適当に座ってくれ」
「ひぇっ！」
「麦茶でも飲むか？」
「ひぇっ！」
彼女は今からラップでもするのだろうか。
「すまん。佐倉は人見知りなんだ」
「そ、そうか……」
佐倉が大人しい性格なのは把握していが、ここまで人見知りとは……。
恐らく彼女はコミュニケーション能力の低さが原因でDクラスに配属されたのだろう。
「それで俺に相談って？」
答えはわかりきっているが、念のため確認する。
「……実は、佐倉がストーカー被害に遭ってるかもしれないんだ」
「え……っ!?」
恋愛相談じゃなかったのか。
予想が外れたことに羞恥心を感じてしまったが、すぐに気持ちを切り替える。
「詳しく聞かせてくれないか？」
「ああ」
幸村がゆっくり語りだした。
もともと佐倉の様子がおかしいのは幸村が気にしていたようで、原因がストーカー被害であることを知ったのは前日のことだった。
早朝のウォーキングを終えた幸村が寮に帰ると、佐倉の郵便ポストになにかを投函している男性を発見した。
男性は幸村の存在に気づき、足早にその場を去った。
その日の勉強会で、幸村が佐倉に事情を訊いてみると、ストーカー

被害に遭っていることを告げられたのことだった。
「これがその手紙なんだが」
幸村が鞄から手紙を取り出し俺に渡す。
「見てもいいのか？」
「ああ。佐倉の許可はとってある」
佐倉を見ると、彼女はゆっくり頷いた。
「それじゃ」
封から折りたたまれた紙を取り出し、ゆっくり広げるとそこには吐き気を催す内容が書かれていた。
「うわっ……」
手紙には送り主がいかに佐倉を愛しているかという自己アピール文が延々と書かれていた。
「……てか、佐倉って雫だったんだ」
雫は俺と同世代のグラビアアイドルだ。
週刊少年コニャックの表紙も飾ったことがあるので、それなりに人気はあったはずだ。
「は、はい……」
「幸村は知っていたのか？」
「いや、俺も昨日知ったばかりだ」
「そうなんだ」
「あ、あの……このことは……」
「わかってる。誰にも言わないよ」
佐倉の性格からして目立ちたくないのはわかっている。
もし、佐倉が雫だとばれたらとんでもない騒ぎになるだろう。
「あ、ありがとう……ございます」
「それで手紙以外に被害はないのか？」
「あ、あの……ブログのコメントに……」
「ブログ？」
「はい……」
「ブログやってる芸能人ってまだいたんだ？」
「あぅ……」

「あ、悪い」
「い、いえ……。私、流行に疎いので……」
だからブログなのか。
ＳＮＳといえば、ＴｗｉｔｔｅｒやＩｎｓｔａｇｒａｍが有名だが、佐倉はついていけてないってことか。
なんか親近感が湧いてきたぞ。
「これがストーカー男のコメントだ」
幸村がスマホを操作し、ブログのコメント欄を表示させる。
『雫、今日も綺麗だね』
『今日は左より右の乳の方がいい感じだね』
『腋毛の処理が甘いんじゃないかな』
『ナイスおっぱい』
『僕のマグナムが火を吹きそうだよ』
『雫のために頑張って正社員になるよ』
『新婚旅行は熱海でいいかな』
『子供は男の子と女の子一人ずつがいいんじゃないかな』
おっぱいのバランスがわかるなんて、そうとうレベルが高いストーカーである。
それよりストーカー男正社員じゃないのか……。
「……とりあえず佐倉がストーカー被害に遭ってることはわかった。それで先生には相談したのか？」
「いや、していない」
「なんでだよっ!?」
「佐倉があまり大事にしたくないらしくてな……。とりあえず、それなりに信頼している立花に相談しようかと思ったんだ」
それなりなのか……。
まあ、信頼されているだけマシか。
「信頼してくれてるのは嬉しいけど、これは俺たちの手に余るぞ」
「そうだな……」
「佐倉の性格からして大事にしたくないのはわかるけど、ストーカーを甘く見ちゃいけないぞ」

「は、はい……」
「佐倉もニュースで見たことあると思うけど、ストーカーに殺されてしまう被害者もいるんだ。何かあってからじゃ遅いんだぞ」
俺も幼馴染に振られたヤンキーに暴力を振るわれたことがある。
今思うと、振られた腹いせに幼馴染を襲うなんて、あいつも立派なストーカー野郎だったんだな。
「幸村、佐倉、すぐに茶柱先生に相談しよう」
「どうする佐倉？」
「……わ、わかりました……。茶柱先生に相談します……」
震えながら幸村の問いに答える佐倉。
こんな年端もいかない女の子を怖がらせるなんてひどい野郎だ。
もうすぐ正義の鉄槌が下されるから待ってやがれ。
「ちなみに、犯人に心当たりはあるのか？」
郵便ポストに直接手紙を投函したということは、高度育成高校の敷地内に出入りできる人間と言うことだ。
同じ学校の生徒なのか、施設などで働く大人なのか。
「多分、家電量販店の店員さんだと……思います……」
佐倉はその店員が犯人だと思われる理由を話した。
入学直後にデジカメを家電量販店で購入したときに接客した店員に、佐倉が雫であることがばれてしまったようで、会計時に問い詰められたようだ。
ポイントでの支払いなのですぐに会計を終えた佐倉は答えることなく逃げたが、その日以降にストーカー被害が始まったとのことだ。
「なるほど。確かにその店員が怪しいな」
怪しいどころか犯人で間違いないだろう。
デジカメ購入時に、延長保証の書類に住所も記入したと佐倉が言っていたので、彼女の部屋番号を知っていてもおかしくはない。
ストーカー野郎に前科があれば手紙の指紋から特定は出来そうだ。
指紋が特定できなくても、ブログのコメントからＩＰアドレスなどから個人が特定できる可能性もある。
「とりあえず茶柱先生に連絡だ」

＊＊＊

茶柱先生に佐倉のストーカー被害を報告したところ、思った以上に迅速に動いてくれた。

まず茶柱先生は、敷地内にある交番に佐倉を連れて被害届を出した。

ストーカー被害に対する警察の対応は遅いとニュースでよく見かけていたが、茶柱先生が美人だったからか、警察の対応は素晴らしいものだった。

茶柱先生からの報告によると、ストーカー野郎は佐倉の予想通り家電量販店の店員だったようで、すぐに逮捕されたらしい。

これで佐倉の日常が脅かされることはなくなった。

ただ、卒業後にストーカー野郎が佐倉を襲う可能性もゼロではない。

ストーカー野郎が、高度育成高校の敷地内に入ることはないので、卒業までは安心だろう。

だが卒業後はどうだろうか。

もし奴が初犯なら実刑が下されることなく、すぐに自由の身になるだろう。

俺は最悪の未来を想像してしまった。

ストーカーが復讐を企て、卒業式当日に、佐倉が敷地外に出た瞬間を狙い、彼女を襲ってしまう。

怒り狂ったストーカーが何をしでかすか、俺のような常人には想像もできない。

「佐倉のために幸村を鍛えたほうがいいかもしれない」

佐倉が唯一心を開いているのは幸村だ。

俺や元不良の三宅の方が喧嘩は強いだろうが、佐倉を助けるのは幸村の方がいいだろう。

しかし、幸村には勉強会という大事なお仕事がある。

「まずは土日の予定を訊いてみるか」

週一でもいいので、護身術なり何かしらの武道を身につけてもらわなければ。

幸村も佐倉のためなら喜んで武道に取り組んでくれるはずだ。

ストーカーが逮捕された翌日、登校したところ下駄箱に佐倉がいたので小声で挨拶してみた。

「佐倉おはよう」

「ひぇっ！」

「……」

ちょっと心が折れそうになった。

「あ、立花くんだったんですね……。おはようございます」

「お、おはよう……」

「すみません……。背後から声をかけられたので悲鳴をあげてしまいました……」

「そっか」

佐倉に次に挨拶するときは真正面からするとしよう。

「あれから被害はなくなったか？」

「はい。いろいろとありがとうございました」

ご丁寧に頭を垂れて感謝の言葉を述べる佐倉。

「いや、俺は何もしてないぞ。茶柱先生に相談するよう言っただけだ」

「でも、立花くんに相談しなければ茶柱先生に相談なんてしなかったと思います」

「そっか」

「今度お礼をさせてください」

「俺じゃなくて幸村にしたらどうだ？」

「……っ」

幸村の名前を出したところ、佐倉の頬が一瞬で赤く染まった。

あの時の石橋くらいに顔が真っ赤だ。

「……佐倉ってわかりやすいな」

「ひぇっ!?」

「頑張れよ」

「な、なにがですかっ!?」

「何でもないよ」
俺は目が泳ぎだした佐倉を置いて先に教室に向かうのだった。
「なんか佐倉さんと仲良く話してたみたいじゃん」
席に着くと、軽井沢が不機嫌そうな表情で話しかけてきた。
「そうだな。前より仲良くなれたと思うぞ」
「ふぅん。佐倉さん、可愛いもんね」
そりゃ人気グラビアアイドルだからな。
髪型や眼鏡で誤魔化しているが、容姿だけなら学年――校内でもトップクラスだろう。
「ああ。幸村のことでからかったら、可愛い反応してくれたよ」
「え？　マジっ!?」
さっきの不機嫌はどこに行ったのやら、軽井沢の表情が怒から喜に変化した。
「やっぱ佐倉さんって幸村くんのこと好きなんだ」
「恐らくな。名前出しただけで、顔が真っ赤になってたし」
「何それ、超可愛いんですけど。……今度、佐倉さんに話しかけてみようかな」
「やめておけ」
「なんでよ？」
「佐倉はギャルが苦手だからだ」
「そうなの？」
「ああ。眼鏡をかけている女子はギャルが苦手だ」
「なんでよっ!?」
軽井沢がぎゃあぎゃあ言ってくるので、俺は彼女の罵声を右から左に受け流しながら、どうやって幸村に武道を学んでもらうか予鈴が鳴るまで考えるのであった。

22話

私――松下千秋が、一之瀬さんと友人になってから一ヶ月が過ぎようとしていた。

彼女と親交を深めて気づいたことがある。

一之瀬帆波は善人だ。

私は人生の中で彼女以上の善人と出会ったことがない。

それほどまでに一之瀬さんは善人だった。

さらに入試を首席合格しただけあって学力も文句なし。

運動は自信がないと言っていたけれど、彼女のクラスメイトから聞いた話だと平均以上の運動神経はお持ちのようだ。

だから疑問に思ってしまう。

なぜ、一之瀬さんはBクラスに配属されたのだろうか？

彼女ほどの実力があればAクラスに配属されるのが妥当だろう。

それとなく中学時代の話を訊いてみたけれど、Bクラスに配属になった原因については聞きだすことはいまだ出来ていない。

彼女の性格からして大きな問題を起こしたとは考えにくいけれど、可能性はゼロではない。

また、一之瀬さんは自己評価がやたら低いことも気になる。

もしかしたら、それがBクラスに配属になったことに関係しているのかもしれない。

彼女の秘密に強く興味を惹かれたけれど、焦る必要はない。

なぜなら、私は彼女にとって一番頼りになる友人というポジションを確立したからだ。

現に、今も一之瀬さんから恋愛相談を受けている。

「告白されそうなの？」

「……うん」

七月初週のとある放課後、ポイントが支給されたこともあって、私たちは女子に人気のカフェに足を運んでいた。

「ちなみに誰かは訊いてもいい？」

「誰にも言わないって約束してくれる？」

「もちろん」
「……千尋ちゃん」
お相手はまさかの女子だった。
「そ、そうなんだ……」
「前からボディタッチは多いと思ってたんだけど……」
「なんで白波さんが一之瀬さんに告白するってわかったの？」
「トイレの個室に入ってるときに、千尋ちゃんが麻子ちゃんに恋愛相談しているのが聞こえたんだよね」
「あー……」
「近いうち私に告白するって……」
「網倉さんはなんて言ってたの？」
「応援するよって……」
「まあ、友人に恋愛相談されたらそう答えるしかないよね」
親しい友人に宣言したということは、一之瀬さんの言う通り近いうちに白波さんは告白するつもりだ。
「それで一之瀬さんは私に何をしてほしいの？」
「私、恋愛経験がまったくなくて……。経験豊富そうな松下さんから適切なアドバイスが受けられるかと思って……」
「……え？　一之瀬さん、彼氏いたことないの？」
「な、ないよっ！　告白だってされたことないしっ！」
嘘でしょ……。
そんな美貌の持ち主なのに……。
「一之瀬さんって女子中に通ってた？」
「共学だよ」
「遊ぶ暇がないほどの超名門校だったりしない？」
「公立だけど」
「……」
一之瀬さんの同中の男子どもは何をしていたんだろう。
こんな極上の獲物がいるのに。
それとも、釣り合う男子がいなくて、みんな及び腰になっていたのだろうか。

「それでね、なるべく千尋ちゃんに傷つけないように告白を断りたいんだよね」
「つまり白波さんと付き合うつもりはないってことね」
「……うん」
「理由を訊いてもいい？」
「うーん、千尋ちゃんは大切な友人だけど、恋愛感情は持てないっていうか……」
「そっか。将来、白波さんと付き合う可能性はないの？」
「ないよ。だって、私は男好きだから」
「……え？」
「あ、ごめん、間違えたっ！　恋愛するなら男の子がいいってことだよっ！」
びっくりした……。
恋愛経験ないのに、男好きってカミングアウトするなんて、ヤバイ女かと思っちゃった。
今の会話を立花くんが聞いたら、ぜったい一之瀬さんをハニートラップだと思うだろうな……。
「それで、どうしたらいいかなぁ……？」
一之瀬さんを目を潤ませながら、捨てられた子犬のような顔を向けてくる。
私が男子なら保護欲が掻き立てられるだろうけど、残念だけど私には通用しない。
むしろ、あなたの相談事を利用させてもらうからね。
「普通に断るしかないんじゃない？」
「うーん、それだと千尋ちゃんが傷ついちゃうんじゃないかなー」
「多少傷つくのは仕方ないよ。恋愛で傷つくなんて当たり前だし」
「そんなもんなのかな……」
私の答えに落胆する一之瀬さん。
「ただ、それより白波さんを傷つけない方法ならあるよ」
「え……？」
「彼氏を作ればいいんだよ」

「か、彼氏っ!?」
彼氏という単語に慌てふためくCクラスのリーダーさん。
恋愛に免疫がないのがよくわかる。
「私の予想だと、白波さんに限らず、これからも一之瀬さんに告白する人は増えると思うよ」
「な、なんで……？」
「それは一之瀬さんが男女問わず人気あるから」
「そ、そんな……。私、人気なんてないよ……」
「あるから。非公式だけど、彼女にしたいランキングで一位にもなってたし」
「そんなランキングがあるのっ!?」
「うん」
ちなみに私は五位だった。
別に悔しくはない。
いや、本当に。
「もう一つ理由があるよ。みんな、学校生活に慣れ始めるころだから、心に余裕を持つようになるんだよね」
「うん」
「つまり、勉強や部活以外にも力を入れる人が増えるわけ。思春期真っ只中の高校生がその二つ以外に力を入れるとしたら？」
「れ、恋愛……？」
「正解。実際、うちのクラスの平田くんも最近告白されることが多くなってるから」
「平田くんてこの前ファミレスに来てくれたサッカー部のイケメンの人だよね？」
「うん。一之瀬さんでも、平田くんはかっこいいと思うんだ」
「まだ一回しか絡んだことないから、外見だけの判断になるけどね」
「そっかそっか」
それは好都合だ。
一之瀬さんにヒアリングするまでもなく、いい情報が手に入った。
これなら私の思惑通り動いてくれそう。

「話戻すね。彼氏が出来れば、一之瀬さんに告白する人は激減すると思うの」
「恋人がいるとハードルが高くなるから？」
「そう。そうすれば今みたいに恋愛に頭悩ませることも減るでしょ？」
「そ、そうだねっ」
「今は期末テスト前だから、そこまで影響はないと思うけど、大きなイベント直前とかに告白されるのは嫌でしょ？」
「……うん」
「一之瀬さんは学級委員長だから、クラスのためにイベントに集中したいもんね」
「そうだね」
「私が提案できるのはこれくらいかなー」
ほかにも色々あるけれど、恋愛経験がゼロの彼女は気づかないだろう。
「ありがとう松下さんっ！　松下さんに相談してよかったよっ！」
「どういたしまして。それでどうするの？」
「そうだね……。千尋ちゃんをなるべく傷つけたくないし、告白される機会もなるべく減らしたいから……私、彼氏作るよっ」
「そっか」
「でも、私の彼氏役になってくれる人はどうすれば……」
「それなら私に任せて」
ここまでくれば作戦は成功したも同然だ。
あとはうちのクラスの人気者に、一之瀬さんと同じ話をすればいいだけ。
二人には悪いけれど、お互いのクラスのために犠牲になってもらうよ。

＊＊＊

金曜の放課後、俺は珍しい組み合わせでカラオケに来ていた。面子

は俺、平田、神崎、軽井沢、松下、一之瀬の六人。
はたから見たら合コンしに来た男女六人組に思われるだろうが、もちろん、そんなことはない。
今日は平田と一之瀬の顔合わせのために集まったのである。
松下から招集がかかったのは昨日のことだった。
どうやらお互い恋人を作るつもりはないのに、告白されることに悩んでいたようで、それを解決するために平田と一之瀬が疑似カップルになるというのだ。
他クラスのリーダーとフリとはいえ、恋人になるのは危険極まりないかと思うが、松下が考えたことなので、俺が反対する理由はないだろう。
松下曰く、一之瀬から恋愛相談を受けている最中に、平田が告白されることに悩んでいることを思い出し、今回の計画を思いついたらしい。
人気者の二人が付き合えば、二人に告白する人が減り、二人の精神的負担を減らせるのが目的だそうだ。
確かに平田は以前より溜息をつくことが多くなっていた。本人に訊いたところ、部活の練習がハードで疲れているだけと言われたので、あまり心配はしていなかったが、平田の精神はだいぶすり減っていたようだ。
なお、付き合うフリをするのに協力者が必要とのことで、俺たちを呼んだとのことだった。
「二人が会うのは二回目だよね。改めての自己紹介は不要でいいかな？」
「大丈夫だよ」
「私も大丈夫」
「そっか。最終確認になるんだけど、二人とも付き合うフリをするということでいいんだよね？」
「もちろんだよ。今さら断るつもりはないよ」
「わ、私もっ……」
二人の回答を得た松下は満足そうに笑みを浮かべ、今後について話

し始めた。
まず、周りから本当に付き合っているのか疑われないように週一でデートすることが確定した。
平田も一之瀬もデート経験がないとのことで、デートコースは松下と軽井沢が考えることになった。
また、一ヶ月後にはお互い下の名前で呼び合うことも松下は指示した。
これも、周りから疑われないためである。確かに長期間付き合っていてお互い名字呼びは怪しく思える。
「決めごとはこんな感じかな。何か質問ある？」
「僕はないよ」
「私も」
「そっか。それじゃ、後はお互いのことを知るために二人で質問しあって」
「え？」
「質問って……？」
「だって二人は疑似とはいえ恋人になるんでしょ。ならお互いのことを知らなきゃダメでしょ」
「……確かにそうだね」
「さすが松下さんっ！」
親交を深めたからだろうか、一之瀬の松下を見る目が以前より変わった気がする。
それは、友達というより、憧れの対象に向ける目のようだ。
「そ、それじゃ私から質問してもいいかな……？」
「もちろんだよ一之瀬さん」
「ありがとう。えっと……ご趣味は？」
「お見合いかっ!?」
ここでようやく軽井沢が声を発した。突っ込みだったけれど。
「海外サッカーを見ることかな。一之瀬さんは？」
「特にないかな」
「ないのっ!?」

「無趣味なんて、一之瀬って思ったより寂しい人間だったんだな」
「うぅ……」
軽井沢と俺の反応に、しょんぼりする一之瀬。
「……あっ、趣味と言っていいのかわからないけど、はまってることならあるよ？」
「なにかな？」
「焚火の動画を見ることだよ」
「焚火の？」
「うん。見ると心が落ち着くんだよね」
「そうなんだ。そういえば芸能人でも同じこと言ってた人がいたと思うよ」
「そうなの？　私だけじゃなかったんだぁ……よかった」
どうやら平田と同じく一之瀬も精神が参っているようだ。
平田以外の面子も察したようで、仲良く会話をする二人に生暖かい目を向けている。
「平田くんは動画見たりする？」
「サッカーのハイライトくらいかな」
「さすがサッカー部だね。柴田くんも同じこと言ってたよ」
「そうなんだね。今度、僕も焚火の動画を見てみるよ」
「見て見て。ぜったいリラックスできるから」
リラックス目的で焚火の動画を見ているのか。
……俺も胃が痛くなったら見てみようかな。
「ねえねえ、せっかくカラオケ来たんだから歌わない？」
話を聞くだけに飽きたのか、いつの間にかマイクを用意した軽井沢が提案してきた。
「そうだな。これからカラオケデートすることもあるだろうし」
こうして話し合いもほどほどに、俺たちはカラオケで二時間ほど熱唱してから解散した。

＊＊＊

週明けの月曜日、一年の教室はビッグカップルの誕生に話題が持ちきりだった。

非公式だが恋人にしたいランキング一位の一之瀬、二位の平田が付き合いだしたことにより、この世の終わりと思えるほどの顔で落胆する生徒が大勢見受けられた。

松下の計画通り、これなら二人に告白する輩も減ることだろう。

「平田くん、一之瀬さんと付き合いだしたって本当なの？」

どこのクラスかわからないが、ボブカットの女子がトイレに向かう途中の平田に話しかけてきた。

「本当だよ」

「そんなぁ……。てっきり、立花くんか綾小路くんと付き合ってると思ったのにぃ……」

「……っ!?」

ボブカットの女子の発言に凍り付く俺と平田。

「あ、でも綾小路くんも彼女いるっぽいんだよね……。立花くんは彼女さんいるんだっけ？」

「い、いないけど……」

標的を平田から俺にチェンジしたようだ。

「そっか！　それじゃまだチャンスあるね！」

「チャンス……？」

「相手は幸村くんか三宅くんかな。さすがに須藤くんはないよね？」

「な、なんの相手でしょう……？」

「でも神崎くんもワンちゃんあるかな。昨日一緒にカラオケに行ってたみたいだし」

何この子怖い。

身の危険を感じた俺と平田は、そっとバックステップでその場を去った。

放課後、精神的に疲労した俺は教室で軽く昼寝をしてから帰宅することにした。

しかし、それが不幸を招くことになるとはこの時の俺は予想することができなかった。

「……そろそろ帰るか」
端末で時刻を確認したところ十五分ほどしか経過していなかったが、短時間でも昼寝したおかげか、身体も心も軽くなったような気がする。
「もう帰るのか？」
「ああ。勉強会頑張ってくれよ幸村」
「言われなくても」
眼鏡を優雅にくいっと上げた幸村に挨拶をして、教室を出ようとした瞬間だった。
「お久しぶりです」
その声を聞いただけで、俺の身体はガクガクと震えだした。
「やっと捕まえましたよ」
恐怖で震えるのも仕方ないだろう。
俺は普通の人間だ。
悪魔に対して恐怖を抱くのは、人間として普通のことである。
「もう逃がしませんから」
杖をついた白い悪魔の来襲に、俺の恐怖心は天元突破した。

23話

坂柳有栖。

Aクラスで葛城と派閥争いをしており、絶対暴君として噂される女王だ。

彼女が初めて接触してきたのは中間テストが終わった直後で、会うのはそれ以来となる。

なぜなら俺が坂柳を避けていたからだ。

理由は簡単。

彼女が近い将来Aクラスのリーダーとなる存在で、俺たちBクラスにとって一番の敵になるからだ。

Cクラスの一之瀬帆波、Dクラスの龍園翔と各クラスのリーダーも難敵だが、坂柳は別格だと、俺のシックスセンスが叫んでいる。

自身の恐怖心に従い、俺は女王から逃げ続けた。

しかし、その生活も今日で終わりのようだ。

「あなたと話すのは一ヶ月ぶりくらいでしょうか」

教室まで乗り込んでくるとは予想外だった。

なぜなら教室には多数の監視カメラが設置されている。

手下の鬼頭に対して行ったような暴力を振るうことは出来ない。

それなのに坂柳は教室まで乗り込んできた。

くそ！　坂柳の狙いがわからない！

「……幸村、博士！　女子たちを守るんだ！」

「くっ、わかった……！」

「了解でござる！」

教室に残っているのは俺と幸村の勉強会のメンバーだ。

女子は佐倉とみーちゃんが残っており、暴力が苦手な可憐な乙女たちである。

正直、幸村と博士じゃ勝てないだろうが、肉壁くらいにはなれるだろう。

「池、沖谷は茶柱先生にいつでも連絡できるように準備を！」

「お、おう！」

「うん！」
いつの間にか、教室の扉は両方とも坂柳の手下たちが塞いでいた。
俺たちを教室から出させないようだ。
「最悪防犯ブザーを鳴らしても構わない！」
俺たちBクラスは万が一に備え、防犯ブザーを携帯している。
現状、実害がないので鳴らすつもりはないが、防犯ブザーの存在は坂柳にとって牽制にはなるはずだ。
「鳴らさないでください！」
坂柳が体格に反するような大声で俺たちを制する。
「それは坂柳次第だ。暴力には大人の力で対応する」
「暴力なんて振るいません」
「確かに、監視カメラが多い教室で暴力を振るうほど愚かではないことはわかっているが……」
「……まさかっ！」
「どうした博士？」
博士が何かに気づいたように坂柳に負けないボリュームで声を発した。
「この堂々たる殴り込み」
「殴り込みではありません！」
「立花殿、坂柳殿らは、監視カメラをハッキングしているのではないでござろうか？」
「……っ!?」
「彼女らはAクラス。恐らく天才が集結したクラスでござろう。一人くらい国家レベルのセキュリティを突破できるハッカーがいても不思議ではないでござる」
「確かにっ！」
「確かにじゃありません！　ハッカーなんていませんから！」
坂柳が否定するが、俺たちは素直に信じるほど馬鹿ではない。
「いや、超名門である高度育成高校のAクラスだ。情報だと勉強や運動がいまいちな生徒がちょくちょくいるようだが、なぜ彼らがAクラスなのか……今理解したぜ」

「そんな理由で理解しないでください！　それにあなたはＡクラスを神格化しすぎです！」
「突っ込みが激しいな坂柳。それじゃ図星を突かれたと言ってるようなものだぞ」
「誰のせいですか！」
徐々に足の震えが収まってきた。
どうやら恐怖心が薄れているようだ。
「殴り込みでもありませんし、監視カメラのハッキングもしていません。何なら先生たちに確認していただいても構いません」
「……そういうことにしておこう」
「はぁ、もういいです。とりあえず私はあなたに用があって、教室まで来たのです」
「標的は俺だけか？」
「標的ではありません！　ただ立花くんとお話をしたいのです」
「お話をするのに、凶器は必要か？」
「ですからこれは凶器ではありません！」
はぁはぁと息を切らしながら否定する坂柳。
しかし、手下である鬼頭の顔はボコボコのままだ。
もしかして、彼はサンドバック要員なのかもしれない。
クラスメイトを暴力のはけ口にするとは、恐ろしすぎる女だ。
「……と、言っても立花くんは信じてくれないでしょうね」
「当たり前だ」
「真澄さん、持っててください」
坂柳が秘書的な女子に杖を渡した。
神室真澄。
黒髪ロングでスレンダーな美少女だ。
ぶっちゃけもろタイプである。……ただ悲しいかな。彼女はＡクラスだ。
俺たちが親しくなることはないだろう。
「……いいのか？」
「ええ。これで私の話に応じてくれますか？」

「条件がある」
「なんですか？」
「俺以外の生徒を解放してくれ」
「別に拘束はしてませんがっ!?」
「見ろ。みーちゃんなんて泣いてしまっている」
「え……？」
みーちゃんの大きな両目から大粒の涙が流れている。
「なぜ泣いているのですか……？」
「あの坂柳が教室まで乗り込んできたんだ。か弱い女子なら泣いても仕方ないだろう」
「わ、私はそこまで恐れられていたのですか……」
坂柳が落ち込んだ演技をし出した。
同性に怖がられてショックを受ける自分を演じ、俺の警戒心を取り除こうとしたのだろう。
食えない女だぜ。
「勝手に帰ってください……。拘束なんてしていませんから……」
幸村たちは恐る恐る教室を後にした。
坂柳は悲しげな表情でそれを見送っていた。
「とりあえず座りませんか？」
「わかった」
適当に空いてる席に座る俺と坂柳。
「はぁ……。やっと、立花くんとお話することができます」
「俺に何の用だ？」
「その前にこれを」
「……ん？」
坂柳はブレザーのポケットから手帳らしきものを取り出し、俺に見やすいように机の上に置いた。
「障がい者手帳……？」
「はい。私が障がい者である証拠です」
「なぜこれを？」
「立花くんが私の話を信じてくれないからに決まってるじゃないです

か！」
「うっ……」
「初めてですよ。杖を凶器に間違えられたのは」
念のため中身を確認させてもらったが、どうやら本物のようだ。
「これで信じてくれましたか？」
「……ああ、どうやら俺が間違っていたようだ。すまなかった」
俺は誠心誠意を込めて頭を下げた。
自分の間違いは素直に認めること。
これは両親の教えである。
「いえ。信じてくれたならいいです」
坂柳有栖は本当に障がい者だった。
それが判明した今、俺は坂柳に対する警戒心が加速度的に膨らんだ。
「どうやら予想以上に恐ろしい女のようだ」
「なぜ今の流れでそうなるのですかっ!?」
「坂柳は障がい者だ」
「え、ええ」
「つまり体育の評価はゼロだろう。通信簿も1ばかりだっただろう？」
「一応、先生の気遣いで2でしたが」
「なるほど、いい先生だ」
「はぁ……。それで立花くんは何を言いたいのですか？」
「坂柳は運動がまったくできないのにAクラスに選ばれた。学業と運動、どちらか片方が秀でて、片方が低評価の生徒は通常であればよくてBクラスに配属されるはずだ」
「そうなのですか？」
「とある生徒会の方からクラスの配属の傾向について聞いたことがある」
「生徒会……」
「つまり、運動がまったくできないのにAクラスに選ばれた坂柳は異例ということだ」

「ほ、褒めてくれているのですか……？」
「そうだ。だから俺は今まで以上にお前に恐怖心を抱いている」
俺は汗ばんだ掌を、坂柳に見せつけた。
「見ろよ俺の掌を。こんなに汗ばんだのは、実家の旅館に座敷童子が現れると知った時以来だぜ」
「は、はぁ……」
「坂柳、お前は正真正銘の化物だ」
「そこは天才と言ってほしいのですが……」
「天才なんて儚いものだ。お前はそんなもろっちい存在ではない」
「て、天才がもろっちい……」
今まであらゆるジャンルで天才ともてはやされた人たちが大勢いた。
しかし、大成せずに消えていったものも多い。
だから天才は儚い。
「坂柳、俺はお前に恐怖と畏怖を抱くぜ」
「あまり嬉しくないのですが……」
「それより俺に話っていったいなんだ？」
坂柳の障がい者手帳のおかげで、だいぶ話がそれてしまった。
そろそろ本題に入らせてもらおう。
「実は立花くんにお願いがあるのです」
「俺にお願い？」
「はい。立花くんは、私が葛城くんとクラス内で派閥争いをしているのはご存知ですよね？」
「ああ。噂だと坂柳からのプレッシャーが凄すぎて、葛城の髪の毛が全部抜けてしまったらしいな」
「彼はもともとそういう病気です！」
否定する坂柳の後ろで、神室と橋本が笑いを堪えている。どうやら、この二人はそこまで坂柳をリスペクトしていないようだ。
「そうか。Ａクラスは病気持ちの生徒が多いのか？」
「いえ、私と葛城くんだけです」
「なるほど。それで俺に何をしてほしいんだ？」

俺が訊ねると、坂柳は背筋がぞくっとするような冷酷な笑みを浮かべた。
「葛城くんを潰して欲しいのです」
「俺に葛城を……？」
「ええ。恐らく、夏休みにクラスポイントをかけたイベントが実施されるでしょう」
「バカンス旅行のことか？」
「その通りです」
「やはり坂柳も気づいていたか」
「当然です。この学校が、代償もなしにそんな甘い蜜を与えてくれるわけがありません」
「そうだな。……それで、その試験で葛城を潰して欲しいってことか？」
「はい。恐らく私はその試験に参加はできないかと思われますので、私の代わりに葛城くんを潰して欲しいのです」
「……船が怖いのか？」
「違います！　医師に旅行など長期の外出は控えるよう言われているのです！」
「なるほど」
バカンス旅行改めサバイバル合宿は二週間予定されている。
障がい者の坂柳が参加できないのは仕方ないだろう。
「もちろん報酬は払います」
「報酬？」
「ええ。真澄さん、例のものを立花くんに」
「はいはい」
神室はだるそうに鞄から紙を取り出し、無造作に机の上に置いた。
「これは契約書か？」
「はい。心配性の立花くんは口約束だけだと話を受けてくれないと思ったので、こちらで契約書を用意させて頂きました」
「じっくり読ませてもらっても？」
「もちろんです」

俺は一文一句見逃さずに契約書を確認した。
報酬については前金として１０万ポイント、成功報酬として１０万ポイント、合計２０万ポイントを支払ってくれるようだ。
さらに試験中は坂柳派閥の生徒が俺に協力してくれる記載もあった。
「問題はなさそうだが、念のためクラスメイトにも契約書を確認させてもいいか？」
契約書の確認は法務部の仕事だと、なんかのドラマで見たことがあるので、弁護士を目指している幸村あたりに確認してもらった方がいいだろう。
内容を見た限り、俺たちＢクラスが不利になることはなさそうだが、見落としがあるかもしれない。
もし、少しでも俺たちにとって不都合があるようなら、この話は断らせてもらおう。
「ええ。返事は三日以内に頂ければと思います」
「わかった」
しかし、坂柳はなぜ俺に依頼をしてきたのだろうか。
葛城を潰すなら、自身の派閥の生徒だけでも問題ないはずだ。
彼女ほどの頭脳があれば、葛城に気づかれないように、手下たちに試験の妨害などの指示することも容易いだろうに。
そもそも、試験に関わらずに葛城を潰すことだって可能ではないのだろうか。
「ちなみに契約書には記載しておりませんでしたが、葛城くんを失脚させるためなら、私たちＡクラスのクラスポイントがいくら減っても構いません」
「つまりＢクラスに落ちても構わないってことか？」
「はい。そうでないと面白くありませんし」
クスクスと、余裕の笑みをかます坂柳。
「Ａクラスのままじゃつまらないってことか？」
「はい」
即答か。Ｂクラスに落ちても、自分ならすぐにＡクラスに戻すこと

ができると言いたいのだろう。
　確かに坂柳ならDクラスからスタートしても、Aクラスで卒業することも出来そうだ。
　……待て、まさか坂柳が俺に依頼した本当の理由って……
「坂柳、訊いてもいいか？」
「はい」
「坂柳は勝ちが決まっているゲームに興味はあるか？」
「ありません。勝ちが決まっているゲームほど、つまらないものはないでしょう」
「……だよな、坂柳ならそう答えると思ったよ。ちなみに葛城を潰すために、Bクラス以外の生徒にも依頼する可能性はあるか？」
「そうですね。一之瀬さんや龍園くんに依頼する場合もあるかもしれません」
　今の答えで確信した。
　どうやら坂柳は、俺の予想をはるかに超えた人物だったようだ。
「坂柳、お前の狙いがわかったぜ」
「狙いですか？」
「ああ。葛城を潰すために俺に依頼をしたと言ったが、本当の狙いは違うんだろう」
「ほ、本当の狙い……？」
「いや、葛城を潰すのも一環なのは間違いないか」
「立花くんは何が言いたいのですか……？」
「坂柳の本当の狙いは、AクラスをDクラスに落とすことだ」
「……はい？」
　俺の推理はこうだ。
　葛城は保守派で、そのため坂柳と意見が合わず、クラス内で派閥争いをするようになったと、櫛田から聞いたことがある。
　先ほど、坂柳はAクラスのままでいるのはつまらないと言っていた。むしろ、Bクラスに落ちるのを望んでいるかのようだった。
　それはなぜか？
　坂柳が勝ちゲーが嫌いだからだ。

勝利が決まっているゲームほどつまらないものはないと坂柳は断言した。

坂柳は現状に不満があるのだ。

Ａクラスだって、Ｓシステムの仕組みに気づくのが遅ければ、Ｂクラス以下に落ちる可能性もあった。

けれど、優秀な生徒が集められたＡクラスが、俺たちより遅く気づくはずもなく、その結果、俺たちＢクラスは２００クラスポイント以上離されてしまった。

もちろん、俺たちは諦めずにＡクラスを目指すつもりだが、坂柳率いるＡクラスが卒業まで逃げ切る可能性の方が高いだろう。

そうすると、結果的に入学して一ヶ月で勝負が決まったことになってしまう。

そんなの、坂柳にとっては勝ちゲー以外の何ものでもない。

だから、坂柳はゲームを面白くするために、自分のクラスをＡから落とすことに決めたのだ。

しかし、クラスを降格させるのに邪魔ものがいた。

それが保守派の葛城だった。

ならばと、冷酷非情な坂柳は葛城を利用することにした。

坂柳は、一之瀬や龍園に葛城潰しの依頼をする可能性があることを示唆した。

恐らく、現状がＡクラスならＢクラスの俺、Ｂクラスに落ちれば一之瀬、Ｃクラスに落ちれば龍園といったかんじで、一つ下のクラスのリーダーに依頼するつもりなのだろう。

俺たちからすればクラスを昇格させるチャンスだし、大量のポイントももらえて、断る理由がない。

坂柳は葛城を試験のリーダーとして利用し、Ｄクラスに落ちたと同時にリーダーとしての責任を取らせて失脚させるつもりだ。

Ｄクラスに落ちてようやく坂柳の楽しいゲームの始まりというわけだ。

恐ろしすぎる。なんて恐ろしい女だ坂柳有栖。

俺の推理を聞いた坂柳が呆けた顔をしている。

どうやら自身の狙いに気づいた俺に驚いているのだろう。
「この考えに至るまで大変だったぞ」
「え、えっと……」
「なぜならお前は化物――いや、よく考えたら女子に化物は失礼だな。坂柳の望み通り天才と呼ばせてもらおう」
「あ、いや、その……」
「天才の考えは俺たち凡人じゃ思いつかないものだからな。だから自分の常識を取り払ったよ」
坂柳の顔が青くなっている。
もしかして教室の冷房が効きすぎたのだろうか。
東北人の俺にとってちょうどいい涼しさなので、都会っ子の坂柳にとっては寒いくらいなのかもしれない。
温度をあげたいところだが、あいにく教室のエアコンは温度を弄れないようになっている。
坂柳には悪いが、このまま我慢してもらおう。
「坂柳にとってAクラスでスタートして、Aクラスで卒業するのは簡単すぎる」
「そ、そうですね……」
「なにせ坂柳は天才だからな」
「そ、そうです……。私は天才で……」
「どうだ？　俺の推理は合っていたか？」
「……」
なぜか目を閉じて考え込むような仕草をする坂柳。
何秒ほど経っただろうか、綺麗な瞳がぱっと開き、坂柳の可愛らしい口からはっきりと発せられた。
「そ、そうです！　よく私の考えに気づきましたね立花くん！」
「自分でも驚いているよ。天才の考えは凡人には理解できない」
「そうでしょう！　何せ私は天才ですから！」
吹っ切れたかのように自身を賞賛する坂柳。
「あんた、マジで言ってるのっ!?」
「坂柳、本当かよっ!?」

坂柳に考えを聞かされていなかったようで、神室と橋本が坂柳に詰め寄っている。
「え、ええ……。ほ、本当ですよ……」
坂柳の答えを聞いて唖然とする手下二人。
鬼頭は坂柳の狙いに気づいていたのか、表情が一切変わらない。
やはりあいつは他の二人とは実力も忠誠心も違うようだ。
「天才すぎるリーダーにつくのも考え物だな。それじゃ俺はそろそろ帰るよ」
「え、ええ……。お、お気をつけて……」
「坂柳たちもな」
俺はＡクラスの生徒四人を残して、我がＢクラスの教室を後にした。
端末を確認したところ、幸村と池から安否確認のＬＩＮＥが来ていた。
「立花、無事に帰還せり」
俺は若干震え続けている右手で、何とか二人に返信して帰路についた。

２４話

坂柳と再び接触した翌日、契約書を幸村と松下にチェックしてもらい、『双方の合意がない限り契約を解除することはできない』という文言を付け加え、ガチゴリラ先生立会いの下、俺は白い悪魔と契約を交わした。

ちなみに前金である１０万ポイントは、何かトラブルが起きた時の対処用として俺が管理することになった。

心配性の俺なら無駄遣いはしないだろう、というクラスの総評だ。

池や山内あたりがポイントを寄越せと要求してくるかと思ったが、彼らも少しは成長したようだ。

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

俺の部屋で期末テストに向けた勉強中の軽井沢が不安そうな顔つきで訊いてくる。

「大丈夫だろ。契約書の内容も問題ない」

「そうだけど……。あたし、立花くんが退学とかぜったい嫌だからね」

「俺も嫌だよ」

高度育成高校を退学になったら、地元の高校に再入学することになる。

つまり中学の後輩たちと同級生になってしまう。

そんなの恥ずかしすぎて死んでしまう。

「もし立花くんが退学になったら、あたしもこの学校やめるから」

「……は？」

「だからぜったい退学にならないでね」

「なんて脅し文句だ……」

軽井沢には壮絶ないじめを受けた辛い過去がある。

彼女も退学することになれば俺と同じように地元に戻ることは間違いない。

つまり自身を虐めていたやつらと再会する可能性が高い。

そんなことになれば、冗談じゃなく本気で軽井沢は自殺してしまうかもしれない。

「約束だからね」
軽井沢の目には強い意志が宿っていた。
本気だ。
俺が退学になれば、軽井沢も本当に退学するつもりだ。
しかし、俺が卒業まで退学にならないという保証はない。これは俺だけではなく、他の生徒も同じだ。
なので心配性な俺は念のため保険をかけた。
「わかった。けど、万が一退学することになったら、俺と一緒に岩手に来るか？」
「……え？」
「よかったら住み込みで働いて、定時制に通うのもありだし」
「い、一緒にって……」
軽井沢を退学になっても地元に帰らせない方法はこれしかない。
人情に熱いうちの母親なら快く受け入れてくれるだろう。
「か、考えておく……」
もしかしたらプロポーズと勘違いさせてしまったかもしれない。
その証拠に軽井沢の顔は真っ赤である。
そんな彼女の反応を見て、俺も自分の顔が熱くなっているのがわかった。
「そろそろ夕食作るねっ……！」
その日の夕食はいつもより少しだけ豪勢だった。

＊＊＊

期末テストが終わった。
俺たちＢクラスは勉強会のおかげもあり、クラス平均６０点以上という成績を残した。もちろん退学者はゼロだ。
ちなみに、俺は平均９２点で学年１１位、松下は平均９４点で８位、幸村は平均９９点で一之瀬と同率で２位、堀北は平均９６点で５位だった。
なお、堀北が幸村に負け惜しみをしていたのは言っていたのは言う

までもないだろう。
　また、学力では劣等生にあたる軽井沢は平均７１点、須藤は５９点、池は６３点と全員好成績を叩きだした。
　期末テストを終えた俺たちはサバイバル合宿に向けて、身体能力強化（フィジカル）トレーニングを始めた。
　参加者は高円寺以外の男子全員、女子は体力に自信がある堀北と小野寺の二人だ。
　自由参加なのに多くの生徒が参加してくれたのは嬉しい誤算だった。
　ちなみに、メニューは以下の通りだ。
・二時間耐久走
・体幹トレーニング
・ウエイトトレーニング
・スプリント走
　なお、部活動に参加している生徒及び運動が苦手な生徒はフルにこなすのは厳しいので、メニューの半分をこなすよう目標を設定した。
　トレーニングは地獄と言っても過言ではなかった。
　基本的に午前中に実施するので、トレーニング後にケヤキモールにあるフードコートで昼食を取るのだが、ほとんどの生徒がトイレで吐いている。
　それでも脱落者が出なかったのは、サバイバル合宿に不安を抱いているからだろう。
　終業式を終えても情報がまったく与えられないので、退学に対する恐怖は日々増していく。
　他のクラスの生徒たちはバカンス旅行に浮かれていたようだが、愚か者の極みである。
　みな地獄のトレーニングには徐々に慣れていったが、雰囲気は徐々に重たくなっていった。
　そこで松下が動いた。
　松下の提案により、夏休みに入ってから女子たちがレモンの蜂蜜漬けを差し入れてくれるようになった。

そのおかげで、一部を除いた参加者たちのモチベーションが上がり、雰囲気も見る見るうちに明るくなっていった。
「はぁはぁ……きよ、今日もメニューを半分もこなせなかったのね幸村くん……」
息を切らした堀北が幸村を煽る。
これはいつもの光景だ。
定期テストで負けてしまったので、運動でマウントを取りに行く哀れな美少女の図である。
「う、うるさい……っ！　ぜぇぜぇ……」
「ふふふ、その調子じゃサバイバル合宿では足手まとい確定ね。……うぷっ！」
吐きそうなのに、それでも堀北は幸村を煽り続ける。
テストで負けたのがそうとう悔しかったのだろう。
「おぇぇぇぇぇっ……!!」
「うわぁっ!?」
堀北が豪快にリバースしてしまった。
美少女のゲロをもろに喰らい、幸村の顔面が一瞬で吐瀉物塗れになってしまった。
「堀北が吐いた！」
「マジかよ!?」
「幸村大丈夫か!?」
「そこは堀北を心配するべきじゃね？」
「裏山でござる」
どうやら博士は歪んだ性癖をお持ちのようだ。
綾小路を含めた三人でちょくちょくアニメを観る仲だが、少し距離を置いた方がいいかもしれない。
「ふ、ふざけるなよ堀北ぁ……」
体力の限界だったのか、幸村は憤怒しながら気を失ってしまった。
「……仕方ない。幸村は俺が連れて帰ろう」
「それじゃ堀北はオレが連れて帰る」
いつの間にか堀北も気を失っていた。

二人揃って吐瀉物の溜池に顔面を突っ込んでおり、これ以上ないほど無様な格好になっている。
「悪いな綾小路」
「気にするな」
翌日、さすがの堀北も罪悪感を感じていたようで、幸村に謝罪をしていた。
幸村は謝罪を受け入れ一件落着かと思ったが、堀北の体力マウントはトレーニング最終日まで続くのであった。
二週間近く続いた身体能力（フィジカル）強化トレーニングは体力以外にも大きな成果をあげた。
肥満体だった博士は１０キロ近く体重が減り、池は身長が3センチも伸びたようだ。
一番大きく変わったのは沖谷だった。
中性的な顔立ちで女子の玩具だった彼だが、日々引き締まっていく身体を見て自信を得たのか、一人称が僕から俺に変わった。
それだけならよかったのだが、変に自信がついてしまったようで、自分を玩具扱いしていた女子たちに毒舌を吐くようになった。
「沖谷くん、腹筋割れてるじゃん。ウケルｗ」
「うるせえよブス！」
「……え？」
「気安く触んじゃねえよ」
「ご、ごめんなさい……」
沖谷に暴言を吐かれたのは森だ。
俺はあまり絡んだことはないが、軽井沢とはそこそこ仲が良い女子である。
「いいからさっさとレモンの蜂蜜漬け寄越せ」
「は、はひっ！　今すぐっ！」
おかしい。
暴言を吐かれてるのに、なぜか森は嬉しそうだ。
「なあ軽井沢」
「なに？」

「森の様子がおかしいんだが」
「あれがあの子の本性だから」
「……え？」
俺の汗をタオルで拭きながらさらっと言う軽井沢。
なぜ軽井沢に拭いてもらってるかというと、両手が痺れてタオルが持てないからだ。
トレーニングは三勤一休のペースで行っており、今日は三日目なので心身ともに疲労がＭＡＸなのである。
「本性とは？」
「森さんってドＭらしいよ」
「そ、そうなんだ……」
「なんかオラオラ系の人が好きなんだって」
「へ、へぇ……」
知りたくなかったなその情報。
「沖谷くん、食べさせてあげようか……？」
「うるせえ。どっかいけや」
「は、はいっ♡」
どうやら軽井沢の情報は本当のようだ。
それにしても沖谷変わりすぎじゃないか。
これならトレーニングに参加させない方がよかったかも……。
「立花くんもレモン食べる？」
「食べたい」
「じゃあ食べさせてあげる」
「いや、さすがにそれは恥ずかしいので……」
「いいから食べるっ！」
「むぐっ!?」
無理やりレモンを口に突っ込まれてしまった。
俺たちの様子を見て、佐倉とみーちゃんが顔を赤くしている。きっと幸村に同じことをしたいのだろう。
しかし、二人とも軽井沢以上の恥ずかしがり屋なので、あーんを実行する勇気はなさそうだ。

「おろおろっ……！」
その前に、幸村がゲロを吐いているので近づくのも大変そうだ……。

＊＊＊

時は少し遡り七月下旬、俺は椎名ひよりと喫茶店に来ていた。
夏休み前に買い物に付き合うよう誘われており、お目当ての新刊を購入した帰りに喫茶店に寄った次第である。
お店は落ち着いた雰囲気で読書しやすいのか、店内には本の世界に没頭する客がちらほらいる。
「立花くんが教えてくれた『古典部シリーズ』ですが面白かったです」
「もう全巻読んだのか？」
「はい」
以前、この文学少女を遠ざけるために猟奇的な作品を好んでいると嘘をついたら余計に懐かれてしまい、次々に猟奇的な小説を求めてくるようになったので、俺は好みの作品をライト文芸にシフトチェンジした。
『古典部シリーズ』は博士に勧められてアニメを観ていたので、キャラクターのイメージがしやすく、非常に読みやすかった。
「アニメもお勧めだぞ」
「アニメ化もされているのですね。今度レンタルショップで借ります」
「ああ」
「立花くんの方はどうですか？」
「うーん、俺には難しかった」
俺が椎名からお勧めされたのはガルシア＝マルケスの『百年の孤独』だ。
ノーベル文学賞受賞作で、世界傑作文学１００にも選ばれた名作だが、読書初心者の俺には難しすぎた。
「そうでしたか」

「椎名は面白いと思ったんだろ？」
「はい。ただ時代背景が異なれば異なるほど、読み解くには苦労することはあります」
「だから名作でも昔のは難しいのか」
「そうですね。実際、過去の名作を手に取る読者の数は減少しているようです」
「現代人は時間ない人が多いからな」
「ええ。ですが、立花くんは覚悟と忍耐がある人だと思いますので大丈夫です」
「あ、そう……」
なぜか椎名に高評価な俺……。
彼女に覚悟と忍耐があるところなんて見せたことないと思うのだが……。
「まあ、頑張って読んでみるよ。幸い時間はあるから」
「はい！」
普段は落ち着いている椎名だが、本の話になると年相応な女子に見える。
彼女と連絡先を交換してから二ヶ月経つが、今のところハニートラップを仕掛ける様子はない。
今日は初めて椎名の私服姿を見たが、コーデも清楚系で、エッチな感じはしない。強いて言えば、可愛らしいシュシュで後ろ髪をまとめており、うなじを全開にしているところがエロく感じるくらいだ。
「それじゃ本でも読みましょうか」
「そうだな」
椎名は鞄から本日入手した新刊を取り出した。
俺も図書室から借りた文庫本を鞄から取り出し、創作の世界に旅立った。
本を読み終え、時間を確認したところ、来店してから二時間が経っていた。
思ったより長居してしまったようだ。
椎名はすでに読み終えてあり、美味しそうにコーヒーを味わってい

た。
「待たせて悪かった。そろそろ帰るか」
「そうですね。あの……」
「ん？」
「また会ってくれますか？」
立ち上がる瞬間、椎名が不安げに訊ねた。
「私、立花くんしか友達がいないんです。だから……」
「俺でよければ」
「……っ。あ、ありがとうございます……！」
櫛田の情報によると確かに椎名には親しい友人はいないとのことだった。
Dクラスは不良ばかりなので、椎名のような文学少女は浮いてしまうのかもしれない。
もちろん、ハニートラップを仕掛けてくる可能性は否めないので、警戒を解くつもりはない。
ただ、椎名のおかげで数多くの本に出会えたことは確かなので、そのお礼としてたまに出かけるくらいなら付き合ってもいいとは思っている。

＊＊＊

八月某日、とうとうサバイバル合宿に出発する日を迎えた。
俺たちBクラス（高円寺以外）は集合時間の一時間前に教室に集合していた。
「とうとうこの日が来たね」
教壇に立つ平田がみんなに言う。
「僕たちはこれ以上ないほど入念な準備をしてきた。サバイバル合宿がどんなに過酷なものでも、僕たちなら乗り越えられるはずだよ」
クラスのリーダーの言葉に、みんなの士気が上がっていく。
地獄のトレーニングに参加していた生徒たちのコンディションが心配だったが、三日間完全休養日にしたので、体調は問題なさそうだ。

「池くん、道具の準備は大丈夫かな？」
「もちろんだぜ」
池は小学生の頃、ボーイスカウトに似たサークルに参加していたので、サバイバル道具の調達を担当している。
池の回答を聞いた平田は満足そうに頷いた。
「僕はこのサバイバル合宿の結果によってはＡクラスになることも可能だと思っている」
Ａクラスという言葉に、みんなの雰囲気がピリピリしていくのがわかった。
「よし、みんな行こう！」
平田の言葉を合図に、机の上に置いていた麦わら帽子をかぶり、俺たちは教室を後にした。

3巻
25話

「さすが豪華客船だ。揺れがまったく感じられない」
豪華客船によるクルージングの旅が始まった。
俺たちが乗り込んだ客船は外観はいうに及ばず、施設も充実している。一流の有名レストランから演劇が楽しめるシアター、国内最大手のトレーニングジムや高級スパまで完備されている。
もし個人で旅行しようと思ったら、何十万も費用がかかるだろう。
このバカンス旅行は二週間を予定しており、最初の一週間は無人島のペンションで夏を満喫し、残りの一週間は客船内での宿泊という流れだ。
もちろん俺たちBクラスは先生の説明をまったく信じていない。
恐らく最初の一週間は無人島でサバイバル生活、残りの一週間は休息を挟んで、何かしらの特別試験を実施するつもりだろう。
そのため、俺たちは各々サバイバル合宿に向けて、心身ともに整えていた。
プールで水中ウォーキングをする者。
トレーニングジムで筋トレをする者。
自室で体力を温存する者。
彼氏と言っても過言ではない男子といちゃつく佐藤。
サバイバル合宿に向けて、Bクラスの準備は万端だ。
ちなみに俺は軽井沢、松下、篠原、平田、沖谷とヨガと瞑想に励んでいる。
豪華客船の施設を楽しんでいない俺たちBクラスは他のクラスから奇異の目で見られていた。
一部の生徒はそんな視線を気にしているようだが、俺は他のクラスがバカンス旅行であることをまったく疑っていないことに安堵した。
Bクラス以外にバカンス旅行でないことに気づいているのは坂柳派閥の生徒だけだろう。

「けっこうきついこれ……」
「だよね……」
俺たちが習っているのは初心者向けだが、あまり運動をしない軽井沢や篠原にとってはきついようだ。
一方、同じ帰宅部である松下は涼しい顔で体勢を維持している。
「松下はきつくないんだな」
「私は定期的にやってるから」
「運動嫌いって言ってなかったっけ？」
「ヨガはあまり疲れないし、何より短時間で済むからね」
「なるほど」
松下も体形維持のためそれなりに努力していたらしい。
「立花くん」
「なんだ？」
「そんなに私のおへそが見たいの？」
「……っ」
先ほどからシャツが捲れて、松下の可愛らしいおへそがちらちら見えていたので、ばれないようにこっそり鑑賞していたのだがばれていたようだ……。
「……すみません」
「別に減るもんじゃないから見ててもいいよ」
「いいのっ!?」
「だめっ！」
「うわっ!?」
軽井沢に思いっきり押されて、転倒してしまった。
「なにするんだよ！」
「立花くんがエッチだからでしょ！」
「本人の許可は取ってある！」
「それでもだめ！」
「うぐっ……」
恐らく軽井沢は松下のおへそというより、松下に鼻の舌を伸ばしている俺が気に入らなかったのだろう。

だがこれくらい許して欲しい。
こっちはサバイバル合宿に向けて地獄のトレーニングを積んできたのだ。
他のクラスの生徒がデートしたり、大人の階段を登ったりしている間も、必死に頑張ってきたのだ。
「ふふふ、それじゃ軽井沢さんのおへそ見せてあげれば？」
「うぇっ!?」
松下の提案に、顔を真っ赤にして奇声をあげる軽井沢。
「それある！」
「ないわよ！」
秒で却下されてしまった。
軽井沢もスレンダーで、いいおへそをしていると思うんだが。
「ははは、もう一時間たったし、そろそろ部屋に戻ろうか」
平田に言われ、俺たちはクールダウンをしてから各々の部屋に戻っていった。
無人島につくまであと一時間ほどかかるようなので、シャワーを浴びても少しはゆっくりできるはずだ。
『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まりください。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』
そんなアナウンスが流れたのは、ヨガを終えてたからちょうど一時間が経った頃だ。
もちろん、俺たちは無人島を観察するために、アナウンスが流れる１０分前にはデッキに集まっていた。
十二分に観察した俺たちは他のクラスの生徒が来るのを見計らってデッキから退散することにした。
部屋に戻る道中、Ａクラスの生徒に「お前たちがＢクラスになったのは詐欺だ。いかさましやがって」と難癖をつけられた。それだけならよかったのだが、俺や軽井沢などに肩をぶつけてきたので、文句を言おうとしたところ松下に止められてしまった。
松下に文句を言おうとしたところ、Ａクラスの生徒に天罰が下っ

た。
　船酔いしていた幸村に肩をぶつけた瞬間、思いっきりゲロを浴びてしまったのである。
　他人が吐いてるのを見ると、自身も吐き気を催してしまうと聞いたことがある。
　同じく船酔いをしていたのか、堀北が海に向かって勢いよくリバースしていた。
　結局、二人ともそのままダウンしてしまい、二人揃って下船するまで星乃宮先生のところで安静することになってしまった。
「さっきの男子うざかったわね」
　なぜか自室でなく俺の部屋にいる軽井沢がしかめっ面で言う。
「確か弥彦だっけ？」
「うん」
「だな。怪我してないか？」
「大丈夫だってば。軽く肩をぶつけられたくらいだし」
「……そうだけど」
　男子ならまだしも、女子にぶつかってくるなんて頭がおかしいんじゃないか。
　だから幸村のゲロを浴びることになるのだ。
「それより、弥彦って葛城くんの右腕らしいよ」
「葛城の右腕……」
　葛城はあの坂柳と派閥争いをできるくらい優秀な生徒だ。
　そんな生徒の右腕があんな馬鹿そうな男子とは信じがたい。
　……いや、愚者を側近にして、俺たちを油断させる作戦かもしれない。
　あの弥彦の馬鹿そうな言動も演技かもしれない。
「もし演技なら大したもんだな」
「演技？」
「何でもない。それより、そろそろ部屋に戻った方がいいんじゃないか？」
「じゃあ部屋まで送ってって」

「わかった」
「いいのっ!?」
「なんで驚いてるんだよ。軽井沢が言ったんだろ」
「そうだけど。面倒くさくないのかなって」
俺の部屋から軽井沢の部屋までは歩いて二分もかからない。
しかし、この豪華客船には一年全員が乗船しているので、その二分で軽井沢が危険な目にあう可能性もゼロではない。
軽井沢もそれをわかっているのか、乗船してからは俺のそばから離れないようにしている。
本人が用心深くなったのは有難い。守る側も守りやすくなる。
「いいから行くぞ」
「……うん」
軽井沢を部屋まで送っていったが、なぜかすぐに部屋から出てきてしまった。
理由を訊いたところ、佐藤と綾小路がベッドでいちゃついてたらしい。
結局、軽井沢は下船する直前まで俺の部屋にいることになった。

＊＊＊

下船はAクラスの生徒から順番に行われる。
五分ほどでBクラスの出番になり下船しようとしたところ、なぜか先生方に止められてしまった。
「立花、麦わら帽子は置いていけ」
「なぜですか茶柱先生?」
「私物は持ち込み禁止とアナウンスが流れただろう」
「この麦わら帽子はクラスのみんなでポイントを出し合い購入したものなので私物ではありません」
「ぬっ」
「それに……この後無人島で一週間も過ごすんです。熱中症対策に麦わら帽子は必需品でしょう?」

これから一週間俺たちは炎天下で暮らすことになる。太陽は容赦なく俺たちに紫外線と暑さを与えてくる。それを少しでもしのぐために麦わら帽子は欠かせない。

「……いいから置いていくんだ」

「つまり先生方は俺たちが熱中症になってもいいと言いたいんですかっ!?」

「そんなことは言ってないだろう!」

「落ち着いてください先生。よく考えてくださいよ。あの甲子園でさえ試合の開始時間を遅くして熱中症対策をしてるんですよ。麦わら帽子を置いていくなんて正気ですか?」

「うぐっ……少し待ってろ」

そう言うと、茶柱先生はAクラスの担任である真嶋先生の下に向かった。

恐らく麦わら帽子の持ち込みを許可するか相談しているのだろう。だめもとで駄々をこねてみたが、思ったより効果はあったようだ。少し経ってから他のクラスの担任も集まり、担任全員で話し合うようになった。

みんな困った顔をしているが、今まで麦わら帽子を持ち込もうとした生徒はいなかったのだろうか。

「麦わら帽子持ち込めると思う?」

「半々かな。松下は?」

「私はだめだと思う。Bクラスだけ麦わら帽子持ち込んだら平等じゃなくなるから」

「平等か」

先生たちの話し合いは10分近く行われた。

結果、なんと麦わら帽子の持ち込みは許可されることになった。

恐らく事前の準備を評価されたのだろう。

特別試験はこれから始まるんじゃない。

夏休みに入った時点で始まっていたのだ。

しかし、池が用意してくれたサバイバル道具一式は没収されることになってしまった。

すでに俺は下船してしまったので、まだ下船していない平田たちが必死に茶柱先生を説得したが覆ることはなかった。
生徒全員の下船後、まずはクラスごとに点呼が行われた。
点呼後、真嶋先生の口から特別試験が行われることが宣言された。
試験内容は無人島で一週間集団で生活することだった。
あまりに予想通りの内容だったからか、Bクラスから変な笑いが起きた。
ちなみにこのサバイバル合宿は、実際の企業の新人研修でも行われていると真嶋先生が説明した。
炎天下で不要な外出を控えるよう言われているのに、ずいぶん時代遅れの企業もあったものだ。
「先生、俺たちは旅行という名目で連れてこられたのですが、これじゃだまし討ちじゃないでしょうか？」
不服を覚えた他のクラスの生徒が、そんな風にたてついた。すると……
「そうですよ。これじゃ詐欺じゃないですか」
「そうだそうだ！」
「ペンションも嘘だったんですか!?」
「朝のラジオ体操はどうすればいいんですか!?」
Bクラス以外の生徒たちがクラス関係なく文句を言い始めた。
気持ちはわからないでもない。
これが普通の学校だったら、俺も彼らと同じようにクレームをつけていただろう。
「ぎゃあぎゃあうるせえな」
彼らが落ち着くまで瞑想しようとしたところ、夏休み前と別人状態の沖谷が舌打ちをしながら言う。
「この学校がただのバカンス旅行に連れて行ってくれるわけがないだろうが」
「け、けど……っ！」
「お前たちは甘いんだよ」
「うっ……」

「ったく、頭がお花畑で羨ましいぜ。先生、こいつら放っておいて早く説明の続きをしてくださいよ」
「あ、ああ……」
沖谷に促され、真嶋先生は試験の説明を続けた。
この特別試験のテーマは『自由』とのことで、クラスポイントを稼ぐためにサバイバル生活を頑張るのもありだし、試験用に支給されるポイントを使用して娯楽に費やすのもありとのことだ。
ポイントはクラスごとに３００ポイント支給され、購入できるものはマニュアルに載っているらしい。
また、試験中にリタイアした場合は、一人につきマイナス３０ポイントのペナルティが発生する。
ある程度説明が終わると、茶柱先生からマニュアルを手渡された。
ちなみに、マニュアルはデザインが香典返しのカタログギフトみたいだった。
マニュアルには商品だけでなく、追加ルールも記載されていた。
茶柱先生が口頭で説明してくれたスポット、それを認証するためのキーカード、キーカードを使用することができるのはリーダーのみであること、試験最終日に他のクラスのリーダーを言い当てると５０クラスポイントが付与されること、外したらマイナス５０ポイントになることなど、たくさんの内容が記載されている。
「おい、お前らだけ卑怯だぞ！」
リーダーを決めるのは点呼まで時間あるとのことで、さっそくベースキャンプを決めようと出発しようとしたところ、Ａクラスの弥彦からやっかみを受けてしまった。
「何が卑怯なんだよ？」
「麦わら帽子のことだよ！」
「これは先生たちから持ち込み許可をもらってるぞ」
「許可なんか知らねえよ！」
しつこいなこいつ。
飼い主の葛城を探したら見当たらない。
「葛城なら小便だぜ」

俺が葛城を探してるがわかったのか、坂柳派閥の橋本がやって来た。
「そうか。それよりこいつをどうにかしてくんない？」
「うちの弥彦が悪いな」
「なにがうちの弥彦だ！　俺は葛城さんの右腕だぞ！」
「じゃあ葛城の右腕の弥彦くん」
「なんだよ！」
「なんでお前らは麦わら帽子を用意しなかったんだ？」
「……は？」
俺の唐突な質問に、きょとんとした顔になる弥彦。
「俺たちはバカンス旅行の話を聞いてから、サバイバル合宿が行われると予想していた。だから身体も鍛えたし、熱中症対策で麦わら帽子も用意した」
「身体を鍛えていただと……？」
「そういえばケヤキモールのトイレでＢクラスの男子が吐いてるのを見かけたって掲示板で書き込まれてたな」
マジか。書き込んだの誰だよ恥ずかしい。
「そうだ。お前たちが夏休みを満喫している間に、俺たちは身体をいじめ抜いた」
「な、なんでそこまで……」
「そんなのサバイバル合宿を乗り越えるために決まってるだろうが」
「……っ」
言葉が出ないのか、弥彦は口をパクパクさせ始めた。
「立花くん、そろそろ行こうよ」
軽井沢が促すように俺の右腕を引っ張る。
「そうだな。それじゃまたな」
「おう」
橋本に別れを告げて、出発しだしたクラスメイトの後を追うとしたが、呆然とする弥彦に一言物申すことにした。
「弥彦」
「な、なんだよ……？」

「さっき、なんでそこまでするんだって言ってただろ？」
「そ、それがなんだよ……」
「俺はアレでも準備が足りないと思っている」
「……はぁっ!?」
「トレーニングをしたのは一ヶ月前からだし、期末テストで休んでいた期間もあったからな」
「一ヶ月前って……」
「やり過ぎだと思うか？　もし、そう思ったのならお前は近いうちに退学するぞ」
「なっ……!?」
「最善の準備をする人間しか、高度育成高校（地獄の監獄）じゃ生き残れないぞ」
「う……くぅ……」
ガクッと肩を落とす弥彦を背にして俺と軽井沢はその場を後にした。
「なんで、あそこまで言ったわけ？」
クラスメイトのみんなに追いついたころ、隣を歩く軽井沢が首を傾げながら訊いてきた。
「坂柳に葛城を潰すよう依頼されただろ？」
「うん」
「だから、まずは右腕の弥彦から潰そうと思って」
「なるほどね」
軽井沢には言わないが、それ以外にも弥彦を追い詰めた理由がある。
それは軽井沢に手を出したからだ。
肩をぶつけただけとは言え、女子に暴力を振るうのは許せない。
ましてや、相手が軽井沢なんて言語道断である。
「な、なに……あたしの顔をガン見してんのよ……」
「あ、悪い……」
どうやら俺は自分が思っている以上に、このギャルを大切に思っているようだ。

＊＊＊

一年が無人島に上陸したころ、一人の天才が自室で頭を抱えていた。

「まずは一日でも早くＤクラスに落ちなくては……」

天才の名前は坂柳有栖。

坂柳には先天性の障がいがあるため、バカンス旅行（サバイバル合宿）参加の許可が医師から下りず、学年で一人だけ学校に残ることになってしまったのだ。

そんな暇を持て余してしまう状況にもかかわらず、彼女の脳みそは常にフル回転していた。

原因はＡクラスで入学したにもかかわらず、ＤクラスまでＡクラスに返り咲く必要ができたからだ。

「まず弥彦くんが停学するよう仕向けるべきでしょうか……」

彼女は今まで勝利するために、その優れた頭脳を活用していた。

そんな彼女が、敗北するために思考を巡らせている。

「うーん……」

Ａクラスの現在のクラスポイントは１０００ポイントを超えており、Ｂクラスとは２００ポイント以上の差がある。

そのため、一気にクラスポイントを減らす必要がある。

悠長に構えていたら、Ｄクラスに落ちるのが進級してからになってしまう可能性があるのだ。

「……また明日考えましょう」

坂柳は思考を放棄した。

「まだ二学期まで一ヶ月ありますし」

まるで夏休みの宿題を後回しにする子供のように。

慣れないことに疲れたのか、坂柳はベッドに横になるとそのまま眠ってしまった。

だが、彼女の心労が軽減されることはなかった。

なぜなら――――夢にあの男が出てきたからだ。

坂柳有栖を追い込んだ張本人。

立花恭平。

その男に質問攻めにあう夢を坂柳は見てしまった。

その悪夢がDクラスに落ちるまで続くことになろうとは、その時の坂柳は思いもしなかった。

２６話

ベースキャンプ地を探すため森の中に入った俺たちＢクラスはいったん日陰で休むことにした。

地獄のフィジカルトレーニングに参加した女子は堀北と小野寺のみだったので、他の女子たちに配慮した次第である。

１０分ほど休憩してから男子は五人四組に分かれてベースキャンプ探索、女子はこの場に残り必要なアイテムのリストアップをしてもらうことになった。

「しかし暑いでござるな……」

すっかりスリムになった博士がだるそうに呟いた。

「今日は最高気温３６度だったかな」

「おっふ……」

下船前にテレビで見た情報を伝えると、博士はげんなりとした。

「立花は岩手出身だよな。あっちはここまで暑くないのか？」

隣りを歩く三宅が訊ねる。

三宅は中間や期末テストで勉強を教えたこともあり、それなりに話せる仲になった男子だ。

長谷部とよく二人でいるが、気が合うだけで付き合ってはいないらしい。

「岩手も暑いぞ。ただ、東京の方がジメジメしてるかな」

「なるほど」

「三宅は東京出身だっけ？」

「ああ」

「うちのクラスって東京の人多いよな。博士、綾小路、本堂もそうだろ？」

「そうでござる」

「だな」

「俺は東京でも八王子だけどな……」

本堂は２３区以外出身であることがコンプレックスらしい。

そういえば足立区出身の篠原に馬鹿にされてたような気がする。

「綾小路は東京のどこなんだ?」
「……多摩市だ」
「友よ」
満面の笑みで綾小路の右手を両手で握る本堂。
どうやら同志を見つけて歓喜で震えてるようだ。
対して綾小路は出身地に興味がないようで、いつもの無表情のままだ。
佐藤といちゃついてるときも、あの顔のままなのだろうか。
「あとで佐藤に訊いてみるか」
佐藤は煽てながら質問すると、なんでも答えてくれる。
「お喋りはそこまでにして、探索に集中しようぜ」
「そうだな」
三宅の一言で俺たちは雑談を止めて、周りを見渡しながら森の中を突き進んだ。

＊＊＊

ベースキャンプ地は池のグループが発見した川が近くにあるスポットになった。
他の候補として洞窟があったが、閉塞的な場所より、水浴びなどリフレッシュしやすい場所が選ばれた。
ベースキャンプが決まったら次にリーダー決めだ。
平田、櫛田のような他クラスからも名前が知られている生徒は論外なので、候補として幸村、軽井沢、綾小路の名前があがり、多数決の結果、幸村がリーダーに任命されることになった。
理由としては下船前に豪快に嘔吐したので、まさか船酔いしてリバースした生徒がリーダーになるとはだれも思わないだろう、とのことだ。
幸村がリーダーに選ばれたことにリバースメイトである堀北だけが納得していなかったが、佐藤と篠原がなだめてくれたおかげで渋々了承してくれたようだ。

その後、テントを手分けして設置し終えると、女子がリストアップしたアイテムをクラス全員で選別することにした。

まず衛生面を考えて仮設トイレを購入することが決定した。山内が簡易トイレで我慢すればいいと反対したが、簡易トイレだけでは衛生面だけでなくストレスも溜まる。さらに家族でもない男女が同じトイレを使用するのに抵抗感がある生徒がいることも考え、結局２つ購入することになった。

あとはテント、シャワールーム、懐中電灯など必要最小限なものを購入し、それ以外のものは都度相談ということになった。

「さて、焚火するために木の枝でも拾いに行くか」

懐中電灯だけで夜を過ごすのは怖いだろうから、何かしら明かりになるものが必要だろう。

枝を集めたら池に渡そう。火を灯すのは彼に任せれば大丈夫なはずだ。

「あたしも行く」

「私も行くよ」

「悪いな二人とも」

軽井沢、松下の二人が同行を申し出てくれた。

綾小路にも声をかけようとしたが、佐藤といちゃついているのでやめた。

俺たち三人は迷わないよう、ベースキャンプから遠く離れない場所で枝を集めることにした。

「佐藤さんと綾小路くんってまだ付き合ってないのかな？」

軽井沢が思いついたように質問しだした。

「私はまだ報告受けてないよ」

「松下さんも知らないか。立花くんは綾小路くんから何か聞いてないの？」

「特に」

「そっか」

「軽井沢は二人が付き合ってると疑ってるのか？」

「うん。だってベッドでいちゃついてたし」

「あー……」
「そうなの？」
「うん。下船の一時間前に放送があったじゃん？」
「あったね」
「そのあとに部屋に戻ったら二人がいちゃついてて。それで気まずいから立花くんの部屋に避難したわけ」
「それはお気の毒様だね」
「でしょ。てかあれで付き合ってないとかありえなくない？」
「確かに。まあ付き合ってなくても友達以上であることは間違いないよね」
「夜になったら問い詰めようか？」
「いいねそれ」
「ガールズトークってやつか」
「尋問に近いけどね」
不敵な笑みを浮かべる松下。
なんか怖いからその顔やめて。
１０分後。ある程度枝を拾い集めた俺たちはベースキャンプに戻ることにした。
その帰り道で、大木に背中を預けるようにして座り込んだ一人の少女を発見した。
その少女は俺たちの存在に気づくと、一度目を向けた後興味なさそうに視線を外した。
「誰だあれ？」
顔を知らないので他のクラスであることは確実だ。
「確かＤクラスの伊吹さんだったかな」
「松下の知り合いか？」
「まさか。龍園くんの手下みたいな感じだから知ってるだけ」
「龍園の手下……」
龍園という名前にビビったのか、軽井沢がさっと俺の背中に隠れた。
「顔が赤く腫れてるね」

「誰かにぶたれたのかもな」
だいぶ腫れているので、かなり強い力でぶたれたのは明らかだった。
「ぶたれたって……」
暴力が苦手な軽井沢が震えだし、左腕にギュッと抱き着いてきた。
「どうする立花くん？」
「そうだな」
松下に問われ、軽井沢の柔らかいものを感じながら思考する。
「……無視する」
「無視っ!?」
驚愕する軽井沢。
俺の答えがわかっていたのか、松下は特に反応しない。
「じゃあ帰るか」
俺たちはその少女がまるでいないかのようにスルーしてその場を通り過ぎようとした瞬間だった。
「ちょっと待ちなさいよっ！」
その少女から声をかけられてしまった。
どうやら俺たちから声をかけられるのを期待していたらしい。
「待たない」
だが彼女はDクラスだ。
スパイの可能性も考えられるので、ここはスルーするのが正解だ。
「だから待ちなさいってばっ！」
その少女は鼻息を荒くしながら、俺の空いてる右腕を掴んだ。
「……何か用か？」
「なんでスルーするのよっ!?」
「だって敵だし」
「うぐっ……。て、敵だけど怪我してる女子がいたら心配するのが普通でしょうがっ！」
「この学校は普通じゃないから」
「うぅっ……」
「てか離してくんない？　暴力行為は禁止だぞ」

「暴力じゃないわよっ！　それにそのギャルだって腕掴んでるじゃない！」
「あたしっ!?」
まさか自分に矛先を向けられるとは思わなかった軽井沢が声をあげた。
「軽井沢はいいんだよ。クラスメイトだし」
「うぐっ……」
さっきからこの子、呻いてばかりじゃないか。
「それよりもう夕方だからベースキャンプに戻れば？」
「……戻れないんだよ」
「迷子か」
迷子の迷子の伊吹ちゃん。あなたのベースキャンプはどこですか。
「迷子じゃないしっ！」
「じゃあなんで戻れないんだ？」
「追い出されたのよ」
「龍園くんに？」
ここで松下が俺たちの会話に加わった。
先ほどまではだんまりしていたが、恐らく伊吹を観察していたのだろう。
「……そう」
「理由を訊いてもいいかな？」
「あいつの方針に逆らったら殴られて追い出された。それだけよ」
「そっか」
「龍園に逆らったのかっ!?」
「そ、そうだけど……。急にどうしたのよ……？」
俺の豹変ぶりにたじろぐ伊吹。
「爪は大丈夫かっ!?」
「はぁっ!?」
「龍園は自分に逆らったやつに容赦しない人物と聞いている」
「そうだけど……それが何なのよ？」
「龍園は暴力で屈服させた相手の爪を剥がすのが趣味らしい」

「……は？」
「松下、チェックしてくれ」
「う、うん……」
松下がぽかんとしたままフリーズする伊吹の爪を確認した。
「一枚も？がれてないよ」
「……そうか」
これで伊吹がスパイの可能性が一気に高まった。
もちろん、龍園が女子相手だから軽めの制裁を加えたことも考えられるが、クラスの安全のために伊吹を連れて帰るわけにはいかない。
「爪が剥がれてないなら大丈夫だな。一人で大変だろうけど頑張れよ」
「あ、ありがとう……って違うでしょうがっ！」
軽井沢に続いて、伊吹までツッコミし始めた。
「なにが違うんだ？」
「怪我してるんだから保護しなさいよっ！」
「嫌だよ。てか追い出されたならリタイアして船に帰ればいいじゃん」
「リタイアはあたしのプライドが許さないっ！」
「お前のプライドなんてどうでもいいんだけど」
「うぐっ……」
この女、面倒くさすぎる。タイプは違うが堀北並みの面倒くささだ。
「まあまあ二人とも」
にらみ合う俺たちを宥めるように松下が仲裁に入った。
「とりあえず平田くんに相談したら？」
「平田に？」
「うん。平田くんの性格からして、伊吹さんのことは放っておけないと思うんだよね」
「うーん……」
なぜか松下は伊吹を保護する方針のようだ。
Dクラスの生徒を保護してもデメリットしかなさそうだが松下の

ことだ。何か考えがあるのだろう。
「まあ平田に相談するくらいなら」
「ありがとう。軽井沢さんもいいかな？」
「あ、あたしは別に……」
口ではそう言いつつも、やはり他クラスの生徒を保護することに抵抗があるのか、腕に抱き着く力が強くなった。
「じゃあ行こうか。伊吹さんもいいよね？」
「いいけど……なんであたしの名前を知ってるわけ？」
「櫛田さんから聞いたことあるから」
「櫛田か。なら納得」
さすがコミュ力お化けの櫛田だ。
こんな面倒くさそうな伊吹とまで知り合いとは恐れ入る。

＊＊＊

枝をかき集めてベースキャンプに戻ってきた俺たち。伊吹は離れたところに腰を下ろして待機してもらっている。
焚火は池に任せて、俺たちはすぐに平田に伊吹を連れてきた理由を説明した。
「なるほど、それはナイス判断だね」
「ナイスなのか？」
「うん。いくら他のクラスだからと言って、怪我してる女子を放っておくなんてできないよ」
「……でもスパイの可能性もあるぞ？」
「そうだね。でも、スポットを更新するときに離れてもらえれば大丈夫じゃないかな」
「うーん……」
それ以外にもカードを見られたり、盗まれる可能性も考えられる。
「立花くんが心配になるのもわかるよ。クラスのことを思ってくれるからこそ、彼女を受け入れたくないんだよね？」
「そうだな」

「その気持ちは凄い嬉しいよ。でも、今回は僕を信じて彼女を受け入れてくれないかな？」
「……わかったよ。平田にそこまで言われたら仕方ない」
「ありがとうっ！」
「おうっ!?」
美少年に感謝のハグをされてしまった。
そっちの気はまったくないが、さすがに抱きしめられるとドキッとしてしまう。
「それじゃ僕は伊吹さんに説明してくるよ。よければ櫛田さんも一緒に来てくれないかな？」
「もちろん」
伊吹の顔見知りである櫛田を連れたって、平田はその場を後にした。
「立花くん、ちょっと」
「なんだ？」
他人に話を聞かれたくないのか、松下に川岸に連れていかれた。
「伊吹さんのことなんだけど」
「伊吹がどうかしたのか？」
「さっき爪が剥がれていないか確認したでしょ？」
「したな」
「実は爪の間に泥が入ってたんだよね」
「泥……？」
「うん。しかも、彼女を発見した大木の根元に地面を掘った跡があったの」
「地面を掘った跡だってっ!?」
「そう。伊吹さんは何かを土に埋めて隠してるのかも」
「そうなると、ますますスパイの可能性が高くなるな」
「だよね」
「なんで、それに気づきながら伊吹を保護するように仕向けたんだ？」
平田に報告すれば、伊吹が保護するのは確定したようなものだ。
「伊吹さんを何かしら利用できると思って」

「スパイを利用だって？」
「そう。方法はこれから考えるとして、立花くんにお願いがあるの」
「伊吹が何を隠したのか確認すればいいんだな」
「うん。一人じゃ大変だろうから、綾小路くんあたり連れて二人でお願い」
「松下は？」
「手が汚れるからパス」
「そうですか……」
確かに松下の性格なら、土堀は嫌がるだろう。
ていうか女子のほとんどは嫌がりそうだ。
佐藤あたりは綾小路がお願いすれば、快く土堀してくれそうだが。
「そんな顔しないでよ。何か見つけたらご褒美あげるから」
「ご褒美とは……？」
「うーん、私とデートとか」
「ただ荷物持ちにされるだけのような気がするんだが」
「あはは、そうかも」
「もう少し勤労意欲が沸くご褒美を所望する」
「それじゃ、水着姿を見せるとかはどうかな？」
「水着姿……」
「前にプールの授業で、黒のビキニが似合いそうだって言ってくれたよね。覚えてる？」
「覚えてるけど」
松下は黒のビキニ、軽井沢は赤のビキニが似合う。
なぜそう思ったのか覚えていないが、俺は二人に素直に想いを打ち明けたことがある。
「実は夏休みに授業では使われていないプールが解放されるんだって。そこで黒のビキニを着てあげる」
「マジで……？」
「うん。それでどうかな？」
「精一杯頑張ります」
「ありがとう」

松下にいいように利用されているような気がするがどうでもいいや。

だって美少女のビキニ姿が見れるんだし。

真夏の素敵イベントに心を躍らせ俺はベースキャンプに戻るのであった。

27話

俺と松下がベースキャンプに戻ると、食料探索チームも帰還したようで、大量の果物が置かれていた。
イチゴのような赤く小さな実がいっぱいくっついたものやミニトマトなどいろんな果物を収穫できたようだ。
それらの果物は池が食べれるものと説明し、半信半疑の生徒たちを納得させるため、池本人と伊吹で毒味をしたところ、問題ない食料であることが証明された。
「なんで私が……」
毒味役を任命されたことに納得がいかない様子の伊吹だが、厄介者であることは自覚しているようで、俺たちに直接文句を言ってくることはなかった。
夕食後、今後の作戦を話そうと数人の生徒を集めた後に平田があることに気づいた。
「高円寺くんは……？」
その問いに答えられる生徒は誰もいなかった。
高円寺はいつの間にかリタイアしていたのだ。
以前からクラスに非協力的だったが、まさか試験まで放棄するとは思わなかった。
「くそっ！　なんで高円寺を監視してなかったんだ俺は……」
これは完全に俺の落ち度だ。
高円寺が特別試験をリタイアするという心配をまったくしていなかった。
これじゃ中間テストの赤点を30点以下と決めつけていた時と同じだ。
地獄のフィジカルトレーニングで体力は上がった。
ミステリー小説を読んだおかげで推理力が向上した。
そのせいで、無自覚に変な自信を持ってしまったんだ。
最悪だ。
これでクラスポイントを30ポイントも失ってしまった。

「立花くん、そんな自分を責めなくても」
平田たちが慰めてくれたが、俺の心が晴れることはなかった。
きっと特別試験で一位にならない限り、俺は自分を責め続けるだろう。
「次の試験では必ずクラスに協力させてやる……」
サバイバル試験の後に、船上で行われるであろう試験で、高円寺にはクラスに役に立ってもらう。
幸い高円寺と交渉するカードを俺は持っている。
待ってろよ高円寺。
次の試験では死ぬほど働いてもらうぜ。
せいぜい今は船上でたった一人のバカンスを楽しみやがれ。

＊＊＊

朝の目覚めはいつもより早かった。
生まれて初めてテントで就寝したが、背中は痛いし、虫が飛ぶ音は気になるし、汗も異常にかいている。
俺は昨晩から続いている心のざわめきをおさめるため、朝一でヨガと瞑想をした。
ヨガと瞑想を終えた後、綾小路を起こして伊吹を発見した場所に向かった。
松下に言われた通り土を掘ってみると、プラスチック製の箱が埋められており、蓋を開けてみるとトランシーバーが入っていた。
恐らく伊吹はトランシーバーを使用して龍園と定期的に連絡を取るつもりなのだろう。
やはり伊吹はスパイだったのだ。
伊吹にばれないよう埋め直そうとしたところ、綾小路がトランシーバーに小便をぶっかけ始めた。
本人はおしっこが我慢できなかったと言ってるが、トランシーバーを壊すためなのは明らかだ。
俺たちはアンモニア臭が漂うトランシーバーに合掌し、丁寧にそれ

らを埋め直したのだった。
ベースキャンプに戻り、すぐに平田と松下に報告した。
クラスメイトに報告するか綾小路を入れて四人で検討したところ、クラスに混乱が生じる可能性が高いため、伊吹がスパイであることは伏せておくことになった。
ただ、俺の心配性が伝染している生徒が多いため、その分伊吹をスパイと疑う生徒も多いはずだ。
平田と綾小路が離れたタイミングで松下が伊吹の鞄からデジカメを発見したと報告があった。
なぜ二人が離れたタイミングで言ってきたのか質問したところ、スパイとはいえ他人の鞄を勝手に漁るのは平田がいい顔をしないからとのことだった。
「立花くんはなんで伊吹さんがデジカメを持ってるんだと思う？」
松下が俺を試すように問う。
「……そうだな、一番可能性が高いのはキーカードを撮影するためだろう」
「それしかないよね」
「どうやら龍園は手下を信用していないようだな」
「だね」
龍園は確実な証拠が欲しいのだろう。
ヤンキーのくせに、やたら慎重な男だ。
朝の点呼を終えて、平田の指示のもと食料確保に向かおうとしたところ、Ｄクラスの生徒がやって来た。
「いやーずいぶん質素な生活をしてんだなＢクラスは。さすが元Ｄクラス」
小宮と近藤である。
二人は手にしていたスナック菓子のポテチを頬張りながら、暑さをしのぐように炭酸水をごくごく飲んでいる。
「お前らふざけんじゃねえよ！」
そんな二人に須藤が食って掛かった。
「ん、んだよっ!?」

「お前らアスリートだろうが！　なんてもん飲食してんだよ！」
「はぁっ!?」
そんな須藤も入学直後はカップラーメンを食していた。
それが今では徹底した食事管理をしており、今朝もフィジカルコンディションを維持するため砂浜で１０キロほど走ってきたらしい。
「確かにアスリートであれはないな」
「だからバスケ下手なんだよ」
「てか肌も荒れてないか？」
「ほんとだ。ニキビがけっこうあるね」
「男子でもお肌に気を使ってほしいよね」
「てか自分を律することもできない男はアウトだね」
「確かに。だから童貞なんだよ」
須藤に続いて、Ｂクラスの生徒から容赦ない口撃が放たれた。
「うぐっ……」
「う、うるせぇよっ……！」
挑発しに来たのに、まさかの反撃を喰らい慌てふためく小宮と近藤。
「りゅ、龍園さんからの伝言だ。夏休みを満喫したかったら今すぐ浜辺に来いってよ。このバカみたいな生活が嫌になる夢の時間を与えてやるってよ」
なるほど。龍園の命令で俺たちを誘いに来たのか。
「夢の時間を与えるってなんでござろうか？」
「危ないクスリでもやってんじゃないか？」
「なるほど。それなら納得でござる」
「だから二人とも肌荒れしてるんだな」
「納得」
「やっぱ不良が多いＤクラスだな」
「クスリやってるなら茶柱先生に報告しておいた方がいいかな」
「だから童貞なんだよ」
さすがに龍園でもクスリはやっていないだろう。
だが絶対ではない。

もしかしたら無人島でたまたま大麻草があって、それをあぶって使用している可能性もある。
「夢の時間って何だろうねみーちゃん？」
「うーん、夢だからディ○ニー系じゃないかな」
「ディ○ニー系？」
「ほらディ○ニーランドって夢の国って言うでしょ。だからディ○ニー映画でも見てるのかも」
「な、なるほど……」
櫛田とみーちゃんがほくほくする会話をしている。
小宮と近藤に多少イラついていた生徒たちも、二人の会話を聞いてほっこりしたようだ。
「わりぃな二人とも。俺の価値観を押し付けてしまったぜ」
「……は？」
「高校の部活動にはいろんな生徒がいる。俺みたいにプロを目指す生徒や、バスケは高校までと割り切ってる生徒、あくまで運動不足解消が目的の生徒などたくさんいるんだよな」
「す、須藤……？」
「だから、これからはお前らが何を食べようが、何を飲もうが、何も文句は言わねえよ」
「……」
「学校に戻ったら一緒に頑張ろうぜ！」
須藤はウインクしながらサムズアップした。
対して小宮と近藤はきょとんとしたままフリーズした。
二人がクラスに戻っていったのは、それから5分後のことだった。
せっかく龍園が誘ってくれたので、俺と松下はDクラスのベースキャンプに向かうことにした。
軽井沢も行きたがっていたが、心配だからDクラスに関わらせないと説明したところ、頬を紅潮させながら納得してくれた。
「す、凄いねこれ……」
その光景を目にしながら、松下が呟いた。
確かにこれは予想していなかったパターンだ。

仮設トイレやシャワーが設置されているのは当然として、日光対策のターフ、バーベキューセット、パラソルセット、スナック菓子にドリンクなど娯楽に必要な設備が揃っていた。

海に目を向けて見ると、水上バイクで遊んでいる生徒もいる。

これは最低でも１５０クラスポイント以上は吐き出しているはずだ。

「Ｄクラスは試験を諦めたってことなのかな？」

「それは龍園本人に訊いてみるか」

松下の問いに答えると、一人の生徒が近づいてきた。

「あ、あの龍園さんが呼んでます……」

その男子生徒は緊張した様子で声をかけてきた。

「なんで声をかけるだけで緊張してるんだ？　美少女がいるからか？」

「褒めてくれてありがとう」

慣れた様子でお礼の言葉を述べる松下。

「あ、いや、それは……」

どうやら図星のようだ。

さすが松下。ほかクラスからも人気があるのは本当だったようだ。

男子生徒は顔を赤くしながら、龍園のところへ案内してくれた。

「よう。こそこそ嗅ぎまわってると思ったらお前たちだったか。俺になにか用か？」

龍園翔。

Ｄクラスのリーダーにして、現代のヤンキーだ。

龍園は水着姿でチェアーに寝そべり、美味しそうにウインナーを食している。

「え？　龍園が俺たちを誘ってくれたんだろ？」

「あん？」

「だって小宮と近藤が、龍園が一緒に遊ぼうって言ってたって」

「……」

「立花くん、二人は『夏を満喫したかったら浜辺に来い」って言ってたんだよ」

「そうだったか」
「ちっ、調子が狂うやつだぜ。石崎、キンキンに冷えた水を持ってこい」
「うすっ！」
龍園はそう言うと、俺たちを挑発するかのように半分ほど残った水を砂へと零して捨てた。
近くで砂のお城を建築していた石崎が慌ててテントの中へと水を取りに行く。
「ま、見ての通り俺たちは夏のバカンスを楽しんでいるのさ」
「つまりDクラスは試験を放棄したってことか？」
「当たり前だ。たかが１００だか２００だかのクラスポイントを拾うために、こんなクソ暑い無人島で試験なんてやってられっか」
「なるほど」
「どうやらお前たちは真面目に試験を受けるようだな。数少ないクラスポイントのために飢えに耐え、暑さと虚しさに耐える。想像するだけで笑えてくるぜ」
俺は龍園の挑発を右から左に受け流しながら、Dクラスの環境を観察し続けた。
見たところ娯楽道具ばかりだが、一つだけ怪しいものがあった。
トランシーバーだ。
やはりこれを使って伊吹と連絡を取り合うつもりなのだ。
「見ろよこの光景を。俺たちはストレスフリーでこの試験を終えるんだぜ」
「うん。ストレスフリーなのはいいことだ」
「そうだね。これもありだね」
「……あん？」
俺と松下の言葉に、龍園は怪訝な表情を見せた。
「Dクラスはヤンキーが多いから根性や忍耐力がないやつばかりのはずだ。そんな連中が一週間もサバイバル生活を続けられるとは思えない。龍園、お前の判断は正しいよ」
恐らく龍園はポイントを使い切ったら、ほとんどの生徒を仮病でリ

タイアさせるつもりだろう。
　最初はスパイだけ残すかと思ったが、トランシーバーの存在が俺の考えを改めた。
　伊吹以外の生徒は全員リタイアしたと思わせて、龍園は無人島を隠れて過ごすつもりだ。
　わざわざ伊吹にデジタルカメラを持たせるくらいだ。そんな龍園が伊吹をリーダーにしたり、他クラスのリーダーを報告させる大役を任せるはずがない。
「そういえば、うちのクラスで伊吹を保護してるんだが」
「……はっ。威勢よく飛び出したと思ったら、あいつは結局他のクラスのやつらに助けを求めたのか。情けない女だぜ」
「ああ。最初はスルーしようかと思ったが、『私を保護しろ』と言い出してまいったよ」
「……」
　ありのままを伝えたところ、龍園の眉間に皺が寄った。
　気持ちはわかるぞ龍園。
　そんなことを言ったら、自分がスパイだって宣言してるようなものだ。
　そんな女をスパイにさせるなんて、Ｄクラスは深刻な人材不足のようだ。
「伊吹はポイントの使い方について龍園と衝突したんだな」
「そう言うことだ、だから軽くお仕置きしてやったのさ」
「女子に手を出すなんてひどい男だ」
「俺は男女平等主義なのさ。もう一人俺に逆らった男子がいたが、そいつも追い出してやったぜ」
　つまり、スパイはもう一人いるってことか。
　あとで一之瀬か神崎、橋本か神室あたりにＤクラスの男子を保護していないか確認するとしよう。
「そっか。二人も反乱分子を出すなんて、思ったより統率が取れていないんだな」
「……なんだと？」

「Dクラスは龍園の独裁政権と聞いていたからな。なんだか肩透かしを食らった気分だ」
「てめぇ、俺に喧嘩を売ってるのか？」
「俺は事実を言ってるだけだ」
ここで龍園が怒りに任せて殴りかかってくれたらラッキーと思ったが、さすがにDクラスの王様もそこまで単細胞じゃないらしい。
「あ、立花くんじゃないですかっ！」
俺と龍園が睨み合ってると、甲高い声が聞こえてきた。
「椎名か？」
「はい、二日ぶりですね。立花くん」
海水浴に興味がなかったのか、椎名はジャージ姿のままだった。てっきり水着かと思ったのに、なんだか肩透かしを食らった気分だ。
なんか、さっき同じことを言ったような……。
「なんだ、ひよりと顔見知りかよ」
「立花くんは私の唯一のお友達です」
「ほう」
龍園は俺と椎名の交遊を把握していなかったようだ。
「なら、こいつをお前にやるよ」
龍園はそう言うと、俺に向かって椎名を思いっきり突き飛ばした。
「きゃっ」
「おわっ」
龍園に突き飛ばされた椎名は、勢いよく俺の胸元に飛び込んできた。
「す、すみません……。龍園くん、いきなりなにをするんですか？」
「怒るなよひより。大事なお友達のところに送ってやったんだぜ」
「そんなの頼んでいません」
珍しく椎名が怒っている。
これは演技なのだろうか。
力技で椎名を抱きしめさせ、いい匂いと柔らかさで俺を堕とすつもりなのか。

もしこれがハニートラップなら、大胆すぎるぜ椎名と龍園。
「その代わりその女を俺に寄越せよ」
「私……？」
「そうだ。松下千秋だろ」
「私のこと知ってるんだ」
「ああ。各クラスの面白そうなやつは全員知ってるぜ」
松下の全身を舐め回すように視線を向ける龍園。
「私は面白くないよ」
「面白いかどうかは俺が決める。どうだ俺と遊ばないか？」
「うーん、遠慮しておくね。私、ヤンキーはタイプじゃないから」
「そうかよ」
「うん。それに私にはこの人がいるから」
松下はそう言うと、俺の左腕に抱き着いてきた。
「なんだお前ら付き合ってるのか？」
「……え？」
龍園の質問に、なぜか椎名が唖然とした。
「付き合ってないよ。でも友達以上の関係なのは間違いないかな」
「ほう」
「立花くん、そろそろ帰ろうか」
「あ、ああ……」
「もう帰っちゃうんですか……？」
踵を返そうとしたところ、椎名が潤んだ瞳で「帰らないで」と訴えてきた。
「いいぜひより。そいつと遊んで来いよ」
「……いいんですか？」
「ああ。そのかわり避妊はしっかりしろよ」
龍園は股間に指を指しながら、注意を促した。
「最低です」
椎名はありったけの侮蔑を込めた目で龍園を睨みつけ、俺たちと一緒に背を向けて歩き出した。
「きゃっ」

その一歩目、椎名が豪快に砂浜にダイブした。
どうやら龍園に言い返したのはいいが、内心怖かったようで、両足が生まれたての小鹿のようにぷるぷる震えていた。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫れす……」
結局まともに歩けない椎名をおんぶし、左腕は松下に抱き着かれたままという、青少年にはたまらない状態でその場を後にした。

２８話

Ｄクラスのベースキャンプを去ってから３０分ほど経過した。
松下は一之瀬に会いに行くため別行動をとっており、俺は延々と椎名の話し相手をしていた。
「本当に最悪です。早く船に戻りたいです」
椎名の愚痴が止まらない。
原因は二つあり、一つ目は無人島に上陸してから読書が一切できていないこと、二つ目はクラスメイトに本を語り合える相手がいないことだ。
俺は彼女の愚痴を聞きながら、時折質問を投げて、何とかＤクラスの情報を得ることができた。
椎名から得た情報は以下の通りだ。
・特別試験のルール説明後、龍園が３０分ほどいなくなったこと。
・龍園がクラスに戻ってすぐに特別試験の方針を説明したこと。
・伊吹と金田という男子生徒がクラスから追放されたこと。
気になるのはリーダーである龍園が３０分間もクラスからいなくなったことだ。
Ｄクラスは龍園の独裁政権だ。入学してから初めての特別試験が始まろうとするときにクラスから離れる理由がわからない。
自分だけで考えても埒が明かないので、ベースキャンプに戻ったら松下と平田に相談しよう。
「立花くん、聞いてますか？」
もの思いにふけていると、椎名が頬を膨らませジト目で睨んできた。
なんてあざとい仕草だ。
もし俺が山内だったら、本能に駆られて椎名を押し倒していただろう。
それほど椎名のあざとさはレベルが高かった。
「聞いてるよ。愚痴を零したいのはわかるけど、もっと楽しい話をしようぜ」

「……そうですね、すみませんでした」
「謝らなくていいぞ。椎名にとって耐えられない環境だってことは理解してるから」
「ありがとうございます」
それから俺たちは今月発売される新刊の情報を交換したり、椎名が最近興味を持ち始めた漫画やアニメの話で盛り上がった。
「ふぅ……やっぱり立花くんとお話するのは楽しいです」
「嬉しい言葉をありがとさん。そろそろ戻るか」
気づけば椎名と二人になってから一時間ほど経っている。
点呼もあるので、ベースキャンプに戻らなければならない。
「わかりました。あの……最後にご質問させていただいてもよろしいですか？」
「いいよ」
「立花くんは松下さんと付き合っていないんですよね」
「そうだけど」
「それじゃ軽井沢さんとは付き合っているのですか？」
「軽井沢とも付き合っていないぞ」
これはいい傾向だ。
あまり他人に興味なさそうな椎名まで俺と軽井沢が付き合っているのではないかと疑問に思っているということは、椎名と同様に勘違いしてくれている生徒が大勢いると言うことだ。
軽井沢は美少女だ。
ギャル好きではない俺でも可愛いと思うくらいである。
橋本のようなチャラそうな男子だったり、Dクラスに大勢いる不良たちにとって、軽井沢はストライクゾーンど真ん中の女子に違いない。
今のところ軽井沢に告白した男子はいないようだが、彼氏がいないとわかればアタックしてくる男子も出てくるだろう。
それを未然に防ぐのが俺の役割だ。
俺と軽井沢は付き合っていないが、友達以上の関係を持っていることは事実だ。

はたから見れば付き合う直前の男女と勘違いされてもおかしくない。

つまり、軽井沢への告白を考えている男子たちにとって、俺は障壁なのだ。

別に軽井沢が男子から告白をされるのが嫌なわけじゃない。

問題はそれがきっかけで、軽井沢が嫌がらせを受ける可能性があることだ。

モテる女子は味方も多いが、敵も多い。

これは中学時代に幼馴染から教わったことだ。

女子の嫌がらせは陰湿である。

もしイケメンランキング上位の男子から告白されて、軽井沢がそれを断ったらどうだろうか。

恐らくそのイケメンに惚れている女子が、軽井沢にたいして嫉妬と憎しみを抱くだろう。

歪んだ感情を持った人間は何をしでかすかわからない。

もちろん、何があっても軽井沢を守るつもりだが、俺はただの人間なので限界がある。

俺が出入りできない女子トイレや、更衣室などで被害に遭う可能性も十分考えられる。

軽井沢には女子トイレには一人で行かないよう言いつけているが、生理現象なので緊急を要する場合は一人で行くこともあるだろう。

もし、そんな場所で軽井沢がいじめに遭って、中学時代のトラウマを思い出したら……

「立花くん、大丈夫ですか？」

「……え？」

「お顔が真っ青ですけど……」

「あ、あぁ……」

最悪な未来を想像したら吐き気がしてきた。

このままじゃだめだ。

「椎名、瞑想するから一分待ってて」

「瞑想ですか……？」

「そうだ。よかったら椎名も一緒にやるか？」
「私も瞑想を？」
「気分が落ち着くぞ」
「そ、それじゃ……」
瞑想の効果は抜群だった。
先ほどまで動悸が激しくなっていたのが、嘘のように心臓の動きが標準に戻っている。
「あの、お話の続きをしてもいいでしょうか？」
「いいぞ」
「えっと、軽井沢さんとも付き合っていないということは、立花くんは彼女がいないということでしょうか？」
「そうだ。彼女いない歴＝年齢だ」
「そうでしたか」
「ていうか彼女がいたら、椎名と二人で会ったりしないだろ」
「……え？」
俺がそう言うと、椎名は理解できないような顔つきで声を漏らした。
「な、なんでですか……？」
「そりゃ彼女がいるのに、女子と二人で会うのはまずいでしょ」
それも許容範囲のカップルもいるだろうが、俺はアウトだ。彼女にも男子とは会ってほしくない。
「つ、つまり、立花くんに彼女ができたら……私は、あなたと会えなくなるということですか……？」
「そうだな」
「……っ」
椎名が絶句する。
さらにこの世の終わりみたいな表情になっている。
なんか嫌な予感がしてきた……。
「椎名、それじゃまたな」
「待ってください」
一刻も早くこの場から逃げようと立ち上がった瞬間、椎名に左腕を

掴まれてしまう。
「なら、私を立花くんの彼女にしてください」
人生二回目の女子からの告白である。
いや、一回目の告白は軽井沢からの疑似彼氏の依頼だったので、実際はこれが初めてか。
女子から告白をされるのは嬉しい。
しかも椎名のような美少女の告白ならなおさらだ。
「……椎名は俺のこと好きなのか？」
「はい」
「それは異性として？」
「友達としてです」
「……」
うん、答えはわかっていたけど、少しだけ期待してしまった。ほんの少しだけだけど。
「前にも言いましたが、私には立花くんしか友達がいないんです」
「……」
「もし、立花くんと会えなくなったら……私は、私は……」
思ったより椎名が俺に依存していた件。
俺と椎名は創作物を語り合うだけの友達だ。
軽井沢みたいに部屋で料理を作ってもらったり、松下みたいにバディのような関係でもない。
他人からすれば、趣味が合うだけの、替えがきく友人関係に過ぎない。
それでも、椎名にとっては、趣味を語り合える友人はとても大きなものだったのだろう。
だから、友人を失うことを極端に恐れ、好きでもない男子に告白をしてしまう。
椎名が俺の彼女になれば、今まで通り二人で会えるからだ。
それだけの理由で、彼女は大切なものを犠牲にしようとしている。
もしかして、椎名って地雷女では？
椎名がハニートラップ要員ではないことはわかっている。

もちろん警戒を解くことはないが、今までの付き合いや、先ほどの龍園のやり取りで確信した。

もし、椎名が龍園の駒なら、スパイの役割は伊吹でなく椎名だったはずだ。

俺とも親交があるし、伊吹より椎名の方が可愛いし、保護欲が沸くし、椎名が困っていたら、思春期の男子たちは間違いなく手を差し伸べるだろう。

しかし、椎名はクラスで孤独な時間を過ごしていただけだ。

さらに、龍園は俺と椎名が友達であることも把握していなかった。

つまり、Dクラスの王様は椎名を戦力として数えていないということだ。

椎名は運動音痴だし、コミュ力も低い。ただ、学力は学年でもトップクラスだ。

ミステリー小説もたくさん読んでるから、思考力も常人より高いだろう。

そんな逸材をなぜ戦力として計算しないのか。

まさか――――龍園は椎名が地雷女だとわかっていたのか？

それなら、龍園が椎名を駒として利用しないことに説明がつく。

龍園はわかっていたんだ。

椎名ひよりが地雷女だと。

先ほど、椎名と松下を交換したいと言っていたのも、冗談でなく本心かもしれない。

『地雷女の椎名が怖いから、松下を譲ってくれ……』

『Dクラスはポンコツばかりで、有能そうな椎名は地雷なんだ……』

何だか龍園が可哀そうに思えてきたぜ。

たくましく生きろよ龍園。

Aクラスを譲る気はないけど、Bクラスになれるよう陰ながら応援してやる。

「立花くん、私と付き合いましょうっ……！」

気づくと椎名は膝立ちで真正面から俺の腰に抱き着いていた。

もし誰かに見られたら卑猥な行為をしていると勘違いされてしま

うだろう。
「ちょっ、椎名ストップ！」
「ノンストップです！」
生活情報番組名を言われ、俺の願いは却下されてしまった。
とりあえず椎名を落ち着かせなければ。
彼女が錯乱している原因は、友人を失う可能性を危惧したからだ。
俺はすぐに対応策を考えた。
最初に思い付いたのは、俺と椎名が恋人になること。
これは３０分前までの俺なら非常に魅力的な考えと思っただろう。
なぜなら椎名のような美少女が彼女になるのだから。
しかし、椎名は地雷女なのでこれは却下だ。
椎名と付き合ったら息が詰まりそうな未来しか見えない。
次の候補は、俺以外の友人を作らせることだ。
椎名が俺に執着しているのは読書仲間が俺しかいないからだ。
俺以外にも読書仲間ができれば、俺への依存度は下がると思われる。
俺が知る中で読書好きなのは、綾小路、博士、堀北の三人だ。
しかし、この三人を椎名に紹介するのは躊躇われる。
まず綾小路だが、佐藤がいるのでなしだ。もし、彼を椎名に紹介したら俺は女子から大バッシングを喰らうだろう。
博士はラノベ以外にライト文芸も読むので、椎名が知らない作品をたくさん教えてくれそうだ。
しかし、博士は女子に免疫がない。龍園の気が変わって椎名を利用したら、博士をハニートラップに引っ掛けるのは間違いないだろう。
なので博士もアウトだ。
最後に堀北だが、コミュニケーション能力が低いのでなしだ。
とすれば、俺が折れるしかない。
もし彼女ができれば、彼女以外の女子と二人で会わないと心の中で決めていたが、椎名をこれ以上暴走させるわけにはいかない。
「椎名、落ち着け」
「私は落ち着いています！」

1ミリも落ち着いていないのだが!?
「聞いてくれ、椎名」
「なんですか？　私を彼女にしてくれるんですか？」
「違う。もし俺に彼女ができても……椎名と会うから」
「……え？」
「彼女に許可をもらって、椎名とは今まで通り会うようにする」
「ほ、本当ですか……？」
「本当だ。椎名だけ特別だ」
だから早く俺から離れてくれ。
普通に抱きしめられてもドキドキするのに、下半身に抱き着かれたら、いろいろとやばくなるのだ。
「私だけ特別……」
言い方がまずかったかな。
椎名がうっとり顔で、下半身に顔を埋めてしまった。
「し、椎名さん……。そろそろ離れて……」
「ふふふ、私だけ特別ですか……」
「椎名さーん」
椎名はぶつぶつ独り言を言いながら、五分ほど俺の下半身に抱き着いたままだった。
もし、抱き着いた相手が俺じゃなくて山内だったら、椎名は押し倒されていただろう。
相手が理性的な俺でよかったな椎名よ。
「取り乱してしまいすみませんでした」
椎名が深々と頭を下げて謝罪した。
「いや、俺も悪かったよ」
「立花くんは何も悪くありません」
「じゃあ二人とも悪くなかったってことで。もうそろそろ点呼の時間だから俺はベースキャンプに戻るよ」
「はい。あの……船に戻ったら、また会ってくれますか？」
椎名の十八番。瞳を潤ませながらの上目遣いお願い攻撃だ。
「ああ、すぐには無理だろうけど、連絡するよ」

「約束ですよ？」
「あいよ」
「嘘ついたら、本当に私を彼女にしてもらいますから」
「……え？」
「冗談です。それでは」
椎名は意味深な笑みを向けてそう言い、Ｄクラスに戻っていった。

＊＊＊

ベースキャンプに戻ると、松下から一之瀬のクラスと協定を結んだことを教えられた。
内容はお互いリーダーの指名をしないこと、食料及びベースキャンプの共有である。
うちのクラスは水浴びができる川をＣクラスに提供し、一之瀬のクラスは井戸水を提供してくれるとのことだ。
また、Ｄクラスから追放された男子をＣクラスが保護していることもわかった。
金田というビートルズを尊敬しているのかマッシュルームカットが特徴の眼鏡男子だ。
一之瀬も神崎も、金田をスパイとして疑っているが、怪我していたためそれを承知の上で保護したらしい。
松下との話が終わると、軽井沢が怒りながら話しかけてきた。
「なんで特別試験中に敵クラスの女子と二人きりで会ってるのよ！」
「事情が事情だから理解してくれ」
「その事情って言うのを話しなさいよ！」
「簡単に言うと、俺に彼女ができても友達を止めないでほしいと言われた」
「……なにそれ？」
「椎名って友達が俺しかいないだろ」
「そうみたいね」
「俺は彼女ができたら、彼女以外の女子と二人で会うのはいけないこ

とだと思ってるんだけど」
「ふ、ふーん。いい考えじゃない」
なぜか偉そうに評価しだす純情ギャル。
「あたしも同じ意見よ。彼女いるのに、他の女子と会うのはアウトよね。まして二人きりなんて」
「そうだな」
「あ、あたしも彼氏ができたら、そ、その……彼氏以外の男子と会うなんてしないからっ……！」
「うんうん。それはいい考えだ」
そのまま話は脱線してしまい、恋人ができたらどんな付き合い方をしていくかの話を点呼が始まるまで延々と話し込む俺たちであった。

２９話

夕食後、俺たちＢクラスは協力関係にあるＣクラスの一之瀬、神崎を交えて焚き火にあたりながらミーティングを行った。

椎名から入手したＤクラスの情報を伝えると、松下がＤクラスとＡクラスが協力関係を結んでいるかもしれないと言い出した。

確かに怪しい点はいくつもある。

ＡクラスがＤクラスの生徒を保護していないこと、Ｄクラスにとってもし、Ｃクラスが目の上のたんこぶであること、夏休み前に龍園が仕掛けた相手がＢ、Ｃクラスのみであることなどが理由だ。

あくまで可能性に過ぎないが、これからはそれを考慮して特別試験をこなした方がいいだろう。

ミーティングが終わると神崎だけＣクラスのベースキャンプに戻り、一之瀬はもう少し焚き火に当たりたいとのことで一人残ることになった。

俺たちは気を利かせ、平田と二人きりにさせることにした。

偽物カップルの二人だが、はたから見ると本当に付き合っているように見える。

平田から、週一は必ずデートをしており、お互いの部屋で焚き火の動画を見ていることは聞いていたが、これは偽物から本物のカップルになることも時間の問題かもしれない。

翌日の目覚めは前日よりマシになった。一之瀬からのアドバイスで、テントの下にビニール袋を大量に詰めることにより、背中への負担を劇的に軽減することができたのでまったく痛みがない。

まず川に行って顔を洗い、そのあとに日焼け止めクリームを塗る。

この日焼け止めクリームは学校から支給されたものだ。日焼けに弱い俺にとって欠かせないアイテムなので、無料で提供してくれるのは非常にありがたい。

日焼け止めクリーム以外だと、女子に生理用品も無料で支給可能となっている。

時代遅れの試験を行う高度育成高校だが、最低限の配慮は行ってく

れるようだ。
　瞑想とヨガを終えテントに戻ろうとしたところ、軽井沢が声をかけてきた。
「おはよ」
「おはよう。早いな」
「そっちこそ。何時ごろ起きたの？」
「３０分くらい前かな」
「４時半じゃん。早すぎでしょ」
「５時も十分早いだろ。あまり寝れなかったのか？」
「ううん、７時間は寝たから大丈夫」
「早く寝たんだな」
「だってやることないし」
　無人島試験は私物の持ち込みは禁止されているため、軽井沢の大好きなＫ―ＰＯＰの動画は見ることができない。
「恋バナとかで盛り上がったりしないのか？」
　クラスの女子は夜になるとガールズトークしそうなイメージだ。
「そんなの一時間も持たないわよ」
「そんなもんか」
　てっきり深夜まで話し込むのかと思ったが違ったようだ。
「男子たちはどうなの？」
「それなりに話すけど、話題はいろいろだな」
「ふーん。……す、好きな人の話とかしないわけ？」
「少しはするけど」
「す、するんだ……」
「まあ年頃だからな。そういえば」
「な、なに……？」
「軽井沢と付き合ってるのかと本堂に質問されたよ」
「うぇっ!?」
　軽井沢が驚いたように急に奇声を発した。
「椎名もそうだけど、やっぱり付き合ってるように見える人が多いみたいだな」

「つ、つ、付き合って……」
相変わらず純情すぎるこのギャル。
初めて軽井沢を見たときに五人くらい元カレがいると思ったのが懐かしい。
「ま、松下さんじゃなくて、あたしなんだ……」
「二人でスーパーで買い物したり、部屋に出入りするのを、よく見られているらしいぞ」
「あ、あぅ……」
事情を知らない人が見たら熱中症と勘違いしそうなくらい頬を紅潮させる軽井沢。
「この後、散歩に行くけど一緒に来る？」
「い、行く……っ！」
その散歩で俺は軽井沢の弱点を知ることになる。
それは虫だ。
散歩中に虫が飛んだり、服についたりするたびに、軽井沢の小さな口から可愛らしい悲鳴を発せられた。
都会育ちだから虫が苦手なのか質問したところ、いじめっ子に虫を食べさせられたことが原因で虫嫌いになったと教えられた。
俺は嫌なことを思い出させてしまい申し訳ないと謝った。
軽井沢は気にしないでと笑いながら言っていたが、その笑顔はとても痛々しかった。
そんな笑顔を見てしまったからか、俺は無意識に横を歩く軽井沢の右手を握ってしまった。
軽井沢は驚いた様子だったが、最終的には握り返してくれたので安心した。
ただ、手を握って歩くのは互いに恥ずかしかったようで、無言でそっぽを向いて帰路についた。
朝食はニジマスの塩焼きとコーンだった。
ニジマスは池が釣ったもので、コーンはCクラスから提供された。
今のところ無人島試験においてクラス内で一番評価を高めているのが池だ。

キャンプ経験があるので、テントを率先して建てたり、大量の魚を釣ったり、火起こしもしてくれたりと、大車輪の働きをしている。
さらにテント内では幸村に勉強を教わるなど、自分磨きも欠かさないところもグッドだ。
櫛田と付き合うのは難しいだろうが、この調子なら池を好きになる女子も現れると思う。
昼前、俺は綾小路と二人でAクラスの偵察に向かった。
今回の試験では、葛城を潰すために坂柳派閥の生徒が協力してくれることになっているので、彼らからいい情報が手に入るかもしれない。
Aクラスのベースキャンプ地は、事前に神崎から教えてもらっていたので、すぐに見つけることができた。
「見張りがいるんだな」
洞窟の入り口に門番のようにそびえ立つ男子生徒の姿が見える。
「これ以上近づけばオレたちの存在が気づかれるぞ」
「だな」
「ビニールを使って洞窟の中も見えないようにしている」
「つまり中を見るには門番を倒さないといけないわけだ」
「倒すのか？」
「まさか」
試験中の暴力行為は禁止されている。禁止されていなくても暴力を振るうつもりはないけど。
「こんにちは」
俺は近所のおばさんに挨拶するように門番に声をかける。
「なんだお前ら。どこのクラスだ？」
「Bクラスの立花と綾小路だ」
「なにしにきた？」
「偵察だ。中に入っていいか？」
「帰れ」
当然の答えだ。
ここで「許可する」と言われたら、こちらが焦るところだ。

「わかった。それじゃ」
「……え？」
「なんだよ」
「か、帰るのか……？」
「帰るよ。だって中に入っちゃだめなんだろ」
「もう少し粘ったりしないのか？」
「したら入れてくれるのか？」
「入れないけど」
「だろ。それじゃ葛城によろしく言っておいてくれ」
「あ、ああ……」
俺の潔さに拍子抜けする門番の生徒。
俺たちはゆっくり森の中に踵を返す。
「ずいぶんあっさり引き下がったな」
日陰になる場所を見つけた俺たちは腰を下ろし一休みすることにした。
「無理に中に入ろうとすればトラブルになるからな」
「なら何のために門番の前に出て行ったんだ？」
「俺たちが偵察に来たことを中の連中に知らせるためだ」
「……坂柳派閥の生徒と接触するためか？」
「正解」
Ａクラスの生徒は門番以外洞窟の中におり、いつ外に出てくるかわからない状況だ。
神室たちが外に出るのを待つ手もあるが、長時間ここにいるのは熱中症になるリスクもある。
ならば、向こうから俺に接触してもらうしかない。
そのため、俺は門番と接触した。
他クラスの生徒が偵察に来たのだ。門番は必ず葛城に報告するだろう。
それが坂柳派閥の生徒の耳に入れば、俺に接触してくるはずだ。
「ま、来ない可能性もあるから先に帰っててもいいよ」
「いや、帰ってもすることがないからオレも待つ」

「佐藤が待ってるんじゃないか？」
「佐藤は松下たちと水浴びをすると言っていたから大丈夫だ」
「そ、そうか……」
マジかよ。松下の水着姿見たかった。今から帰れば間に合うだろか。
「ここにいたんだ」
１０分ほどして、一人の少女がやって来た。
神室真澄。
坂柳の手下で、勝気そうな顔つきのロン毛美少女だ。
「神室だっけ」
「そう。立花と……あんた誰？」
「綾小路だ」
「あ、そ」
自分から名前を訊いておいて酷い女だな。
クールフェイスに定評がある綾小路がシュンとしてしまったじゃないか。
「神室一人で来たのか？」
「そうだけど」
「森の中を女子一人で歩くのは危険じゃないか？」
「なに？　私を心配してくれてるの？」
「そうだけど」
「ふーん。優しいのね」
俺じゃなくても誰でも心配すると思うけど。
「それより俺に用があって来てくれたんだろ」
「そう。あんたに協力するのが坂柳の指示でもあるからね」
「もしかしてリーダーを教えてくれたり？」
「残念。私たちは誰がリーダーか知らないの」
「坂柳派閥だからか？」
「そう。葛城って予想以上に慎重な人間だったみたい」
派閥争いをしているからといって、クラスメイトにリーダーの情報を教えないとは、どうやら坂柳はそうとう葛城に警戒されているよう

だ。
「ただ、あんたにとって役に立つ情報は教えられる」
リーダー以外に役に立つ情報か。もしかして……
「AクラスがDクラスと協力関係を結んでいるとか？」
「……っ」
神室の綺麗な顔が驚愕に染まる。
「正解か」
「な、なんで知ってるのよ……？」
「知ってたわけじゃない。その可能性を踏まえてただけだ」
「予想してたってこと？」
「ああ」
「……そう。よかったら理由聞かせてくれる？」
「いいけど」
神室は質問を挟んだりせず、黙って俺の説明を聞き続けた。
ただ、その瞳はまるで俺を見定めているように見えた。
「なるほど。龍園も大したことないわね」
「仕方ないだろ。クラスメイトがポンコツすぎるんだ」
「ポンコツって。ふふっ」
神室が口に手を当てて笑った。
「神室って笑うんだな」
「笑うわよ。ていうか前に会った時も笑ってたでしょ」
「うちの教室でか？」
「そう。あんな感情豊かな坂柳は初めて見たもの」
「そっか。それよりほかに情報ないの？」
「……ない」
「そっか。じゃあ神室がリーダーだと思う生徒教えてくれない？」
「私の予想でいいの？」
「うん」
「合ってるかわからないけど」
「大丈夫。あくまで参考にするだけだから」
「それなら……。私は弥彦か町田だと思う」

「理由は？」
「その二人が葛城派閥の副隊長みたいなもんだから」
「なるほど。つまり葛城が最も信頼を置いている生徒ってわけだ」
「そう」
弥彦は幸村にゲロをかけられた生徒だ。
町田は初めて聞いた生徒だが、櫛田なら交流がありそうだ。
「ちなみに神室は町田と仲良かったりする？」
「するわけないでしょ。派閥も違うし、好みじゃないし」
「あ、そうなんだ……」
「もういい？　そろそろ戻らないと怪しまれるんだけど」
「ああ、いろいろありがとう」
「別に。結局、役に立てなかったみたいだし」
不貞腐れたように神室が言う。
「あ、そうだ。船に戻ったら連絡先交換してよ」
「いいけど。なんで？」
「あんたと一緒にいるとストレス発散できそうだから」
「ストレス発散……？」
「あいつに命令されまくって、いろいろとストレス溜まってるのよ」
あいつって坂柳のことか。
同級生にこき使われるって、何か弱みでも握られているのだろうか。
時間がないみたいだし、今度訊いてみるか。
「それじゃ」
「気をつけて帰れよ」
神室は急ぎ足で洞窟に戻っていった。
さすがにリーダーが誰かはわからなかったが、候補の生徒がわかっただけで良しとしよう。
「綾小路、一言も喋らなかったな」
「ああ」
「あのタイプは苦手だったか？」
「得意ではないな。それにオレに興味なさそうだったからな」

イケメンランキング一位の綾小路に見向きもしないとは、神室の好みは外見じゃないのかもしれない。
「俺たちも帰ろうか」
「そうだな」
「そういえばずっと気になってたんだけど」
「なんだ？」
「首の赤いのどうしたんだ？」
朝からずっと気になっていた。
蚊に刺されたのか、赤く腫れている。
「……虫に刺されたんだ」

＊＊＊

私には嫌いな人間がいる。
坂柳有栖。
私のクラスメイトで、私をこき使う女王様である。
とある事情で私は坂柳に仕えることになった。
仕事の大半は雑用と他クラスの情報収集だ。
あの女は休日でも平気で呼び出すので、私は高一にして社畜な気分を味わされている。
そんな忌々しい坂柳を翻弄する生徒が現れた。
立花恭平。
Ｄクラスをたった一月でＢクラスに昇格させた生徒だ。
そんな生徒を坂柳が放っておくはずがなく、私は坂柳の命令で立花を観察していた。
身長は平均的で、容姿はそこそこ整っていると思う。
ぶっちゃけ外見は私の好み。
高度育成高校が普通の学校だったら私からナンパしていたかもしれない。
ただ問題は中身だ。
立花は極度の心配性だった。

もう病気といっても過言じゃないレベルだ。
あんな性格じゃ彼氏には無理。
付き合っても、ぜったい上手くいかない。
そんなふざけたことを妄想しながら、私は立花の観察をし続けた。
立花の評価が変わったのは、初めて坂柳と接触したとき。
どうやら立花は私たちが奇襲を仕掛けてきたと勘違いしたようで、坂柳の杖を武器と思い込んだまま、バックステップで去って行ってしまった。
坂柳もそんな立花の行動は予測できなかったみたいで、呆然と見送ることしかできなかった。
立花が立ち去った後の坂柳は年相応の少女に見えた。
そうとう苛立ったのか、地団太を踏んで、バランスを崩して転んでしまった。
ざまぁ。
この時、私の中で立花の株がぐんと上がった。
あいつと一緒にいたら、坂柳のみっともない姿がもっと見れるかもしれない。
私の予想は当たった。
期末テストの直前、坂柳は派閥の生徒を引き連れてBクラスの教室に乗り込んだ。
当然、Bクラスの生徒たちは私たちを警戒する。
坂柳はそうとう恐れられていたようで、泣き出す女子もいたくらいだ。
紆余曲折はあったけれど、ようやく坂柳は立花と接触することに成功した。
坂柳は葛城派閥を潰すため、一時的に協力関係を結ぶ契約を持ちかけようとした。
その契約の場で、立花は私の期待に応えてくれた。
Aクラスに凄腕ハッカーがいると思い込んだり、相変わらず杖を凶器と勘違いしたり、天才であることを自負している坂柳を化物呼ばわりしたりなど、もう滅茶苦茶だった。

立花が発言するたびに、坂柳は大声で反論する。
まるでコントを見せられているようだった。
真面目な鬼頭は黙って二人のやり取りを見ていたけど、私と橋本は笑いを堪えるのに必死だった。
やっぱり立花といると面白い。
あいつは坂柳のいろんな顔を引き出してくれる。
なんとかBクラスと契約を結ぶことに成功し、私たちは特別試験中Bクラスに力を貸すことになり、現在に至るわけだけど……
「立花と会えたか？」
「会えた」
洞窟に戻るとすぐに橋本が話しかけてきた。
「Dクラスと協力関係にあることは教えたのか？」
「教える前にわかってたみたい」
「……マジか？」
「うん」
立花は心配性だけじゃなく、思ったより頭が切れるのかもしれない。
いや、あいつならこれぐらい当たり前か。
だって、坂柳の本当の狙いを言い当てたんだから。
「なら、俺たちがBクラスに落ちるのもすぐかもしれないな」
「かもね」
私たちはDクラスまで落ちることになっている。
そして、最終的にAクラスで卒業をする。
これが坂柳の考えだ。
どうも、女王様はAクラスをキープしたまま卒業するのはお気に召さないらしい。
「ほんと、天才って何考えるかわからない」
坂柳は自信があるようだけど、私は疑問的だ。
Bクラスは特別試験に備えて、一ヶ月近くも身体を鍛えていたらしい。
私たちも旅行で何かしらの試験は行われると予想していたけど、B

クラスみたいに準備は行わなかった。
葛城派閥の生徒なんて、試験が実施されるとも思わなかったみたいだし。
さらにBクラスには立花以外にも有能な生徒が多くいる。
リーダーの平田、コミュ力おばけの櫛田、期末テスト学年2位の幸村、生徒会長の妹である堀北など、逸材揃いだ。
そんなクラスに、私たちはDクラスに落ちてからでも勝てるんだろうか。
私はいくら坂柳でも厳しいと思う。
でも女王様の命令は絶対だ。
私も弱みを握られているので、坂柳に逆らうことはできない。
「だな。こりゃ他クラスの移籍も考えた方がいいかもな」
「移籍ね……」
他クラスに移籍するには２０００万ポイントが必要だけど現実的じゃない。
実際、歴代の生徒で２０００万ポイントを貯めた生徒はいないと担任の真嶋からも聞いている。
「それじゃ俺は持ち場に戻るわ」
橋本は手を振りながら男子テントに戻っていった。
その場に残った私はため息をついて、つい愚痴を零してしまう。
「あいつと一緒のクラスの方がよかったかも」